

埼玉県皮膚科医会

会報

Vol.2

50周年記念 平成26年(2014)



埼玉県皮膚科医会50周年記念式典

平成26年5月11日 ラフレさいたま「桜ホール」



会場風景



司会 松本吉郎 常任理事



会長挨拶 仲 弥 会長



開会の辞 伊崎誠一 副会長



来賓の皆様(左より)

金井忠男 先生(埼玉県医師会会長)、若林正治 先生(日本臨床皮膚科医会会長)、
千見寺ひろみ 先生(千葉県皮膚科医会会長)、鎌田英明 先生(神奈川県皮膚科医会会長)、
大路昌孝 先生(東京都皮膚科医会会長)、宇野明彦 先生(静岡県皮膚科医会会長)



功労者表彰者の皆様(左より)

松岡明哲 先生、神野クララ 先生、竹村 司 先生、田谷元佑 先生、大城晶子 先生、
今川一郎 先生、長村洋三 先生、鈴木忠彦 先生



乾杯 竹村 司 参与



チェロ演奏 緒方 大 先生
ピアノ伴奏 小笠原貞宗 様



歌 唱 川口早苗 先生
ピアノ伴奏 小笠原貞宗 様



ヴァイオリン 矢島 彩 様
ピアノ伴奏 河野 紘子 様



弦楽四重奏 『カルテット・アフロディーテ』



閉会の辞 長村洋三 名誉会長

埼玉県皮膚科医会50周年記念講演会

平成26年5月11日 ラフレさいたま「櫛の間」



50周年記念講演会会場風景



講演「メラノーマの診断と鑑別」
齋田俊明 先生（信州大学皮膚科名誉教授）



座長 伊崎誠一 先生

埼玉県皮膚科医会会報

第2号 2014年
(創立50周年記念)

目 次

巻頭言

埼玉県皮膚科医会50周年を迎えて 継続は力なり 会長 仲 弥 1

30周年記念に寄せられた

埼玉県皮膚科医会のあゆみ 故 伊藤 滋 3

祝辞

祝辞 埼玉県医師会会長 金井 忠男 6

埼玉県皮膚科医会50周年にあたって 日本臨床皮膚科医会会長 若林 正治 7

祝辞 千葉県皮膚科医会会長 千見寺ひろみ 8

埼玉県皮膚科医会50周年に寄せて 神奈川県皮膚科医会会長 鎌田 英明 9

埼玉県皮膚科医会50周年を祝して 東京都皮膚科医会会長 大路 昌孝 10

祝辞 静岡県皮膚科医会会長 宇野 明彦 11

50周年に寄せて

超高齢社会における皮膚科医の役割 副会長 伊崎 誠一 12

創立50周年に思うこと 副会長 永井 寛 14

第24回日本臨床皮膚科医会総会 臨床学術大会にかかわった人々 名誉会長 長村 洋三 15

初参加の皮膚科医会の思い出 参与 竹村 司 17

思い出すままに 顧問 石橋 明 18

昔の思い出 一枚会のこと・社保審査委員会のことなど 顧問 北村啓次郎 20

2003年 皮膚病診療 VOL.25 NO.10 掲載

埼玉県皮膚科医会から (座談会) 23

医会報告

埼玉県皮膚科医会 年次事業報告 (平成17年度~24年度) 32

埼玉県皮膚科医会役員一覧

平成17年度~26年度 52

随 筆

東京裁判史観ではなく、戦前の日本人の史観を教訓に

明日の日本を考えよう 埼玉医科大学総合医療センター皮膚科 人見 勝博 55

みちのく哀歌 埼玉医科大学総合医療センター皮膚科 伊崎 誠一 58

ヒヤリ・ハット皆見賞 さいたま市大宮区・今川皮膚科 今川 一郎 60

抜かれた歯に思うこと 春日部ヒフ科医院 矢島 純 63

在職20年 川口市・済生会川口総合病院皮膚科 加藤 卓朗 64

ボストン留学の思い出 春日部市・ようこ皮膚科 桜井 楊子 65

ケヤキ並木の四季 さいたま市中央区・島田医院 坪井るみ子 67

皮膚科医の診察室で② さいたま市見沼区・いしだ皮膚科 石田 卓 69

マイホビー

ゴルフと私とタイガー・ウッズ先生	指扇病院・皮膚科	若旅 功二	71
趣味はラーメンについて語る	自治医科大学附属さいたま医療センター	出光 俊郎	73
チェロの魅力と私	埼玉医科大学 皮膚科	緒方 大	75
私とゴルフ	坂戸市・阿部皮膚科	阿部 稔彦	76

病院紹介

防衛医科大学校病院	皮膚科学講座	佐藤 貴浩	77
自治医科大学附属さいたま医療センター	皮膚科	中村 考伸	78
さいたま赤十字病院	皮膚科	成田 多恵	79
川口工業総合病院	皮膚科	高河 慎介	80

クリニック紹介

高齢者の皮膚科診療	所沢市・おうえんポリクリニック	並里まさ子	81
「ママのおへや」と「モモのお部屋」	飯能市・本町診療所	佐瀬くらら	82
外来手術を続けて26年	さいたま市見沼区・松本皮膚科形成外科医院	松本 吉郎	84

入会あいさつ

自治医科大学附属さいたま医療センター・皮膚科	永島 和貴	85
川口工業総合病院	高河 慎介	85

◆いい店 ♥好きな店

駿河屋	飯能市・本町診療所	佐瀬くらら	86
「よい店、好きな店」	さいたま市見沼区・松本皮膚科形成外科医院	松本 吉郎	88

報 告

埼玉県皮膚科医会 平成25年度 事業報告			90
皮膚の日委員会報告		久保 和夫	94
広報委員会報告		寺木 祐一	95
健保委員会報告		田沼 弘之	96
埼玉県皮膚科医会50周年記念講演会及び式典の報告		松本 吉郎	97
2013年「ひふの日」市民公開講座		石塚 敦子	99
第4回埼玉デルマ会ゴルフコンペに優勝して	春日部市・さくら皮フ科	横井 清	104
埼玉県皮膚科治療学会の記録 1995～2014年		伊崎 誠一	106
会員アンケート 2013結果報告		加藤 卓朗	108

県内地域別医会の紹介

大宮皮膚科医会	坂本 哲也・松本 吉郎	110
春日部皮膚科勉強会	矢島 純	112
本庄児玉皮膚科勉強会	佐々木 亮	113
“川越 Dermatology Club” 開催記録	伊崎 誠一	114

埼玉県皮膚科医会役員名簿および各種委員会名簿			115
------------------------	--	--	-----

埼玉県皮膚科医会賛助会員	117
会則	119
会報投稿規定	121
編集後記	122



埼玉県皮膚科医会 50周年を迎えて

継 続 は 力 な り

会 長 仲 弥

『小さいことを重ねることが、とんでもないところに行くただ一つの道』

イチロー選手が大リーグ年間最多安打記録更新後に語った名言です。彼は昨年日米通算4,000安打も達成しましたが、「4,000本の安打も、1本1本の安打の積み重ね」です。その1本を打つために、毎日の行動を習慣化し、毎年バッティングフォームを変えるなど日々研究と練習を重ねたそうです。その継続の結果として4,000本というとんでもない記録に到達したわけです。一つの物事を長い間継続することは容易ではありませんが、大変重要なことだと思います。埼玉県皮膚科医会は今年で設立50周年を迎えます。当医会を半世紀にわたり継続し、しかも大きな発展に導いていただきました先達の先生方の努力に心から敬意を表します。

振り返りますと、当医会は1964年（昭和39年）11月に埼玉県皮膚科泌尿器科医会として設立されました。当時は皮膚科を専攻する医師は県内でも20名足らずだったそうです。この1964年という年は東京オリンピックが開催された年でもあり、日本はこの時を境に大きく変わったと評されています。高速道路が整備され、新幹線が開通したのもこの年です。余談ですが、日本人が時間をきちんと守るようになったのもこの時からといわれています。そんな時期に設立された当医会ですが、当初は秋間泰造初代会長の下に年1回の講演会が開催されていたそうです。1974年からは田口良男先生が第2代会長を務められましたが、その間、埼玉医科大学の設立を契機に、池田重雄教授のご協力により、年1回の学術集談会を開催できるようになりました。1984年からは伊藤 滋先生が第3代会長を務められましたが、当時の時代背景もあり、就任後間もなく当医会の名称を埼玉県皮膚科医会と改められました。また1985年には竹村 司先生、北村啓次郎教授のご尽力のもと、「一枚会」が開催されるようになり、集談会、講演会の開催数も増加しました。以後、1994年からは竹村 司先生が第4代会長を、また2000年からは長村洋三先生が第5代会長を務められ、2008年には第24回日本臨床皮膚科医会総会が長村会頭のもとで開催され、成功裏に終わったことはまだ記憶に新しいところです。

2010年からは仲 弥が第6代会長を務めさせていただいております。就任後新たに「皮膚の日」行事としての市民公開講座と無料相談会、会員親睦のためのゴルフ大会を開催するとともに、2011年6月にはホームページの開設、2012年2月からはメールマガジン配信を開始し、昨年よりこの「埼玉県皮膚科医会会報」を刊行させていただきました。また医会開催時には毎回「健保Q&A」コーナーを設けましたので、保険の審査についての情報もこの会を通じてかなりオープンになったものと思われま。医療を取り巻く環境は、法改正や医療技術の進歩などにより日々変化しておりますが、私ども皮膚科医にとっては年々厳しくなっているというのが現状です。今後も会員個人では対処しきれない問題が多々生じてくるものと思いますが、その場合にも埼玉県皮膚科医会は大きな拠り所になるものと信じています。当医会の最も大きな存在意義は、同じ埼玉県の皮膚科医として、同様の問題に直面している先生方が、大学の枠を超えて互いに知

り合い、顔の見える交流をし、絆を深めていくことにあるのではないかと考えております。そういう意味でも、今後少しでも多くの会員がこれらの活動に積極的に参加していただければと思います。

当医会は設立以来、会員の先生方を始め、埼玉医科大学、防衛医科大学校、自治医科大学、獨協医科大学の皮膚科学教室や埼玉県医師会のご協力の下に、時代の変化に即応しながら様々な活動に取り組み、着実に発展してきました。その間会員数のみならず、講演会の開催数、出席人数、委員会の数も漸次増え、平成26年1月現在会員数は正会員267名で、賛助会員も含めると300名を超えました。「発心は易く、継続は難し」とよくいわれますが、今後は半世紀にわたり先達が築き上げた組織体制やこれらの諸活動を地道に継続し、発展させていくことが肝要で、それがいずれは大きな力になるものと確信しております。

この度、50年という節目を契機に記念号を発刊することになりました。節目、節目で、過去を振り返り、将来を見通してみることは、非常に大切なことだと思います。お忙しい中、ご執筆頂きました先生方ならびに編集委員の皆様には厚く御礼申し上げますとともに、今後も会員の皆様には当医会活動への一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます、発刊の挨拶とさせていただきます。

(川越市：仲皮フ科クリニック)

第三代会長 故伊藤 滋先生が30周年記念に寄せられた

「埼玉県皮膚科医会のあゆみ」

昭和34年より熊谷市においては、故小林勝三、故木村英夫、小林 喬、古谷 昊、奥野昭三の各氏及び伊藤 滋により熊谷市皮膚科懇話会が数回開かれていた。

昭和36年9月田辺製薬からフルコート・クリームが発売されたのを機に、この懇話会を核としてフルコート研究会が開催された。故秋間泰造、田口良男の各氏も他地区から参加した。数回開かれているうちに、参加者も増え、県の皮膚科医会を設立したらという声が挙がるようになった。

昭和39年には埼玉県医学会が創設されるにおよび、医学会の分科会としての皮膚科医会を結成する機運が生まれて来た。

そんな状況下に昭和39年10月、斉藤 修、田口良男、門倉好夫の各氏が設立発起人となり、設立準備会が開催された。

ところが、当時皮膚科を専攻した医師は県内でも20名に満たず、専門家の団体を結成するのに相応しくない状況であったため、皮膚科泌尿器科を標榜する者、他科で皮膚科も併せ標榜する者にも広く呼びかけ、埼玉県皮膚科泌尿器科医会の名称で発足することとし、昭和39年11月27日設立総会が開かれた。

設立後の講演会を始めとする学術活動については後述することとし、ここでは会の大きなながれについて記してみたい。

設立後10年間は秋間泰造会長のもとで、年1回の講演会が開かれた。続く昭和49年から58年迄の10年間は田口良男氏が第二代会長をつとめた。その間、埼玉医科大学が設立され、昭和48年9月、池田重雄氏が皮膚科学教室の主任教授として着任、皮膚科の診療が開始された。

当会においても大学の協力を得て、昭和51年からは学術集談会を開催出来るようになった。以後は毎年1回の集談会の開催と講演会の開催が例となった。昭和59年5月の定例総会に於て、伊藤 滋が第三代会長に選出された。

伊藤が就任した後、数次の臨時総会の議を経て、今迄不備であった会則を現行のものとし、運営上の問題点も逐次改正された。

■埼玉県皮膚科医会の誕生

昭和59年10月には埼玉県皮膚科泌尿器科医会として出発した当会も次の如き経緯から埼玉県皮膚科医会と改称された。

皮膚科泌尿器科医会から泌尿器科を分離独立させ泌尿器科医会とすることについては既に田口会長の時代の半ばを過ぎる頃から幹事会において数回とりあげられ、事業計画にも「分離を検討」との項目が加えられたのであるが、実現は困難であった。

然し乍ら各大学での皮膚科と泌尿器科の実情はどうであったか。当時の状況は次の如くであった。

戦前、戦中を通し、大学の医学部、医学専門学校共に、皮膚科学教室、泌尿器科学教室が独立しているか、皮膚科泌尿器科教室という名称で、教授も、皮膚科の教授、泌尿器科の教授がそれぞれの教室を主宰されるか、或は皮膚科の教授と泌尿器科の助教授がそれぞれを分担するかして

いるのが普通であった。勿論学校により違いはあったが、皮膚科学教室と泌尿器科学教室とが分離していても教室員の交流はあった。

終戦後、昭和23年頃から各学校とも、皮膚科と泌尿器科の完全分離独立が始まり、遅い学校でも30年代前半には完了した。

当会はこのような状況のなかに誕生したのであるが、昭和51年3月第1回の集談会が開かれて以来、毎年開く集談会には泌尿器科の演題は一題も出されていない。しかも、大学から公立病院その他の病院に出張している泌尿器科医の勉強会が年に数回開かれる他、県医学会総会にも、之等泌尿器科医から演題が出されていたが、何れも当会とは無関係のものであった。

このような実情では「皮膚科泌尿器科医会」であることは無意味であるとし、時代に即さない状況になっている。このようなことから、泌尿器科の分離独立が困難であるとすれば、当会の名称から「泌尿器科」の文字を削除し「埼玉県皮膚科医会」と改称するのが妥当との結論に達し、昭和59年10月の臨時総会において議決、「埼玉県皮膚科医会」として現在に及んでいる。

学術活動としては、集談会、或は1つの疾患をとりあげての自由討論の会、講演会等学術集会の回数も増え、出席人員も回を重ねる度に増加している状態である。

昭和60年7月には埼玉医科大学川越総合医療センターが開設され、慶応大から北村啓次郎氏が着任、皮膚科学教授となられた。防衛医科大学校に関しては、前任の藤田教授時代は参加に消極的であったが、現石橋 明教授になって以来積極的な参加をみている。

又北村教授、竹村 司両氏の尽力により「一枚会」が再興された。「一枚会」について簡単に解説すると、もともと本県には日大出身の皮膚科医が多く、当会の活動が活発でなかった時代に、スライドを持ち寄って、症例について自由に意見を述べ合う集まりが年に数回もたれ「一枚会」と呼ばれていた。

北村教授が川越に赴任されたのを機に、これが再興され、皮膚科医会の事業として運営されることになり、春秋2回開かれている。

平成4年からはこれに加え、真菌症勉強会が年2回開かれている。これは平成5年から皮膚科専門医認定に際し試験が行われることになったための対策である。

結局、学術活動としては、平成5年末現在、集談会を年に1回、講習会、一枚会、真菌症勉強会をそれぞれ2回、計7回の集まりを開催している。

次に関係学会との関係について触れてみよう。

■日本皮膚科学会（以下日皮会と略す）との関係

日皮会東京地方会の例会も演題数、参加人数の増加で、1会場での開催が困難となったため、昭和55年6月から、城東、城北、城西、神奈川の4地域に分割され、それぞれの地域で同時に開かれることになり、埼玉県は主として城西地区の会合に参加している。

又専門医認定制度の確立により、後実績の単位として当医会の集会に対しては年間16単位（4単位宛4回）が与えられるようになったが、平成5年4月からこれが改正され、年間12単位（3単位宛4回）と変更された。

■日本臨床皮膚科医学会（以下日臨皮と略す）との関係

日臨皮の発足については「皮膚科の臨床」第27巻1号に述べられている。即ち、現在の厳しい状況の下、皮膚科診療の適正な発展を期して、臨床皮膚科医が一致団結して事に当たるためには、全国組織としての臨床皮膚科医の団体を結成する必要があるとの意見から、昭和59年7月22日設立総会が開かれ、埼玉県が所属する南関東山静支部は昭和59年11月11日に発足することになった。

発足時の南関東山静支部は会員は318名（うち埼玉県からは69名）であった。当医会からは竹村 司氏が支部長として、宇佐美善政氏及び伊藤 滋が役員として参画した。平成5年12月現在、竹村 司氏が副支部長として、鈴木忠彦、番場秀和、永井 寛の各氏が支部役員として、又大城晶子氏が本部役員として盡力している。

日臨皮の正会員は日皮会々員が構成メンバーであるのに対し、当医会は日皮会々員でなくともよく、設立の事情から、皮膚科医のみでなく、泌尿器科医や外科医、内科医等も会員であり、会員の資格に差があるが、いづれにせよ、生涯教育と、健保問題などが柱であることに相違はなく、地域的な当医会と全国的な日臨皮とは共に目的達成のため緊密な連携を保ち、協力し合うことが必要である。

東京都に於ては、日臨皮設立と同時に皮膚科医会が誕生したため、日臨皮東京支部が東京皮膚科医会であるので総ての点でスムーズに運営されていると考えられる。当県に於ても埼玉県皮膚科医会イコール日臨皮埼玉支部ということになれば理想的な運営が出来ると思われるが、なかなか困難な問題で、遠い将来を期待するしかない現状である。

尚日臨皮に於ては平成元年4月の総会で「皮膚の日」が制定され、11月12日（イイヒフ）を之に当てた。皮膚疾患の無料相談や啓蒙活動等を各地域に於て行い更には健康な皮膚を保つために皮膚疾患の予防及び早期発見へと活動の範囲を広げたいとの考えからである。

当会に於ても平成元年、2年は無料相談会を行い、平成3年には更に加えて講演会も行われた。平成4年、5年には会員の研修のための講演会が開かれた。今後は更に活発な行事が行われることが期待される。

■各種委員会について

伊藤が会長に就任した後、健保委員会を発足させ健保に関する事項につき調査研究等を行って来た。平成4年11月の幹事会では更に学術委員会、広報委員会を発足させ、それぞれの分野で活躍していただいている。

以上埼玉県皮膚科泌尿器科医会として発足した当会が埼玉県皮膚科医会となり、現在の如き活動を行うようになった大きな流れについて述べた。

尚昭和61年10月の総会で賛助会員制を取入れ私共の集会の門戸をパラメディカルな方々にも広く解放することになった。

次に講演会、集談会、その他の学術活動の細部について述べ、設立以来現在に至る役員名簿を記録として記載したいと考える。

(平成6年30周年記念誌掲載「埼玉県皮膚科医会の生い立ちから現在まで」)

祝 辞



埼玉県医師会

会長 金井 忠 男

埼玉県皮膚科医会設立50周年を心からお祝い申し上げます。貴会は、昭和39年11月27日に皮膚泌尿器科医学会として発足し、現在は会員数260名を超える医会へと発展されております。

そして、学術講演会、集談会、症例検討会（一枚会）等を積極的に行い、たゆまぬ研鑽を重ねておられます。同時に、会員の先生方の親睦を図っておられると理解しております。

また、11月12日「皮膚の日」にあたり、「皮膚の日」活動を展開され、県内学校での講演など、学校保健活動にも積極的に取り組んで頂いております。

ホームページの開設、メールマガジンの配信、会報発行など広報活動も活発に行っておられます。

埼玉県医学会は、埼玉県医師会に所属する各医会等の会員をもって構成することとなっております。現在は医会等の分科会は28あります。しかし、ホームページを開設しているものは、皮膚科医会を含め7医会にとどまります。広報の重要性は認識していても、手が回らないのが現状かと思えます。そのなかで、貴会におかれましては、積極的に広報活動を行っておられますことに改めて敬意を表します。

医師会、医学会の大きな役割は、地域医療の充実、生涯教育の推進、広報活動などです。日本医師会もこれらが最も重要と認識しております。貴会は全ての役割をすでに果たしておられることと存じますが、今後さらに推進して頂きますようお願いいたします。

さて、将来の医療供給体制として、病院完結型から地域完結型に、施設から在宅へと変わっていき、地域包括ケアシステムが導入されます。既に、今回の診療報酬改定で方向付けがなされており、皮膚科医会の先生方にも在宅医療に参加して頂く時がやってきたと思えます。先生方は既に検討されておられると思えますが、在宅医療への参加、地域包括ケアシステムへの参加もお願いいたします。

現在、医療界には幾つかの大問題があります。第一の問題は、医療費抑制であり、実質マイナス1.26%と言う今回の診療報酬改定からも分かります。なかでも1.36%の薬価引き下げ分を本体に加えることなく取り上げてしまったことは大問題であり、今回限りにしてもらわなければなりません。日本医師会は今回を例外とするよう働き掛けをしております。自民党国会議員の中にも、薬価引き下げ分は本体に加えることが筋との意見が多くあり、今回だけの例外であることを期待しております。

次に、控除対象外消費税の問題があります。今回の3%増税では、基本診療料に組み込む形となりました。しかし、診療報酬上での手当は限界であり、抜本的な解決が望まれます。埼玉県医師会は、再三にわたり日本医師会に要望して参りましたが、今後も強く働き掛けをして参ります。

さらに、医学部新設、選択療養制度、医師不足・偏在など多くの問題があります。埼玉県医師会は、問題解決のため努力してまいります。先生方には是非ともご協力頂きますようお願い申し上げます。

結びに、埼玉県皮膚科医会の今後益々の発展と会員諸先生方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます、祝辞といたします。

埼玉県皮膚科医会50周年にあたって



日本臨床皮膚科医会

会長 若林 正治

本日は、埼玉県皮膚科医会50周年記念祝賀会にご招待頂きましてありがとうございます。

50年という長きにわたり、地域における皮膚科医療の推進にご尽力頂いたことには本当に素晴らしいことと思いますし、改めて敬意を表する次第です。今から50年前の昭和39年というと、東海道新幹線の開業や東京オリンピックの年ということになります。また、昭和36年には国民皆保険制度が始まっています。その3年後に埼玉県皮膚科医会が設立されており、国民皆保険制度とともに歩んで来られたこととなります。

ところで、日本臨床皮膚科医会も埼玉県皮膚科医会に遅れること20年になりますが、今年で30周年という節目の年を迎えることができました。これもひとえに先生方のご支援の賜物と感謝申し上げます。日臨皮が創設された当時の医療環境を振り返ってみますと、皮膚科単科標榜で開業するというのは非常に少なく、外科や内科の先生が自由に皮膚科を標榜して開業するのが当たり前の時代だったようです。皮膚科を併せて標榜する先生の中で、皮膚科単独で標榜する先生は5～6名に1人という状況でした。皮膚科が独立した存在として扱われることは少なかったようで、当時の医療統計を見ても、皮膚科はその他の診療科に包括されていて単独のカテゴリーとしては存在しません。

日臨皮創設前の昭和50年代半ばというのは、老人医療費が無料の時期でもあり、医療費の急激な増大が国家財政を圧迫するという危機感に溢れていました。日臨皮発足の前年、昭和58年に「医療費亡国論」が発表されますが、国民医療費の動向をみると、昭和55年を境に急激に医療費抑制策に舵が切られていることがわかります。静かに平和に暮らしていた皮膚科診療所にも大打撃を与える状況となりました。

皮膚科が一致団結して事に当たるには全国組織の臨床皮膚科医の団体を作る必要があるのではないかと、皮膚科の将来を案じた先輩方が日臨皮発足に奔走されたと聞いております。しかし、日本皮膚科学会があるのに、なぜ、新たな皮膚科の団体を作る必要があるのかという雰囲気はあったようです。日臨皮は、日皮会が対外的に交渉しにくい健保問題等を補完的な立場でサポートしていくことを目的とし、日皮会とは表裏一体の会であるという意味で、日臨皮会員は日皮会の会員に限定するという立場を取っています。

本来、全国的な臨床医会は、各地域の医会が結集して開業医の団体として学会に対抗する形で医会を立ち上げていることが多いのですが、日臨皮はそうした経緯で設立されたわけではありません。こうした観点からすると、日臨皮は古くからある各地域の皮膚科医会との結びつきに弱点があるとの指摘を受けることとなりますが、日臨皮は全国10ブロックを通じ、また各県支部のご協力のもと、皮膚の日の記事や健保問題、学校保健、在宅医療など各地域との連携を深めてまいりました。今後とも、先生方には日臨皮にご支援・ご協力をお願い申し上げるとともに、埼玉県皮膚科医会50周年という歴史を益々発展されますことを祈念申し上げ、また先生方のご発展とご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝 辞



千葉県皮膚科医会

会長 千見寺 ひろみ

新緑の美しい季節となりました。

埼玉県皮膚科医会 50周年のご隆盛に千葉県皮膚科医会より心からお祝い申し上げます。

東京をはさんで北と南、比較される事の多い埼玉県と千葉県です。

調べてみますと千葉県皮膚科医会は埼玉県皮膚科医会を追いかけるように変遷しております。

埼玉県皮膚科医会は1964年11月27日に発足なさったとお聞きします。

千葉県皮膚科医会は遅れる事5年、1969年4月12日に発足いたしました。

埼玉も千葉も40年以上の歴史と伝統のある医会だと認識いたしました。

何事も新たに立ち上げる事はとても大変です。私達、諸先輩のご苦勞に報いるべく、医会を発展的に継続してゆきたいと思えます。

ところで、医療は1961年より始まった国民皆保険法に守られていて私達医師は比較的品格を保ちながら仕事を続けていられると思えます。

ここに、市場原理主義が導入されたらと思うとぞっとします、「人の命は大事、健康は大事」これは理論ではなく道徳です。私達も患者様に無理な高額な費用を払わせる事なく病氣と向かえます。これも国の国民皆保険法のおかげです。

今後も、国民医療費はうなぎ登りに上昇することが予想され、皮膚科の点数が上がる事は望み薄ですが、ともかくこの保険法を守ってゆきたいと思えます。

日本臨床皮膚科医会会長の若林正治先生は千葉県皮膚科医会会員でいらっしゃいます。厚生省への対応等、若林先生を筆頭に日臨皮関係各位の先生のご尽力により私達臨床医は診療をしたり学問をしたり、平常の仕事を行ってゆけるのだと思えます。

医会（特に千葉県ですが）も、もっと協力せねばと思いつつ自分の能力のなさを理由に若林先生におまかせになっています。

1989年より日本臨床皮膚科医会が11月12日を「皮膚の日」と定めてから患者様に皮膚病の事を知っていただく為、各地で様々なイベントが行われています。

埼玉県では「皮膚の日」の行事に大勢の一般の方の参加があるとお聞きします。千葉県でも肅々と「皮膚の日」の行事を行っておりますが、集客数はさっぱりで今後どうしたものかと悩んでおります。講演の内容が悪いのか、広報が悪いのか等、関係者一同「埼玉から学べ」という思いに至っておりますので、どうかよろしく御指導の程お願い申し上げます。

人口、人口密度、地価、有名附属校の有無などで千葉は埼玉に劣ると言われています。

ですが、千葉県は海に囲まれ自然がとても美しい所です。漁業、農業も盛んですので、おいしいものもたくさんあります。いいゴルフ場もあるとか（私はゴルフしないので）。どうか、皆様千葉の方に足を運んで遊びにいらして下さい。

埼玉県皮膚科医会 50周年に寄せて



神奈川県皮膚科医会

会長 鎌田 英明

埼玉県皮膚科医会創設50周年おめでとうございます。

これもひとえに仲会長をはじめとする会員の先生方お一人お一人のご努力の積み重ねによってなされたものと、心よりお慶び申し上げます。

簡単に50年といっても、その道筋は決して簡単なものではなかったのではないのでしょうか。同じく医会を預かる身として、皆様のご苦勞のほどを拝察いたします。今後も貴医会が更なる発展を続けられることを祈念いたしております。

埼玉県皮膚科医会といえば、竹村 司先生や永井 寛先生を始めとして、私自身にとっては大学同窓の先生方も多く、以前から親近感のようなものを感じておりました。今後とも私個人のみならず、医会同士としてもお付き合いいただければ幸いに存じます。改めてよろしくお願ひ申し上げます。

以前より竹村先生から埼玉県皮膚科医会では各人が一枚の臨床写真だけを持ち寄って、皮膚病に関する議論を戦わせる「一枚会」という勉強会があるということをお聞きしていました。祝賀会にお招きいただいた日にも開催されていましたが、そのように臨床を大切にする姿勢は学会ではない医会の進む道として、私共の今後の医会運営にも大変参考になるものと、今更ながらではありますが、改めてその着眼点に感服いたしております。

さて本年4月に行われた第30回日臨皮総会・臨床学術大会は、私ども神奈川県皮膚科医会を主体とした日臨皮神奈川県支部が担当させていただきました。開催にあたりましては、物心両面において貴医会にも多大なご協力とご援助をいただき、大変感謝いたしております。後先になりましたが、改めて御礼を申し上げます。会頭栗原からの無理なお願いにも関わらず、快く貴医会ご担当のセッションをお引き受けいただき大会を盛り上げてくださいましたことに対しましても事務局長を担当した者として重ねて感謝申し上げます。

お陰様で、予想をはるかに上回るご参加をいただくことができました。開催前にはプログラムの遅れなど種々の不手際もありご心配をおかけいたしました。無事に終えることができ安堵に胸をなでおろしているところでございます。これも貴医会を筆頭に南関東山静ブロック各県のお力添えによるところ大と感謝いたしております。

私ども神奈川県皮膚科医会も再来年夏には50周年を迎える運びとなります。今回、先に50周年を迎えられた貴医会をよきお手本として、また一緒に切磋琢磨していけるお仲間として、今後もお付き合いいただきたいと思います。なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。

この度は創設50周年、誠におめでとうございます。

埼玉県皮膚科医会 50周年を祝して



東京都皮膚科医会

会長 大 路 昌 孝

東京都皮膚科医会の会員を代表し、貴会の設立50周年を心よりお祝い申し上げます。

我々東京都皮膚科医会は1984年に日本臨床皮膚科医会と同時に、その東京支部として設立されました。ですから今年で30周年ということになります。埼玉県皮膚科医会の勝ちです。

貴会が設立された1964年を振り返ると、平凡パンチ創刊、ガーナチョコレート発売、東京モノレール開業、東海道新幹線開通、そして第18回の東京オリンピックが開催された年だと思います。当時の首相は池田勇人氏でした。競馬ではシンザンが菊花賞を制し三冠馬となりました。ちまたでは「明日があるさ」、「柔」、「アンコ椿は恋の花」がはやっていました。私は小学校6年生でした。

その当時の皮膚科の状況を考えれば、このような皮膚科医会を作り、活動を続けていくということは大変な困難があったのではないかと想像されます。

当時はまだほとんどが皮膚泌尿器科だったり、標榜上で他科と並んだ皮膚科ばかりであったと思います。皮膚科というと普通の人がかかりづらいマイナーな科というイメージだったとも思います。医師の数も少なかったでしょう。そのような時代に設立と継続に尽力された貴会の諸先輩方に敬意を表します。

今では皮膚科のイメージもアップし、赤ちゃんや子供から大人、さらにお年寄りまで気楽に受診してくれるようになってきました。そのような変化も貴会のような地域と密着した皮膚科医会の地道な活動の成果だと思います。50年間ご苦労様でした。

日本臨床皮膚科医会という全国組織もでき、そのような活動も全国的に行われるようになりました。全国的といっても基本は各地域の皮膚科医会の活動です。市区町村や都道府県の皮膚科医会の活動が活発であればこそ全国組織も活発に動くのだと思います。

日本臨床皮膚科医会も従来の10支部単位から本来の目標である都道府県単位の支部活動へと軌道を修正しました。貴会も日本臨床皮膚科医会の埼玉県支部としてもますます活発に発展していくものと期待しております。

我々東京都皮膚科医会とはお隣同士ということで、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

貴会の会報の一部を拝借し、貴会の50周年をお祝いするとともにますますのご発展を祈念させていただきます。

祝 辞



静岡県皮膚科医会

会長 宇野 明彦

埼玉県皮膚科医会 50周年誠にありがとうございます。歴史ある医会の式典にお招きいただきありがとうございます。静岡県皮膚科医会を代表して御礼申し上げます。会員相互の有機的な繋がりと過去の医会を支えた方々の熱意により、連綿と医会の運営が続けられ50周年を迎えられたことと思います。

貴医会は既に日臨皮の総会を主催した経験のある成熟した医会だと思います。豊富な人材をもとに組織が構成され学術大会・会報の発行・市民への啓発活動など、多彩な行事も企画されています。

貴医会とは日臨皮南関東山静ブロックを介して日臨皮の活動に協力し、支えていく立場にありますので、私たち医会にとって学ぶ点が多く大変参考になります。

静岡県は皮膚科泌尿器科医会として発足し今年で61年目を迎えました。50年目の節目には200ページに及ぶ記念誌を発行しており、貴重な資料が残されています。当時の医会は症例報告・講演会が中心でした。

現在の会員数は195名、ほとんどが日皮会員です。日臨皮の会員は半数に過ぎません。今年の総会で会則を変更し入会は日皮会員のみ限定し、皮膚科医の医会として新たにスタートしました。

生涯教育・保健指導・市民公開講座・皮膚病無料相談と従来通りの活動は継続し、懇親会・ゴルフ大会を通じ会員相互の親睦を図っております。同時に各種委員会・理事会を通じて日臨皮及び行政との関わりを深め、皮膚科医の立場を高める活動を目指しております。

今後も貴医会とは緊密な関係を保ち、情報を共有していきたいと考えております。伝統ある埼玉県皮膚科医会が益々発展し、影響力を発揮されることを願って挨拶とさせていただきます。



超高齢社会における皮膚科医の役割

副会長 伊崎 誠一

1989年4月、筆者は岩手から埼玉に転勤すると同時に埼玉県皮膚科医会に入会しました。当初伊藤会長、その後竹村会長、長村会長、そして現在の仲会長の時代になりましたが、大宮駅ビルのなかにあったホワイトルームを会場として例会を開催していた頃に比較し、出席者も、皮膚科を専門とする施設も、大学病院も倍増し、内容が大変に充実してきたことを実感します。

1989年は昭和から平成元年、新しい時代への節目でありました。開設間もない埼玉医科大学総合医療センターにおいて私は北村啓次郎教授、平井昭男講師その他の方々との新しい教室作りに参画し、以来25年、単立った皮膚科専門医が20名を超え、皮膚科学教室としての看板を掲げるのにあまり恥ずかしくない程度に成長してきたと実感し、またこれは埼玉県皮膚科医会とともに歩んだ道であったことを痛感します。

医療をめぐる環境を語る時、近年の高齢者問題を避けて通ることはできません。私が埼玉県民になった頃はようやく高齢化社会の問題が指摘され始めた頃でしたが、埼玉県は全国で最も若い県でした。その頃、岩手県では高齢化が進み、筆者は松尾村（現在八幡平市）のリハビリテーションセンター東八幡平病院で定期的な診療を今に至るまで行ってきました。そこでは、褥瘡をはじめとする高齢者のスキンケアや、皮膚科学的問題に従事し、得られた実践的知識・技術を東八幡平病院理事長・院長である及川忠人氏とともに共著としてまとめ、2000年に「高齢者の介護とスキンケア」という単行本を丸善から出版しました。これはいくつかの新聞に書評として取り上げられ、社会的にも評価される内容をもっていました。残念ながらすでに絶版です。正しい知識を、筆者のできる範囲でこつこつと地味に普及させようと考えていた丁度この頃、日本褥瘡学会が全国で設立・活動を開始しました。振り返ってみますとこれは日本中の病院の職員に意識改革をもたらした、意義深い、社会的に大きな活動でありました。筆者も埼玉医大総合医療センターの褥瘡対策委員長を仰せつかるようになり、病院のなかで一定の発言権を保ちながら活動を続けております。皮膚科医が病院の経営や、職員の勤務体制に意見を言える場はなかなか無いのですが、褥瘡対策は皮膚科医の働く貴重な場を提供してくれていると思います。

高齢化が日本の中で最も遅く訪れると思われていた埼玉県にも目に見える変化がきました。65歳以上の高齢者の占める割合が21%を超えると超高齢社会と呼ばれるそうですが、いつのまにか日本中でその「超」が付き、埼玉県でも私の住んでいる周りで新たな建築が始まったとみるとその多くは特別養護施設など的高齢者施設であることに驚きます。日頃の観察に於いても病院の玄関前の駐車場は車いすのために広く空けておく必要がありますが、20年前にはなかったことです。エレベーターには2台も3台も車いすがはいつてきます。外来の診察室の入り口も車いすのための広さが要求され、診察ベッドの高さは身動きの不自由な方の利用を前提として考えないといけません。高齢化とともに悪性腫瘍が増加し、長期入院を避けるため外来手術あるいは1泊入院手術が増えてきました。一方では免疫が落ちてくるために感染症が重症化します。糖尿病合併症としての重篤な細菌感染症が次々と運び込まれます。免疫病も若い方の場合とどこか違う病態を示します。完治が望めない病気が多いわけですが、その時はどこまで治療をするかを患者の身になって、そして家族の身になって考えなければなりません。このような超高齢社会の中で、皮

膚科医の役割が改めて問われていると感じます。皮膚科医会の今後の役割を考える時、忘れてはいけない視点のひとつでしょう。

一時は過剰と言われていたにも関わらず、医師不足が言われるようになりました。これも社会全体の急激な高齢化を計算に入れなかったために起きたことでした。さて、皮膚科医は不足なのでしょうか、またはどの程度が適正なのでしょう。家庭医との関係、総合内科医との関係、病院皮膚科と開業皮膚科の関係など、数の問題だけでなく、治療にあたる実際の疾患内容まで深く掘り下げて考え、制度をデザインする必要がありますが、このようなグランドデザインは日本人にとって最も不得手のことのひとつのようです。皮膚科医会・皮膚病治療学会会員のような専門医集団が、日常の診療に埋もれずに広い視野と深い洞察をもって発言していくことが望まれます。良き皮膚科医を育てるためには、卒前教育における皮膚科学の位置、卒後の初期研修における皮膚科学の位置、に対してわれわれはもっと発言するべきです。そして全国レベルで必要な皮膚科医の総数、そこから計算しての皮膚科を専攻する若手医師の適正な数についてももっと真剣に考えるべきです。

最後に、今年の繰り返しになりますが、“木を見て森を見ず Missing the forest for the trees”にならないよう、“森を見て木を見ず Missing the trees for the forest”にならないよう。

(埼玉県皮膚科治療学会会長・埼玉医科大学総合医療センター 皮膚科)



創立50周年に思うこと

副会長 永井 寛

創立50周年おめでとうございます。私は、昭和52年に日本大学を卒業し、日本大学皮膚科の同窓会で、当時の春日部市立病院の外島一臣先生、岡本竹春先生、大宮赤十字病院の竹村 司先生、大熊一朝先生、川口市民病院の松岡 孝先生、埼玉中央病院の服部晃一郎先生、国立埼玉病院の高野佑策先生、大宮で開業された今川一郎先生、松原団地の佐藤和三先生等、多くの先輩が埼玉県で働いておられ、その先生方と池袋で大いにアルコールを飲んだり、ゴルフを教えていただいたりと、懇意にさせていただきました。その後昭和56年1月から、竹村 司先生に誘っていただいて大宮（現さいたま）赤十字病院に勤務するようになり、他の大学出身の多くの先生方と親しくさせていただくようになりました。

第3代の伊藤 滋会長のもとで、昭和59年10月に埼玉県皮膚科泌尿器科医会から、埼玉県皮膚科医会として独立し、その後、日本臨床皮膚科医会が設立され、私も初期から参加させていただきました。第4代の竹村 司会長になり埼玉県皮膚科医会の会員数が急速に増大し、埼玉県皮膚科治療学会も設立され、財政面でも一気に盛り上がりました。竹村 司先生の日本皮膚科学会、日本臨床皮膚科医会での活躍で、埼玉県皮膚科医会が大いに認知されたと思います。その後第5代長村洋三会長を会頭として日本臨床皮膚科医会総会・学術大会を主催したことは、記憶に新しいと思います。現第6代仲 弥会長は、それまで日本臨床皮膚科医会の副会長を務められていたこともあり、その大きな知識が活用され、今後の埼玉県の若手の育成、皮膚の日行事の充実、会員間の親睦が深められ、ホームページの作成、会報誌の発刊等、急速に事業を拡大されており、とても頼もしく思っております。

今後も益々、病院も診療所も増え、盛会になることは間違いないと思います。大学病院の先生方は日本皮膚科学会で活躍され、勤務医や開業の先生方は、日本臨床皮膚科医会に積極的に参加され活躍されることを願っています。他県の先生方と交流することによって知見を広め、全体をレベルアップする事が大事です。今後、日本臨床皮膚科医会の南関東山静ブロックの事務局が、近々埼玉にまわってきます。埼玉県支部としての活動も始めなければなりません。

今後、この会をもっと充実した会にするには、どうしたら良いのか、どんな内容で行なったら良いのか、若い先生方にどんどん意見を出してもらって、皆にすすんで参加してもらえる会にしたいと思っています。今までの慣例にこだわる必要もありません。自分達でこの会を作り上げて下さい。

大学病院の若い先生方、勤務医の先生方、開業したばかりの先生方、どんどん参加して今後の埼玉県皮膚科医会を盛り上げて下さい。お願いします。

(戸田市・永井皮膚科)



第24回日本臨床皮膚科医会総会 臨床学術大会にかかわった人々

名誉会長 長村 洋三

平成20年5月24日・25日、品川プリンスホテル・アネックスタワーにおいて、第24回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会（以後、本大会と略）が開催されました。もちろん、埼玉県では初めてのことです。

今回は、本大会にかかわった人々について、いろいろのエピソードを混えて、思い出話を書こうと思います。

魚類研究会

本大会では、竹村 司先生に名誉会頭をお願い致しました。先生には、本大会に先立って行なわれた、ゴルフコンペ（常陽 C.C.）、会頭招宴会（ホテル・メトロポリタン・エドモント）の運営をおまかせ致しました。その昔、魚類研究会という、関東の皮膚科医の魚釣りの会がありました。先生とはおそらくその時に知り合ったのが最初だと思います。関東の釣り会は、最近まで続いております。福代良一（金沢大）、香川三郎（医歯大）、飯島正文（昭和大）、新村真人（慈恵医大）、中川秀己（慈恵医大）、大塚藤男（筑波大）などの先生達と釣行したことを思い出します。また、東京湾で、屋形船の窓からハゼ釣りをしたこともありました。

アホウドリ

特別講演は、「絶滅危惧種アホウドリの復活を目指して」という演題で、東邦大学理学部教授長谷川 博先生をお願い致しました。一度破壊された自然を取り戻す事が、いかに多くの時間と労力を費やさなければならないか、痛感させられました。なお、雑談中、先生の奥様が、西山茂夫先生（北里大）の娘さんであることがわかり、世間は狭いものだと思います。

自衛隊中央病院

私は平成元年から5年まで、自衛隊中央病院に勤務しておりました。当時の同僚は、防衛医大出身の柳原康章君（南行徳）、大西善博君、入江広弥君、そして千葉大出身の川上民裕君（聖マリア医大）でした。自衛隊中央病院時代は、4年間と短期間でしたが、文字通り、良く遊び、良く学びの充実した時間を過しました。今でも、彼らを中心に、防衛医大出身の皮膚科医が集まって、時には勉強会、親睦会、ゴルフ大会を楽しんでいます。大西先生には事務局長、入江先生には実行委員、川上先生には、教育講演「これでOK！ 簡単な血管炎」をお願い致しました。

ゴルフ

私の趣味の一つにゴルフがあります。月3回程楽しんでおります。今でも Back から、年間平均グロス90を切ることを目標にしています。本大会に先立って、常陽 C.C. でゴルフコンペを行ないました。久木田 淳（東大）、武田克之（徳島大）、朝田康夫（関西医大）、神崎 保（鹿大）などの先生方も参加して頂きました。常陽 C.C. では、中内洋一、紫芝敬子（日赤）、大城晶子各先生と時に顔を合わせるがあります。

経皮吸収

私は入局まもなくから、外用コルチコステロイドのヒト皮膚の経皮吸収実験を行なっていました。その際、オートラジオグラフィの技術が必要となり、当時、札幌医大の久木田 淳教授の教室を訪ねました。多分、この時が先生と言葉をかわした始まりだと思います。当時は、札幌冬季五輪の直前で、地下鉄に乗り、ジャンプ台などの施設を見学させて頂き、夜はすすき野に招待して頂きました。その後、私の恩師である石原 勝先生（東邦大）の大学葬で、友人代表として弔辞をお願いしに、所沢の教授室に伺いました。また、私が自衛隊中央病院に赴任した際には、所沢で招宴会を開いて頂きました。経皮吸収では大先輩であり、何かとお会いする機会があり、親しくさせて頂いた関係で、本大会の懇親会のご挨拶をお願いした次第です。先生は昨年、突然にお亡くなりになってしまわれました。ここに、生前の格別のご厚情に対して、深く感謝申し上げます、心から哀悼の意を表します。

麻雀

私のもう一つの趣味に麻雀があります。数年前までは、南行徳で、隔月で麻雀大会を開催していました。その昔、関東地区五施設麻雀大会なるものがありました。東邦大、昭和大、慈恵医大、慶応大、関東通信の各チームが、年一回戦うのです。東邦からは富沢尊儀先生、昭和からは香川三郎先生、慈恵医大からは新村真人先生、慶応大からは西川武二先生、関東からは原田昭太郎先生が参加されていました。また、城南地区病院組織検討会が月1回関東通信で開催されていて、会の終了後、必ず、原田先生がメンバーを集められて、五反田の麻雀荘に直行することになっていました。年末には、原田先生主催の大麻雀大会が、五反田麻雀荘を借りきって開催していました。私は一度、優勝したことがあります。その様な関係で、原田先生には、ゆっくと麻雀ができるよう、品川プリンス内に麻雀部屋を用意させて頂きました。

とりとめのない話を長々と書きましたが、亡くなられた方を含めて、懐かしい顔が、時々浮んできました。故人になられた先生には、生前のご厚意に対して深く感謝申し上げます、筆を置きます。

平成26年1月27日

(長村皮膚科クリニック)



初参加の皮膚科医会の思い出

参与 竹村 司

私が初めて埼玉県皮膚科医会（正確には埼玉県皮膚科泌尿器科医会）に参加したのは、第2回集談会が開かれた昭和51年10月であった。会場は秩父市の竹寿館という、かなり古めかしい木造の旅館であった。おそらくこの集談会は、昨年亡くなられた井上 久先生のお世話によるものだったと思う。

泊りがけの埼玉県皮膚科医会は、後にも先にもこの集談会だけだから、今も鮮明に記憶している。17演題の発表後、会員30名弱が大広間にご飯を並べての懇親会は、今思い出しても珍しい光景であった。参加しておられた先生方の中には、今は鬼籍に入られてしまった懐かしい先生が沢山おられた。その時の肩書きに従うと、秋間泰造前医会会長、田口良男医会会長、小嶋理一前東京医大教授、大熊博雄東松山市民病院長、川村太郎前東大教授、藤田恵一防衛医科大教授、伊藤 滋医会副会長、井上 久秩父市医師会長等であるが、現在の若い先生には馴染みのない先生方のお名前であろう。しかしながらこれらの先生方が、当時の若い皮膚科医をご指導され、今日の埼玉県皮膚科医会の基礎を築いて下さった。

昭和59年、埼玉県皮膚科泌尿器科医会は設立20周年を迎え、伊藤 滋先生が第3代会長になられ、先生のご尽力により埼玉県皮膚科泌尿器科医会は埼玉県皮膚科医会と埼玉県泌尿器科医会に分離された。時を同じくして日本臨床皮膚科医学会（現日本臨床皮膚科医会）が設立され、全国的に皮膚科医の活動が活発になった。その背景には皮膚科の勤務医、開業医の絶対数の増加があった。そしてこれら皮膚科医の増加が埼玉県皮膚科医会をも活性化した。

埼玉県皮膚科医会としての集会は、20周年を迎えた頃から徐々に増えてきた。これまでは年1回の集談会、1回の講演会が原則だった。会場も特定の場所ではなく、大学や種々の施設を借りて開催していた。昭和63年10月からは今も続く一枚会が誕生し、集談会や講演会の年4回開催が埼玉県皮膚科医会に定着した。会場も大宮駅のホワイトルームを毎回利用していたが、ホワイトルームの閉鎖にともない、ラフレさいたまで開催されるようになった。この間埼玉県皮膚科医会の会長は、伊藤 滋先生が平成6年まで、次に私が、そして平成12年からは長村洋三先生が、さらに平成22年からは仲 弥現会長へと変わった。

私が埼玉県皮膚科医会に入会した当時を振り返って見て、現在の皮膚科医会の規模、会員数、集談会の内容等には驚くべきものがある。同好会と医学会程の違いがあるのではなかろうか。一言で言えば埼玉県皮膚科医会も大きく、そして立派になった。

(志木駅前皮膚科)



思い出すままに

顧問 石橋 明

埼玉県皮膚科医会が50周年とのことですが、私が埼玉県皮膚科医会の一員にさせて戴いたのは、その発足より15年ほど後の昭和53年に三鷹市の杏林大学から横江りで防衛医大に転じ、藤田恵一教授のお世話になることになった時です。その藤田教授は、任期半ばでクモ膜下出血で急逝されましたので、時恰かも東大を退官される久木田 淳教授がショートリリーフで赴任されました。

その後は私が継ぎ、多島新吾教授、佐藤貴浩教授へと引き継がれ、杏林大学、北里大学とともに戦後最初に新設された防衛医科大学校の皮膚科は一昨年第5代教授を迎え、防衛医大は昨秋創立40周年記念式典が施行されました。早いものです。

埼玉県皮膚科医会を振返った時、いつも少々気になっていたことがあります。それは、防衛医大のある所沢と浦和・大宮地区との交通の便が悪いためもあって、官舎や所沢界限に住んでいる教室員の足が向き難く、皮膚科医会に余り積極的でなかったのではないかということです。車での移動については今もさほど道路事情が変わっていないと思いますが、鉄道については、元々貨物線として発足した JR 武蔵野線などは、今でこそ10分に1本位あり、通勤時間帯などは相当な混雑振りですが、当時は1時間に2本位しかない本当のローカル線で、府中競馬、西武園競輪、戸田ボートレースのお客さんが主体のジャンブル路線といわれた程でした。ですから電車を利用する場合は、一旦池袋に出るか、30分待ちを覚悟するかのどちらかでした。私自身東京西部に住み、吉祥寺、国分寺、東村山経由で電車通勤していましたので、埼玉県皮膚科医会の開かれる日曜日には別方向に一寸遠出するという感じでした。

最近では会員も増加して副都心のラフレさいたまで開かれるのが恒例となったようですが、以前は大宮駅ビルのルミネ内で開催されており、何回かは浦和の医師会館にも行ったかと思います。

当時は小人数でしたから和気藹々の雰囲気があり、会長の大宮日赤部長（当時）の竹村 司先生の発案で、臨床写真スライド一枚だけあれば病理組織その他の検査データがなくても気軽に持ち寄って、ビールでも飲みながらの気楽な症例検討会“一枚会”をやろうということになり、本当に缶ビールが配られ、飲みながらワイワイ discussion したものでした。

現在行われている一枚会以外の一般演題は、病歴のスライドから始まり、臨床像、血液検査、病理組織、免疫蛍光抗体法、免疫組織化学、デルマトスコープ、超音波エコー、CT、MRIなどのデータを揃えた高レベルな症例報告で、まさに日皮会の埼玉県地方会、あるいはミニ or プレ東京地方会といったものになっています。

しかし一枚会は発足当時の趣旨が踏襲されて、臨床像だけで診断、鑑別診断を考える。次いで組織やデルマトスコープ、その他の検査データを示し、再びみんなで診断を考え、疑問点を質し、出題者が診断を提示してさらに討議するという、地方会その他の一般的な進め方とは一味違ったやり方で、興味をそそられ出席意欲が高まるものとして継続されています。

この様な手法は、東京医大主催の西新宿皮膚科研究会という新宿区、杉並区、練馬区の実地皮膚科医を対象とした勉強会や、はたまた雑誌 Visual Dermatology の Quiz などにも通ずる皮膚科専門医の眼力、診断力が意識されるもので、日常の実地診療と直結した手法として広がりを見せています。

この一枚会や一般演題以外にも、全国から専門家を招いて行われる特別講演会があり、最新・先端の知識・情報・知見を得ることができます。まさに日皮会の埼玉地方会の様相を呈しています。他方、日皮会の東京地方会は土曜日ですから、地域医療に励んでおられ、特に土曜日が書き入れ時で御多忙な先生方には出席し難いでしょうから、日曜日に開催される埼玉県皮膚科医会は、保険に関するQ&Aなどもあることですし、実地医家にとって大いに役立ち、貴重な卒後教育、専門医の生涯教育の場としてその存在意義は大きいものと思われまます。また閉会後の情報交換会は、それぞれビールを片手に、生の経験、本音の情報、意見等を直接交換し合うことができ、また親睦を図る良い機会にもなっています。

代々、意欲的な先生が会長を継承してこれ、この会報が刊行されるなど、益々発展して行くことでしょう。

さて、入会当時からの会員で懐しく偲ばれるのは、今は亡き、元会長の熊谷市の伊藤 滋先生です。大変温厚な方で、かなり多勢の会員が招かれて水産会社直営のお店で新鮮で本当に美味しい蟹を鱈腹御馳走になり感激したことを思い出します。個人的によくゴルフをご一緒させていただいた春日部市立病院の外島清臣先生、その春日部を継いだ岡本竹春先生、富士見野の大熊一朝先生、浦和の伊藤建城先生、埼玉医大助教授の田嶋公子先生、また時々蘊蓄を傾けて下さった金沢大学名誉教授の福代良一先生、御厚誼有難うございました。皆様の御冥福をお祈り致します。

最近、医会、学会等でお見かけしていないのは埼玉医大の池田重雄、北村啓次郎の両教授です。北村先生といえばゴルフが頭に浮かびます。下手くそなのに達人の北村先生らと一緒に埼玉県皮膚科医会懇親ゴルフをやらせていただきました。田谷先生、番場秀和先生、竹村先生、永井 寛先生、鈴木忠彦先生、池村郁男先生、更には長村洋三先生達が懐しく思い出されます。

私は防衛医大を停年退官後、狭山市の石山病院にお世話になっていましたが、その病棟部分がM&Aで狭山ヶ丘に新設された並木病院に移り、縮小されて外来だけが石山クリニックとして残されました。現在はそこで週1回細々と皮膚科診療を続けていますので、埼玉県皮膚科医会との連がり首の皮一枚残った状態ですが、思い出すままに書かせて戴きました。

(防衛医科大学校 名誉教授)



昔の思い出 一枚会のこと・社保審査委員会のことなど

顧問 北村啓次郎

はじめに

私は、昭和60年（1985年）6月に川越に赴任し、7月から診療を開始したわけですが、当時、医局には3人の同窓の医局員が居たので比較的にぎやかに仕事をする事が出来ました。しかしその頃の埼玉県にはよく知っている同窓の人は、泌尿器科の池田直昭先生（悪直先生）と朝霞市の大城晶子君くらいで、殆んど知り人といえる人が居ませんでした。

県には古くから皮膚科医会があり、私が埼玉に行った頃の会長は、温厚な伊藤 滋先生で、暖かくむかえ入れて下さいましたが、よく知っている先輩ではなかったし、何か淋しい思いを抑えながらの不安なスタートでした。

その頃、県の皮膚科医会で最もまとまっていたのが、竹村先生を頂点とした日大同窓の人達でした。私は大学の医局員として赴任したのですが、川越地区を中心とした地域医療を担当するわけで、県の皮膚科医会に出席するのは当然の義務と思い、出来る限り医局員全員で出席するようにしていました。

当時の皮膚科医会は、年1回の集談会（学会形式）と数回の学術講演会が主な活動でしたが、その会の終了後、日大の人達が、“これからアフター・ミーティング（after meeting）をやるので、北さんも来ませんか”とさそって下さり、以後はいつもこのミーティングにも出席するようになりました。そこで竹村先生、今川先生以下、宇佐見善政君、永井・前岡・高田君など多くの人と知り合ったのです。そのお蔭で随分と気持も楽になったし、日頃のストレスも解消され、15年間も埼玉での仕事が続けられたんだと思っています。

今回は、この15年間で私の印象に残っている2・3の思い出について述べてみたいと思います。

(1) 一枚会のこと

昭和60年代の県皮膚科医会の活動は、症例検討会としては年1回の集談会のみで、他は学術講演会でしたから、他の施設の症例を見せてもらう機会も少なかったし、会員のもり上りもやや弱い様に思われました。

それで、いつものアフター・ミーティングで“皮膚科医会としての集会をもっとふやして、特に症例検討会のようなものを多くしたらどうでしょうか”と云う提案をしてみました。そうしたら竹村先生が、“県にも、主に日大グループがやっていたんだが、一枚会とって気になっている症例の臨床写真1枚のみを出して、それについて思いつくことを何でも言い合う会があったんだ。これは会に出す準備もしなくて良いので実に出し易い会なんだよ。しかし、こここのところやってないな”と云われたのです。“一枚会！ その名称も印象的だし、十分な準備なしで気軽に出せる。実にユニークで庶民受けしますね。一枚会をぜひ復活させましょうよ。”と云ってその場は終りになりました。

その後、私は自分の医局の診療・教育に忙しく、一枚会のごことは忘れていました。ところが昭和63年10月1日に第1回一枚会として復活したのです。この時、誰かに特別講演をやらせてもら

うと思うが、誰が良いかとの問いかけがあったので、当時、立川共済の医長だった木村俊次君を推薦したのを覚えています。

以後、年2回ほど本会が開かれるようになり、皮膚科医会の集會がふえることになりました。“一枚会は北村先生が作ったんだ”との声を聞くこともある様ですが、それは大きな間違いで、私は集會がふえることを提案しただけで、実務は全て竹村先生や県皮膚科医会の幹事の方々がやって下さったのだと云うことをお忘れなく。以後、県皮膚科医会の活動は、「皮膚の日の催し」や、「日本臨床皮膚科学会総会」の主催など、その発展は目ざましく、大変喜ばしいことと思っています。

(2) 皮膚科治療学会のこと

当時、医局の研究費は、大学当局からもいくらかは出ましたが、大部分は国に申請して認められると出してもらえる研究費と治験費であったと思います。ところがこの治験費にも税金がかかるということで、大学当局とくに薬剤部が全額を管理するということになってしまいました。そうすると研究費は研究のみにしか使えず、飲食費は当然としても、学会出張費やいろいろな謝金さえも制限を受けることになりました。これでは医局で自由に使える金は一文もなく、全て自前でやれというに等しいことになります。医局秘書や研究補手も大学では雇ってもらえず、全て医局員から集めた金で解決していかねばならぬ様になりました。私は本当に困ってしまいました。

そこで治験を医局でやるのは止めにして、何かの研究団体を作り多施設で同じ治験をやり、それで得た研究費は団体が管理し、各々の施設に必要なに応じて分配するようにすれば、各施設とも少ないけれども自由に使える金が入るのではないかと考え、竹村先生に相談してみました。どうしたらそんな調子の良いシステムができるかと云うことは私には、全く考えられません。

ところが、しばらくすると埼玉県皮膚科治療学会という県の皮膚科医会とは別の、主として皮膚病の治療についてのみを検討する学会が立ちあがったのです。そこで治験も行なわれることになり、各施設・医局も若干の潤いを持つことが出来るようになりました。

この会は、竹村先生の行政力・実行力がなければ到底なし得なかったでしょうし、多くの人達の同意・賛成も得られなかったであろうと思います。私共の医局も上述の若干の潤いにかに助けられたか、ここに記すまでもないほどであります。

(3) 埼玉県社会保険審査委員会のこと

私が大学を退官する2～3年前に、突然、病院長から保険委員をやるようにと命じられました。私は大学全体の保険委員の取りまとめをやれば良いものと思い、命じられるままにこれを引き受けたのです。

ところが、これが社保の審査委員だったのです。それ迄、保険診療は気にせず、良心にのっとり、学問的に無理のない検査・治療なら何をやっても良いと指導してきた者が、一夜にしてその対側に坐らされたのです。人の診療を審査するなんてとんでもない事です。また保険のことは何も知らないのです。ほんとに困りました。審査委員会の初日に、委員会理事の先生が1時間位のクルズスをやってくれましたが、それは総論的な事だけで、あとは適宜やって下さいと云うわけです。

当時、東京都の社保審査委員会には委員たちが長年の事例を集め審査の基準をまとめた小冊子がありました。そのコピーを密かに手に入れ、数日間、猛勉強して審査にのぞみました。県の委員会では1ヶ月に約1万5千枚くらいのレセプトを審査しましたが、毎月4～5日はかかります。殆どどのレセプトは良心的で問題ないのですが、毎月、数百枚は何か1人では査定しかねる事項を含んだものがありました。

当時、竹村先生が、皮膚科の委員長だったので、これらの問題を含んだレセプトを毎月チェックしてもらいました。半年～1年位それをやってもらったところ、殆んどは自分で審査できるようになったのです。私が委員会に出はじめた頃の委員は、5人で私のほか、竹村先生・番場・田谷・原田先生たちでしたが、彼らにもよく困ったレセプトの相談をしたものです。その後、若干の委員の入れ替えがあり、鈴木・田沼先生たちとも仕事をしたことが思い出されます。また他科の委員の方々とも知り合いになり、今でも付き合っている友人ができたことも楽しい思い出です。おかげで、以後8年半、委員の定年まで審査委員を務めることになりました。その間、多くのレセプトを見た結果、病名もれや異常に多くの検査、考えられないほど無茶苦茶な治療などは査定されて当然だと思いますが、本当の悪は、傾向的診断・治療・検査でしょう。例えば1千枚のレセプトのうち200枚以上に同じ病名・治療をやってくる施設があることを知りびっくりしたものです。しかし、これはコンピューターが審査するようになると全部通ることになるのでしょうか。このような良心のない医者が居る限り、いつまでも審査委員会が必要となるのでしょうか。

この委員会での仕事は、私には未知の世界でしたし、教えられた事も多く、実に有意義で楽しい経験であったと感謝している次第であります。

おわりに

先日、ある会合で現会長の仲君に会いました。その時、今度、埼玉県皮膚科医会が発足50周年を迎えるので、記念に何か思いつくことを書いてくれと云われました。私は退官後、全ての付き合いや書き物とは訣別して、余生を楽しく送っているのです、そういったストレスは遠慮したいことになりました。しかし仲君は見かけとは違って意外に頑固なところが有り、しつこく付きまわって来て、とうとう承知させられてしまいました。それで、いくつかの事柄について思い出しながら書いたのがこの拙文です。

内容的に云うと、竹村先生の思い出のようになっていますが、私が先生から多くのことを教わり、色々とお世話になり助けられたことが、私の埼玉県での仕事の上で重要な位置を占めているのだから仕方がないのです。

竹村先生は、“僕は何もしてないよ”と云うに違いありませんが、何か思いつく話を書けと云われると、こうなってしまうのです。皆さん申し訳ありません。

また写真も一枚つけろと云うのですが、私の老醜姿の写真などはとっておりません。仕方がないから還暦の頃の写真を付けておきます。これまた悪しからず…。

(元・埼玉医科大学総合医療センター皮膚科 教授)

埼玉県皮膚科医会から

(2003年5月24日収録)

<出席者>

竹村 司<司会> 志木駅前皮膚科	長村 洋三 長村皮膚科クリニック	伊崎 誠一 埼玉医科大学総合医療センター 皮膚科教授	仲 弥 仲皮フ科クリニック
永井 寛 さいたま赤十字病院皮膚科部長	加藤 卓朗 済生会川口病院皮膚科部長	大西 善博 防衛医科大学校皮膚科講師	

1964年(昭和39年)に埼玉県医師会の埼玉県医学会の分科会として皮膚科泌尿器科医会ができました。20年ほどその状態が続きましたが、1984年に皮膚科と泌尿器科に分かれました。それから今年で19年、来年は皮膚科泌尿器科医会ができてちょうど40年になります。その間の会長は初代が秋間泰造先生、田口良男先生、伊藤滋先生、それから私、竹村になって、現在は5代目の長村先生です。

皮膚科泌尿器科医会にはこの座談会に今日出席している先生のなかでは私しか参加していないと思います。そのころは埼玉医科大学や防衛医科大学校が開設されたばかりでしたし、防衛医大の藤田恵一先生、埼玉医大の池田重雄先生もまだお若く、年に1～2回ほど会をもちました。その後、皮膚科医会として独立してからは伊藤滋先生のご尽力と埼玉県の人口が増えてきたことも皮膚科医会が大きくなった要因だと思います。

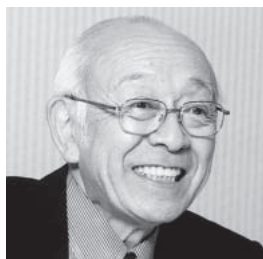
私自身も1971年に当時の大宮赤十字病院にきましたが、そのころの埼玉県には総合病院は本当に数えるほどしかありませんでした。現在、総合病院はたくさんありますし、大学病院も川越に伊崎先生の埼玉医大総合医療センター、獨協医大越谷病院、自治医大大宮医療センター、それから北里研究所メディカルセンターが北本にできました。このような背景があるので、埼玉県皮膚科医会はさらに大きくなっていくと思います。皮膚科泌尿器科医会については私自身もあまりよく知りませんので、本日は1984年以降の皮膚科医会になってからのお話が中心になると思います。

会員数、おもな集まり

竹村 本日はお忙しいところお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。埼玉県皮膚科医会の過去と現在そして未来について先生方にお話しただけだと思います。まずは、現在の会員数それから皮膚科医会としての集まりについて長村先生からお話しいただきます。

長村 2003年3月現在、正会員が246名です。こ

のうち日本皮膚科学会会員は86%ですから、ほとんどの先生方は日本皮膚科学会(日皮)の会員です。皮膚科の先生を対象にしておりますのでこれは当然といえます。また、日本臨床皮膚科医学会(日臨床)の会員は51%と約半数です。次に日本皮膚科学会の認定医の取得者、要するに専門医は半数の48%です。この数字は少ないと思いますが、防衛医科大学校、埼玉医科大学、埼玉医科大学総合医療センター、自治医科大学大宮医療センターとい



竹村 司先生



長村 洋三先生



伊崎 誠一先生



仲 弥先生

うような4つの大学病院が医会に入っていることから、若い先生が会員になっています。まだ専門医資格を取得していない先生が多いためだと思います。

日本医師会の会員は66%です。ほとんどの開業医の先生が入っていますが、やはり勤務医の先生が多いということだと思います。現状については以上です。なお、日本皮膚科学会の専門医の後実績はこの学会は3単位です。年間4回で12単位です。私としては3単位というのは少ないのではないかと非常に不満に思っています。

また、埼玉県皮膚科医会は5月に総会と一枚会を行っています。9月に集談会、11月に皮膚の日、学術講演会、一枚会、1月に埼玉県医学会総会と学術講演会を行っています。これら4つがメインになります。これらとは別に皮膚真菌症研究会を行っていましたが、現在はどうですか。

永井 これは第10回で終わっています。出席がだんだん悪くなってきましたし、スポンサーがもうそろそろということがありました。

竹村 北村啓次郎先生から伺ったお話では、最初から10回くらいということでしたが。

永井 若い先生が真菌の勉強をするためということで始まったのですが、若い先生の出席がだんだん悪くなってきたこともありますね。

一枚会

竹村 埼玉県皮膚科医会には「一枚会」という会があります。そのことについて永井先生から説明してください。

永井 少しピンぼけでもかまわないから、開業

医の先生でも勤務医の先生でもみなさん集まっていたいて、できればビールでも飲みながら気楽に症例検討をしたいということで、埼玉県の「一枚会」というのが始まりました。第1回が1988年10月1日にありました。現在は5月と11月の年に2回行っており、これまででおよそ30回行っています。

だんだんと堅苦しくなってきたところもありますから、もっと気楽に、まだ診断のついていないような珍しい症例や、この1枚の写真のどうでもみんなにみせたいというような症例をもち寄った会であればと思います。このような会はほかの県にはあまりないことだと思いますので、このような「一枚会」という活動をこれからも続けていきたいと思っています。

長村 「一枚会」では学会当日までどういう演題が出されるかを座長はまったくわかりません。たいへんな点もありますが、まったくインフォメーションなく座長をするわけですから、それが面白い点であると思います。

永井 座長も当日決めますので、できるだけ若い先生にも座長をしていただいて、お互いに勉強し合うという会です。

伊崎 永井先生は気楽にとおっしゃったのですが、1枚スライドが出て、そこから診断を考えているうちに、司会者が聴衆を指名したりします。聞いているほうとしてはかなり緊張感があります。ですから決してやさしい会ではありません。そういう意味で面白いと思います。

長村 インフォメーションが少ない分だけ、むずかしいといえばむずかしいですね。

仲 臨床スライドと現症と現病歴だけでどのよ



永井 寛先生



加藤 卓朗先生



大西 善博先生

うな疾患かを推理しなければいけません。そういう意味では探偵になったつもりで、真剣に考えて自分なりに答を出しますので、かなり勉強になります。このような場に若い先生方が大勢参加してくれると、皮膚疾患の診断をどのように考えていったらいいのか、ということがわかり一種の教育の場になると思います。また、もう少し日常的にありふれた疾患をとり上げたほうがよいのではないかと思います。あまり珍しい病気ばかりでは、そういうものがあるのだ、で終わってしまいます。普段われわれがみるようなありふれた病気の中で、少し考えなければ誤診してしまうような疾患を出していただくと、さらに勉強になるのではないかと思います。

大西 とくに大学からは、問題になっている結論が出ていない症例をもっていくべきなのだろうと思いますが、若い先生が緊張してしまうのか、どうしても結論のついた症例を出したがる傾向があります。

仲 学会の練習の場みたいになってしまっているところが少しありますね。

長村 若い先生には、それでもいいと思います。

仲 全部の症例でなくてもかまいませんので、1題か2題は教育的な症例があるといいと思います。

加藤 私の病院でも毎回1題出そうと思っています。逆に診療中にそういう患者さんが来ると、これは「一枚会」向きだなと考えることがあります。若い先生に出してもらおうと思っていますので、そういう患者さんは一緒にみたり、考えたりして勉強になります。

長村 一枚会はそもそもどのような経緯ではじまったのですか。竹村先生や日大関係の先生方が始められたのですか。

竹村 宇佐美善政先生の発案で、皮膚病の臨床スライドを1枚もってきて、酒を飲みながら気楽に症例検討をしようと、飲み屋で臨床スライドを映してやっていました。気楽すぎて途中からカラオケ大会などになってしまったこともありましたが、たまたま出席者が埼玉県の先生が多かったので、これを埼玉県皮膚科医会にもっていきこうと酔った勢いで話が決まり、北村啓次郎先生にとり上げていただき、それが現在のものになったわけです。

当初は缶ビールを飲みながらやっていたから、またビールでも飲みながらというのも1つの考えかもしれません。飲めば恥をかくのも平気になるでしょう。最近は少し堅苦しくなりすぎたところがあるようです。

保険について

長村 竹村先生に年間1~2回、健保のことについてお話しただいていおります。健保便りのようなことは他の地域の医会ではあまりやっていないと思います。

竹村 風通しのよい審査でなければいけないということ、レセプトが返戻されたり、査定されたりということができるだけないようにということから、会員の先生方が疑問に思っていることを質問していただき、それに対して返答しているものです。社保でみますと埼玉県の中でも皮膚科領域のレセプトが再審査として組合から返戻されてくる数はかなりありますが、組合から返ってくるも

ののほとんどは他科の先生が皮膚科をご覧になっているものです。そういう点では埼玉県は風通しがよくなっているだろうと思います。

長村 埼玉県皮膚科医会に入っている開業医の先生方は保険のことについてはかなりフラストレーションがあるのではないのでしょうか。それを竹村先生にぶつけて解決しているところがかなりあると思います。

伊崎 こういう会にいらっしゃる先生は熱心に勉強をされていますね。

仲 このような会が年に1回でもあるととても助かります。なぜ査定されたのだろう、どうして通らなかったのだろうと疑心暗鬼にふつうはなってしまうのですが、会に出席しているとその理由もきちんとわかりますし、聞くことができます。そういう点では埼玉県はとても恵まれているのではないかと思います。

永井 返信用葉書を使って保険問題についての疑問な点、聞きたいことをできるだけ書いてくださいと皆さんにお願いしているのですが、やはり書くとなると引いてしまうところがあるようです。現実には質問事項があまり受け付けられていません。質問者について発表するわけではないので、もう少し気楽に書いていただけるといいと思います。

長村 たしかに1人質問するとけっこう雰囲気が変わりますよね。

仲 保険は県によって解釈が違うところがあるのですが、それを会の中である程度説明していただけますので、納得できます。そういう点ではたいへん助かっています。

竹村 知らない先生が多いと思いますが埼玉県皮膚科医会主催で、社保と国保の審査員の先生が集まって、審査上のいろいろな問題点を昔から検討しています。

仲 日本全体での集まりですか。

竹村 埼玉県の中での集まりです。埼玉県医療行政懇談会という名称で皮膚科医会の会長が招集します。毎年ではなく、1年か2年に1度はそのような会を開いています。ですから会員の先生方から

の要望や疑問については、いつでも皮膚科医会のほうに寄せてもらえば、検討しておりますし、役員会でもそれらの問題については話をしています。

埼玉県皮膚科治療学会

長村 これは竹村先生にお話ししたいのですが、竹村先生が会長でいらっしゃる埼玉県皮膚科治療学会があり、埼玉県ウイルス研究会もごさいます。埼玉県皮膚科医会との関係についてお話しください。

竹村 埼玉県皮膚科治療学会については、副会長の伊崎先生にお話ししていただきたいと思います。

伊崎 埼玉県皮膚科治療学会は1995年の初めてのころに竹村先生のリーダーシップで、いろいろな薬物の効能がきちんと出ているかどうかについてわれわれが自主的に検討すべきであるということ、効能を調べると同時に副作用も調べるべきであるということから始めました。併せて、臨床の側からたとえば不都合なことを製薬会社や厚生省に対して発言していくことをすべきであるということもありました。そのときの2本柱の1つが自主研究としての市販後調査です。現在まで続いています。もう1つの柱が薬物の副作用調査です。

副作用調査を私が主として担当しましたので、そのことについてお話しします。何回か集まったときに薬の副作用を会員からアンケートを集めてデータとしてまとめることが提案されました。そのデータをなるべくやさしい形で集めたいということから、葉書を使うことになりました。以後それが積み重なって、もう7年以上になるわけですが、貴重なデータになっています。

約3年分を皮膚病診療に発表しました〔皮膚病診療：20(9)；816～821, 1998〕。このときは788通のアンケートです。それからいろいろなことがだいぶわかりまして、竹村先生から当時の厚生省に働きかけていただきました。とくに市販品の薬剤(OTC薬)の副作用が思いのほか多いことが初めてデータとして出てきたことがあったと思います。その続きの成績を日本臨床皮膚科医学会誌(73：

185~190, 2002) にまとめています。今後も続けて行きたいと思っておりますが、7, 8年経って、なんとなくアンケートの集まり具合が鈍くなってきているので、また何かアドバルーンを上げないといけないかと思っております。

竹村 確かに伊崎先生がおっしゃるとおりで、私はOTC薬の副作用が増えてきているような気がします。たとえば水虫の薬などはとても増えたと思えますが。

仲 今度新しい薬が発売されました。われわれが使っているのと同じ薬剤で同じ濃度のものです。

竹村 最近の患者さんはほとんどが水虫の売薬をつけてきますね。

仲 水虫の薬をつけているものと思って対処しないと、誤診してしまうおそれがあります。

竹村 たまたま埼玉県には仲先生や加藤先生、田沼先生など、真菌の権威がおられますから、そういう点では真菌関連の情報は非常に多くて助かりますが、そのこととは関係なく副作用調査でも真菌関連が多いですね。

伊崎 抗真菌剤が多いです。抗真菌剤と湿布薬、外用非ステロイド消炎剤でしょうか。

竹村 とくに非ステロイド消炎剤の外用剤は小児科の先生がよく使い、よくかぶれていますね。

長村 あとキズドライというものもありますね。

伊崎 キズドライはじゅくじゅくした傷を外から塗り込めるといって、どう考えてもわれわれの常識に反するような治療法ですが、これが一般に広まってしまいました。一時、重症の感染症をおこして入院してきた人がいたので困ったことだと思っていると、実際にはほかのところにもそういう事例がいろいろあることがわかりました。

長村 消毒薬もあったと思えますが。

伊崎 消毒薬、湿布薬によるかぶれがあります。消炎鎮痛剤では塗る消炎鎮痛剤の問題がおそらく今後増加すると思えます。

竹村 ステロイド外用剤の副作用はどうですか。

伊崎 いまだに酒皰様皮膚炎、ステロイド皮膚症があとを絶ちません。

長村 それは皮膚科専門医についてもですか。

伊崎 そうとはかぎらないと思えます。

長村 リンデロン、フルコート時代から比べれば減っていますよね。最近の新しいものはアンテドラッグを指向していますから、減っていますよね。

竹村 私はこれからはあまり減らないのではないかと思います。医師が使用を止めるようにいっても、患者が止めません。ですからこれ以上ステロイド外用剤の副作用は減らないのではないかと思います。

仲 効くからということで、自分で買ってつけている人もいます。水虫新薬のかぶれも、基剤や主剤そのもののかぶれというよりも、むしろ患者さん自身が引っ掻き壊した傷から、薬が皮膚の中に入り込んで、刺激反応をひきおこすために、あれだけ副作用が多くみられるのだと思います。

加藤 水虫という診断が違っているのに使っていることと、OTC薬ではいろいろな成分が入っていることがトラブルの多い原因だと思います。

仲 痒み止めなどのことですね。

加藤 それがトラブルの増える原因になると思えます。

伊崎 OTC薬の問題では、たとえば総合感冒薬による薬疹があります。一時消えたと思われていた固定薬疹がけっこうあるというデータが治療学会の調査結果に出ています。カフコデ、セデス、パブロン、PLなどいろいろありまして、この中に含まれる成分のどれかですけれども、成分パッチまではこのようなアンケートではなかなか出てこないと思えます。

竹村 自分も含めてですが、ここでもう一度、副作用のことをみんなで一生懸命やるようにしなければいけないと思えます。

大西 埼玉県皮膚科医会は若い先生から開業医の先生までざっくばらんに話ができる場だと思えますが、最近、なんとなく堅い雰囲気を感じます。また若い先生に多いのですが、皮膚科学としての記載学がかなりおろそかにされているように近頃感じます。そういう点を開業医の先生、古い先生からもっと厳しく指導していく場であってもいい

のかなと思います。出席される先生がどうも固定されているようですので、もっと若い先生や普段参加されていない先生を引っ張り出すようなところが必要ではないかと最近思っています。

仲 出席して得したと思わせるような会でないとなかなか出てこないのかもしれない。

永井 正会員が246名ですが、その中で常に出てこられる、ときどき出てこられる先生はだいたい100人です。毎回の出席者数は60~70人くらいで固定されているような感じです。少し異同もあるのですが、おそらく100人くらいの先生は出てこられています。それ以外の先生は入会しているだけでまったく出席されていない方が多いようです。集談会でも、一枚会でも、開業の先生からでもどんどん出していただいて柔らかくなってくるとやりやすいのかなと思います。しかしながら開業してから写真を撮るのはなかなかむずかしいですね。

加藤 私の場合、済生会病院に来て10年目になります。来たときからこの会に入れてもらっているいろいろな活動してきました。皆さんと知り合いにもなれたし、病院でやっていく上でも本当に大きな役割を果たしていて、非常によかったと思っています。

また、若い先生にもなるべく会には参加するように指導していますが、1~2年の短期間に替わってしまうという難点があります。このことは大学などではさらに大きい問題ですが、なんとか解決して若い先生の参加を増やしたいですね。

将来について

竹村 これまでのお話で現在の皮膚科医会についてのおおよそについてお話しいただけたと思います。

長村 将来的なことについて、竹村先生のご意見として日皮と日臨皮の関係についてお話しいただきたいと思います。

竹村 日皮に関しては、東京地方会では城西地区に埼玉県は所属しておりますが、城西地区の演題数もたいへん多くなっていることもあり、そろそろ埼玉県は神奈川県のように独立した分科会と

してやっていったほうがいいのではないかと思います。東京支部の支部長、運営委員会等でも将来、埼玉県が独立するような方向にもって行っていただきたいと思います。

日臨皮については、現在の10支部制は廃止すべきで、代議員制を敷き県単位の支部にすべきと思います。埼玉県皮膚科医会イコール日臨皮の支部にしたほうがすっきりします。

将来の日皮、日臨皮について、若い先生方がどのようにお考えかお話ししたいと思います。

仲 日皮に関しては埼玉県に大学が2つあるわけですから、そういう意味では支部をもってこられる力はあると思います。しかしながら、諸事情がありますので、いまのところはなかなかむずかしいかもしれません。日臨皮に関しては、私は常任理事として去年から関わっていますが、いままでの長い歴史もあり、まだ詳細までは把握できておりません。皮膚科の保険診療を向上させるという点では成果を出していると思っています。

埼玉県の皮膚科医会の今後の展望として、もう少し一般の方への啓発活動を行っていくことも1つの手法ではないかと思っています。皮膚の日に市民公開講座のようなことを行ったり、あるいは新聞やテレビなどを利用するというのはいかがでしょうか。皮膚病について誤解している一般の方が多いので、そのような誤解を解く意味でもメディアを少し利用したほうがいいのではないかという気がしています。

伊崎 皮膚科医院に行くべき病気があることを知らない人がたくさんいるので、皮膚科に行くとそんなにすぐ治るのか、と思うようなところも少し宣伝していかないといけないですね。

永井 それについてたいへん効果が出ているのは、メーカーが新聞やテレビに出している爪白癬の広告です。昨日も患者さんとお話したのですが、その広告をみてメーカーに手紙を出して資料を送ってもらってという形で患者さんがこちらに来られました。そういう人はけっこう多いですね。あのような新聞広告はずいぶん効果があるものだと思います。

長村 効果があるのは確かですけども、もう少し詳しいインフォメーションを流してもらいたいですね。新聞やテレビのスポット広告をみて、爪白癬は内服薬で簡単に治ると思って来院される患者さんが非常に多いです。内服薬は肝毒性があること、投与前、投与後1カ月ごとに採血し、肝機能検査をしながら6カ月内服すること、内服薬が高価であることを説明すると、たいへんだからやめますという患者さんがときにおります。

永井 どうなのでしょう、新聞やテレビの広告にそこまで入れられるのですか。爪の水虫があることすら知らないという患者さんが多いです。さらにそのような病気が飲み薬で治ると、水虫に飲み薬があるなんて初めて知りましたという人が多いです。それと同じようなことが乾癬でもあります。たとえば乾癬にサンディミュンやネオオーラルを使うにしても、ある意味で特効薬的なものがあること自体を知らないで、デルモベートを何十年もつけているような患者さんがいまでもいます。そういう面では仲先生がいわれるようにどんどん啓発活動をしたほうがいいと思いますが、これがなかなかむずかしいです。だれがどうやってやるかというのがありますね。

仲 先日NHKでアトピー性皮膚炎をとり上げていました。その番組をみた患者さんから、薬の塗り方を初めて知りました、という話をたくさん聞きました。

長村 塗り方についてのですね。

仲 たとえば、お風呂に入ってすぐに塗らなければいけないということや患部にはもう少し多めに薬を塗らなくてはいけないということなどです。私どもも同じことを診療中にいつているのですが、どうやら患者さんの頭には残っていないようで、テレビは本当に影響力が強いのだと思いました。

長村 正しいことをいつてくれればいいのですがね。

仲 その番組ではけっこう正しいことをいつていたと思います。

永井 昔はひどい番組が多かったですけれども、最近は大いぶ減ってきましたよね。

加藤 私自身が爪水虫の広告で先日、新聞に出ました。メーカーによると昨年までは対談形式で細かいことを書いていたのですが、やはり患者さんはあまり詳しくは読まないらしいです。新聞を読んできた人も内容までは覚えていないことが多いようです。そこで今回はコンパクトに爪の水虫があるということと、内服薬で治るということを強調してつくりました。そういう意味ではメーカーのほうもいろいろと考えているようです。

竹村 待合室に張り紙しても、患者さんは活字は全然読んでいないですものね。

仲 でも、待合室に爪の水虫の写真などを貼っておきますと「私の爪は写真とそっくりです。みてください」などという人も結構いますよね。

大西 皮膚の日に他県ですと「ほくろの相談会」などを実施して頑張っている県もあります。とてもたいへんだと思いますが、そういう機会をそろそろつくってみてはいかがでしょうか。皮膚科がこういうことをやっているのだというのを1日どこかでやったほうがいいのかなと思います。

伊崎 以前、にきびの相談会を行いましたね。

永井 初めのころは行っていました。それがなかなかうまくいかないというよりも、埼玉県のような広い県の中でたとえば大宮、浦和などの1カ所で行くことの意義というのがあります。そこがむずかしい点です。それならば医師のレベルを高めるために勉強することが先ではないかということから、現在の形になったわけです。しかしながら、もうそろそろ考え直す時期かなとは思っています。

竹村 ほかの県でも相談会は年々減っているようです。最初は人が集まったのですが、その後がむずかしいようです。

大西 また、今後に関してはやはり埼玉が東京地方会の一分科会となるということが一番の関心事です。そのためには大学、中核病院、開業医の先生方にご協力いただかないとなかなか演題は集まらないでしょうし、独立するからにはしっかりした会にしていく必要があると思います。とくに大学は症例をしっかりと出す努力をしなければいけないと思います。そういう意味で普段から開業医

の先生との連携が十分にうまくいっていないところが各所にあると思いますので、埼玉県皮膚科医会や治療学会を通じてもっといい連携をつくってあげればいいのではないかと思います。

竹村 現在の埼玉県では、こと皮膚科に関しては病診連携は比較的うまくいっていると思います。

昔は大学の先生が偉くて、病理組織診断は大学の先生にかないませんでした。ところが、現在は病理組織のみならず真菌を例にとると、大学の先生方よりも、仲先生や加藤先生のほうがエキスパートであり、そういう時代に全体がなってきたのではないのでしょうか。

長村 確かに開業医のレベルが上がっています。とくに皮膚科は、他科に比べると大学の先生と開業医の先生との差が少ないのではないかと思います。

竹村 むしろ大学の若い先生を指導できるでしょう。また、埼玉県皮膚科医会には学閥が昔からないですね。

長村 役員の卒業大学をみてもほとんどばらばらですね。

永井 10年前に長村先生が参加されたときはびっくりされていましたね。

アナライザー・システム

長村 スライドをみせて、診断名を示す機械を先日使いましたが、その機械を今後とも続けるのですか。少し説明してください。

仲 それはアナライザー・システムといって、用意した問題に対して出席した先生方全員にボタンを押していただくと、何パーセントの方がどういう考えをもっているかということがその場で瞬時にわかるというシステムです。だれがボタンを押したのかは、まったくわかりませんし、記録もできないようなシステムですので、そういう意味では手を挙げることに比べると回答しやすいのです。ただあれは企業の私有財産で、われわれが自由に使えるものではありません。ですからそれを今後ずっと使用するというわけにはいかないと思います。

1174

竹村 借りるとなると1回に100万円以上かかりますね。

仲 そのために製薬メーカーが買い上げたということですが、しかしながら、これはけっこう下準備がたいへんです。無線を使っているのですが、われわれだけで準備するのは少しむずかしいのではないかと思います。

加藤 内容的にも今回は仲先生がプランナーとして質問などを全部考えてくれたのでうまくいったと思います。どういう質問をつくるか、どのような話の流れにもっていくのかを考えることはとてもたいへんですね。

仲 準備段階がけっこうたいへんですね。

永井 最初に製薬メーカーがもってきた案は面白くなく、それでは仕方がないだろうということになりました。

竹村 私は皮膚科の専門医試験などはこのようなシステムを導入すべきだと思います。専門医は臨床医ですから、その人の臨床医としての能力を評価することは大切なことだと思います。

このようなアナライザー・システムを皮膚科医会でも1年に1回くらいとり上げてもらおうと、自己研修になってよいと思います。

仲 恥をかかないですみますよね。

竹村 あのシステムがもっと安くなったら、皮膚科医会で買ってでもいいですね。

永井 1回借りるのに150万円くらいですから、買うとなったら相当高いのではないですか。

長村 そんなに高そうにみえませんが、それほど高いのですか。

加藤 あとは機械にもよるのではないですか。あの機械は複数選択など複雑なこともできるものです。もっと単純なものであれば安いかもしれません。

仲 昔は無線ではなくて有線でした。それが無線になったということで、その分進歩はしていますが、相応に値段も高いと思います。

永井 最初から設置してある会場はないのですか。

仲 大学などでありそうですが、

長村 うちの大学はあります。授業が終わったあとにどれくらい理解しているかの質問をします。それによって教師の教育効果がわかるわけです。

永井 そういうところを借りてしまえばできそうですね。

これからの一枚会

伊崎 「一枚会」については、準備はたいへんでしょうが、赤、青、黄色くらいのボタンを押して、どれを考えますか、というのがないと準備も少しやってみようかという気になりますよね。

長村 やはり日本皮膚科学会の総会、支部総会、東京地方会などとはひと味違う学会にしなければいけないと思います。そういう意味では「一枚会」というのは非常にいいと思います。インフォメーションを少なくして診断する、完璧な論文にするような発表では面白くないですからね。

たとえば鼻にできる皮膚病のように、部位別の疾患を集めるというのはどうでしょう。鼻、手、指、陰茎などの部位で何例か集めてもらうことも将来的に面白いのではないですか。

竹村 皮膚科医会としてテーマを出しておけばいいでしょう。こういう症例を重点的に皆さん集

めておいてくださいとお願いするわけです。

長村 そうすると面白いですね。

仲 鑑別に役立ちますよね。

長村 あと似て非なる疾患があります。たとえば血管拡張性肉芽腫に似ている疾患があります。eccrine poromaや腎癌のメタなど似て非なる疾患をある程度学術のほうで考えていただいて集めてみたらと思います。幸い大学や大きい病院がありますので、非常におもしろいと思います。

永井 テーマを決めることはいつでもできますから、たとえばこの次は手で行こうとか、頭、真菌と早めに症例を集めたらいいと思います。

長村 そういうことを導入したら面白いのではないのでしょうか。

仲 しかしながら、開業するとそういうところの写真はなかなか撮れないですね。大学ではけっこう撮れますけれども。

長村 部位によっては大学頼みになってしまうかもしれませんが、そういう症例を集めるとインパクトのある学会になるのではないかと思います。

竹村 埼玉県皮膚科医会の過去、現在、未来についてお話しいただきました。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

埼玉県皮膚科医会 年次事業報告

【平成17年度】

5月8日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成17年度定例総会について
2. 子育て相談窓口運営委員会委員の推薦について

定例総会

1. 平成16年度事業報告
2. 平成16年度収支決算書に関し議決を求める件
3. 平成17年度事業計画（案）に関し議決を求める件
4. 平成17年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第34回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 特別講演

「皮膚疾患 一違った視点で観てみるとー」

聖隷三方原病院 皮膚科部長 白濱茂穂 先生

9月11日 第33回集談会（ラフレさいたま）

1. 一般演題

- (1) 下腿潰瘍を呈したサルコイドーシスの1例
三枝正明、大塚 勤（獨協医科大学越谷病院）
- (2) タクロリムス外用剤使用中に発症した顔面異型白癬の1例
出光俊郎、藤井祥子、加倉井真樹、平塚裕一郎
（自治医大大宮医療センター）
和田由香、林 和（同 臨床検査部）
- (3) Aneurysmal fibrous histiocytoma の1例
町野 哲（埼玉医大）
- (4) 糖尿病に伴った発疹性黄色腫の1例
浅野千賀、三浦義則、黒田 啓、多島新吾（防衛医大）
- (5) 当院におけるフットケア外来第2報
皮膚科医へのアンケートを含めて
加藤卓朗、宇賀神つかさ（済生会川口総合病院）
大須賀範子（同 看護部）
- (6) 外陰部に発生した顆粒細胞腫の1例
藤井祥子、東 隆一、加倉井真樹、平塚裕一郎、出光俊郎
（自治医大大宮医療センター）
山田茂樹（同 病理部）
- (7) 広範囲に皮疹を来した M. canis 感染症の一例
今井亜希子（秀和総合病院）
- (8) 最近経験した血管肉腫の2例
中野愛香（埼玉医科大学総合医療センター）

2. 特別講演

「誤りやすい皮膚真菌症と外用抗真菌剤のトラブル」

哲学堂 くすのき皮膚科 楠 俊雄 先生

11月14日 第2回役員会

1. 今後の行事予定について
2. 平成20年度日本臨床皮膚科医会の開催について

「皮膚の日」学術講演会（ラフレさいたま）

1. 第35回埼玉県一枚会

症例検討

2. 特別講演

「母斑・母斑症 臨床知見補遺」

埼玉医科大学 皮膚科学教室 助教授 倉持 朗 先生

3. 保険請求に関する Q & A

志木駅前皮膚科 院長 竹村 司 先生

平成18年

1月15日 第43回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）（10：56～11：26）

「長期間に亘って再発を繰り返す *Epidermophyton floccosum* による手白癬」

宇賀神つかさ（済生会川口総合病院）

『『創傷治療3原則』に基づく驚異の皮膚科治療』

水原章浩（東鷲宮病院）

「埼玉医科大学皮膚科における壊死性筋膜炎28症例の臨床的検討」

税田知子（埼玉医科大学病院）

「多形慢性痒疹に対する Narrow-band UVB 療法の有効性」

黒田 啓（防衛医大）

「敗血症を来した褥瘡の2例」

深井孝郎（埼玉県央病院）

埼玉県皮膚科医会学術講演会（ラフレさいたま）（16：10～17：10）

特別講演

「痒疹をめぐって」

埼玉医大総合医療センター 皮膚科 助教授 寺木祐一 先生

【平成18年度】

5月14日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成17年度定例総会について

定例総会

1. 平成17年度事業報告
2. 平成17年度収支決算に関し議決を求める件
3. 役員改選について
4. 平成18年度事業計画（案）に関し議決を求める件
5. 平成18年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第36回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 特別講演

「男性型脱毛症の診断と治療」

東京医科大学皮膚科学教室 教授 坪井良治 先生

9月10日 第2回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成20年度日本臨床皮膚科学会の開催について
①開催会場等について

第34回集談会（ラフレさいたま）

1. 一般演題
 - (1) 皮膚科治療アンケート研究会による抗アレルギー薬に関する調査
加藤卓朗、合田正俊（済生会川口総合病院）
 - (2) 尋常性白斑におけるナローバンド UVB 治療
—その審美的側面からみた問題点—
出光俊郎、岩田基子、加倉井真樹、東 隆一、平塚裕一郎、岡田栄子
（自治医大大宮医療センター）
大沢真澄、梅本尚可（さいたま赤十字病院）
 - (3) 骨髄線維症患者の G-CSF 投与中に生じた neutrophilic dermatosis の 1 例
難波純英、倉持 朗、土田哲也（埼玉医大）
陣内逸郎（同 血液内科）
山崎克彦（小川赤十字病院整形外科）
 - (4) クローン病に併発した superficial granulomatous pyoderma の 1 症例
岩田基子、加倉井真樹、出光俊郎（自治医大大宮医療センター）
牛丸信也（同 総合診療科）
大沢真澄（さいたま赤十字病院）
 - (5) 慢性膵炎の急性憎悪を伴った皮下結節性脂肪壊死症の 1 例
佐藤政子、佐藤良博、寺木祐一、伊崎誠一（埼玉医大総合医療センター）
 - (6) Mobile encapsulated lipoma の 2 例
藪田潤子、阿部浩之、武藤 潤、藤本典宏、多島新吾（防衛医大）
 - (7) Stewart-Treves 症候群の 1 例
藤倉美恵子、大塚 勤、小林智之、七条麻衣子、松本幸子
（獨協医大越谷病院）
 - (8) 腫瘍期菌状息肉症の 1 例
安井宏仁、倉持 朗、加藤正幸、難波純英、土田哲也（埼玉医科大学）
新井栄一（同 病理）
 - (9) 緩徐に経過している subcutaneous panniculitis-like T-cell lymphoma の 1 例
大沢真澄、梅本尚可（さいたま赤十字病院）
兼子 耕（同 病理）
出光俊郎（自治医大大宮医療センター）
辻 和英 岩月啓氏（岡山大学）
 - (10) Marginal zone B-cell lymphoma の 1 例
室田東彦、小野沙知子、寺木祐一、伊崎誠一
（埼玉医大総合医療センター）

2. 特別講演

「乾癬 2006」

東海大学医学部専門診療学系 皮膚科 教授 小澤 明 先生

11月12日 第3回役員会

1. 今後の行事予定について
2. 役員・各種委員の変更について
3. 日本皮膚科学会専門医更新のための単位の取得について
4. 平成20年度日本臨床皮膚科医会の開催について

「皮膚の日」学術講演会（ラフレさいたま）

1. 第37回埼玉県一枚会

症例検討

2. 特別講演

「小児アトピー性皮膚炎治療の最近の話題」

自治医科大学 皮膚科学 教授 大槻マミ太郎 先生

3. 保険請求に関する Q & A

志木駅前皮膚科 院長 竹村 司 先生

平成19年

2月18日 第44回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）（10：35～10：53）

「毛巣洞に対するレーザー治療の試み」

深井孝郎（埼玉県中央病院）

「手指・足趾悪性黒色腫（MM）のまとめ

爪甲色素線条の病理組織学的所見を中心に」

佐々木志保（埼玉医科大学病院）

「過剰肉芽に対するステロイド軟膏の使用経験」

水原章浩（東鷲宮病院）

3月4日 埼玉県皮膚科医会学術講演会（ラフレさいたま）

1. 健保に関する質疑応答

志木駅前皮膚科 院長 竹村 司 先生

2. 特別講演

「難治性痒みを制御するー痒みのメカニズムと対処法ー」

順天堂大学浦安病院 皮膚科 教授 高森建二 先生

【平成19年度】

5月13日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成19年度定例総会について

定例総会

1. 平成18年度事業報告
2. 平成18年度収支決算に関し議決を求める件
3. 平成19年度事業計画（案）に関し議決を求める件
4. 平成19年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第38回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 特別講演

「黄色く肥厚した爪は、大部分が爪白癬として良いのか？」

順天堂大学練馬病院 皮膚アレルギー科 教授 比留間政太郎 先生

9月9日 第34回集談会（ラフレさいたま）

1. 一般演題

- (1) 食物依存性運動誘発アナフィラキシーの1例
梅本尚可、大沢真澄、飯田絵理、高田 大、加倉井真樹、出光俊郎
(自治医大さいたま医療センター)
- (2) 紅皮症状態を呈し、血漿交換が有効であった落葉状天疱瘡の1例
伊崎誠一、寺木祐一、室田東彦、渋谷真貴子、三谷麗子
(埼玉医大総合医療センター)
- (3) 慢性リンパ球性白血病に併発した paraneoplastic pemphigus と
bullous pemphigoid の合併例
加倉井真樹、飯田絵理、高田 大、出光俊郎
(自治医大さいたま医療センター)
山田朋子、横倉英人 (自治医大)
大島久美、賀古真一、林 智子 (自治医大さいたま医療センター血液科)
新井真悟 (丸山記念総合病院)
大山文悟、橋本 隆 (久留米大)
- (4) 免疫低下状態の患者に発症した phaeohyphomycosis の2例
出光俊郎、梅本尚可、加倉井真樹、平塚裕一郎、飯田絵里、東 隆一
(自治医大さいたま医療センター)
林 和、和田由香 (同臨床検査部)
河崎昌子、望月 隆 (金沢医大環境皮膚科、総医研皮膚真菌)
- (5) 光線療法 (narrow band UVB) を試みた皮膚形質細胞増多症の1例
飯田絵里、加倉井真樹、高田 大、平塚裕一郎、梅本尚可、出光俊郎、
山田茂樹、西田淳二 (自治医大さいたま医療センター)
- (6) Desmoplastic Spitz' nevus の1例
福本 瞳、阿部浩之、藤本典宏、小林孝志、多島新吾 (防衛医大)
- (7) 巨大外毛根鞘嚢腫切除後皮膚欠損がbFEFにより上皮化した1例
小林智之、大塚 勤 (獨協医大越谷病院)
- (8) 高カルシウム血症を伴った頭部有棘細胞癌の1例
安井宏仁、倉持 朗、土田哲也 (埼玉医大)

2. 特別講演「痒み Up date ～病態から考える治療薬の選択～」

大阪大学大学院

医学系研究科情報統合医学皮膚科学 教授 片山一朗 先生

11月11日 第2回役員会

1. 今後の行事予定について

「皮膚の日」学術講演会（ラフレさいたま）

1. 第39回埼玉県一枚会

症例検討

2. 特別講演

「ヘルペスウイルスによる皮膚疾患 —最近の話題—」

久留米大学医学部皮膚科 准教授 安元慎一郎 先生

平成20年

1月27日 第45回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）（9：00～9：18）

「結節性皮膚ループスミチン症の1例」

岩崎純也（防衛医科大学校病院）

「壊死性筋膜炎を呈した劇症型A群連鎖球菌感染症の1例」

町野 哲（埼玉医科大学病院）

「ラップ療法による新しい褥傷治療

～滲出液の量による創傷被覆材の使い分け～」

水原章浩（東鷲宮病院）

埼玉県皮膚科医学会学術講演会（ラフレさいたま）

1. 特別講演

「爪白癬治療の変遷」

東京警察病院 皮膚科 部長 五十棲 健 先生

【平成20年度】

6月15日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成20年度定例総会について

定例総会

1. 平成19年度事業報告
2. 平成19年度収支決算に関し議決を求める件
3. 平成20年度事業計画（案）に関し議決を求める件
4. 平成20年度収支予算（案）に関し議決を求める件
5. 役員改選について

第40回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 特別講演

「好中球の浸潤が見られる疾患 —主に乾癬・掌蹠膿疱症について—」

日本大学医学部 皮膚科学系 皮膚科学分野 教授 照井 正 先生

9月7日 第36回集談会（ラフレさいたま）

1. 一般演題

(1) 乳房 Paget 病様の臨床像を呈した乳頭部 Bowen 癌の一例

飯田絵理、梅本尚可、平塚裕一郎、出光俊郎

（自治医大さいたま医療センター）

(2) 広範に水疱形成が認められた、乳癌を合併した皮膚筋炎の一例

大野美咲、人見勝博、寺木祐一、伊崎誠一

（埼玉医大総合医療センター）

(3) 肺癌を合併した多発性基底細胞癌

- 成田多恵、大沢真澄（さいたま赤十字病院）
- (4) 結核性膝関節炎、術後瘢痕周囲に多発した基底細胞癌の一例
小野公司、浅野千賀、阿部浩之、青木 繁、藤本典宏、小林孝志、
多島新吾（防衛医科大学校）
- (5) 多発性サットン母斑の一例
藤倉美恵子、大塚 勤（獨協医科大学越谷病院）
- (6) 顔面に生じた異型皮膚カンジダ症の一例
出光俊郎、飯田絵理、平塚裕一郎、遠藤真沙子、池田涼子、佐々木 薫、
梅本尚可、加倉井真樹（自治医科大学附属さいたま医療センター）

2. 特別講演

「異汗性湿疹、多汗症の病態と治療」

東京医科歯科大学医学部 皮膚科学教授 横関博雄 先生

11月16日 第2回役員会

1. 日本皮膚科学会東京地方会について

「皮膚の日」学術講演会（ラフレさいたま）

1. 第41回埼玉県一枚会

症例検討

2. 特別講演

「アトピー性皮膚炎治療の理論と実際」

三重大学医学部附属病院 皮膚科 教授 水谷 仁 先生

平成21年

2月22日 第46回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）（13：59～14：17）

「組織拡張器で治療した頭部巨大色素性母斑の1例」

石黒匡史（上尾中央総合病院）

「壊疽性膿皮症の2例」

小野公司（防衛医科大学校）

「中毒性表皮壊死症（TEN）の1例」

安井宏仁（埼玉医科大学）

3月1日 埼玉県皮膚科医会学術講演会（ラフレさいたま）

1. 特別講演

「ヘルペスウイルス感染症の基礎と臨床」

奈良県立医科大学 皮膚科学教室 教授 浅田秀夫 先生

【平成21年度】

5月17日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成21年度定例総会について

定例総会

1. 平成20年度事業報告
2. 平成20年度収支決算に関し議決を求める件
3. 平成21年度事業計画（案）に関し議決を求める件

4. 平成21年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第42回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 特別講演

「皮膚アレルギー最近の話題」

産業医科大学医学部 皮膚科学講座 教授 戸倉新樹 先生

9月6日 第37回集談会（ラフレさいたま）

1. 一般演題

- (1) 『Mycobacterium marinum による皮膚非結核性抗酸菌症』
中村美智子、中村考伸、飯田絵里、梅本尚可、出光俊郎、森口正人、
寺井千尋、山田茂樹（自治医大さいたま医療センター）
石田 卓（いしだ皮膚科）
- (2) 『有茎性バルトリン腺嚢胞の1例』
飯田絵里、梅本尚可、中村美智子、中村考伸、出光俊郎
（自治医大さいたま医療センター）
木村鉄宣（札幌皮膚病理研究所）
- (3) 『頭部に生じた atypical fibroxanthoma の1例』
中村考伸、中村美智子、飯田絵里、梅本尚可、出光俊郎
（自治医大さいたま医療センター）
木根淵明（木根淵医院）
- (4) 『弾性線維腫の一例』
東野俊英、浅野千賀、岩崎純也、阿部浩之、青木 繁、藤本典弘、
小林孝志、多島新吾（防衛医科大学校病院）
- (5) 『石灰化を伴う脂肪織炎が多発した皮膚筋炎の1例』
天海有美子、佐藤良博、寺木祐一、伊崎誠一
（埼玉医科大学総合医療センター）
- (6) 『慢性円板状エリテマトーデス（DLE）より発生した下口唇部有棘細胞癌の
1例』
波多野さおり、田中純江、寺木祐一、伊崎誠一
（埼玉医科大学総合医療センター）
- (7) 『1年半の経過を確認できた足背の黒色斑』
廣藤亜樹子（埼玉医科大学病院）
- (8) 『Tacrolimus 内服より軽快した再発性 eosinophilic cellulitis』
大塚 勤（獨協医科大学越谷病院）

2. 特別講演

『痒みのメカニズムの考え方－EBMに基づいた痒みに対する治療戦略－』
東京大学大学院 医学系研究科 医学部皮膚科学 教授 佐藤伸一 先生

11月8日 第2回役員会

1. 特別講演会の講師について
2. 集談会の当番幹事について

「皮膚の日」学術講演会（ラフレさいたま）

1. 第43回埼玉県一枚会
症例検討
2. 「帯状疱疹アンケート結果のご紹介」
グラクソ・スミスクライン（株）
3. 保険審査の留意事項 解説
田沼皮膚科医院 院長 田沼弘之 先生
4. 特別講演
「マトリクスメタロプロテアーゼと皮膚」
防衛医科大学校 皮膚科学講座 准教授 小林孝志 先生

平成22年

- 1月24日 第47回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）（10：09～10：15）
『Infantile acropustulosis の1例』
浅野千賀（防衛医科大学校病院）

埼玉県皮膚科医学会学術講演会（ラフレさいたま）

特別講演

『蕁麻疹～ガイドライン Update～』

和歌山県立医科大学 皮膚科 教授 古川福実 先生

- 2月12日 学術講演会（パレスホテル大宮）

講演

『TNF 阻害療法－導入前・導入後の注意点－』

埼玉医科大学リウマチ膠原病科 准教授 秋山雄次 先生

特別講演

『乾癬治療－生物学的製剤時代の幕開け～その適正使用に向けて～』

自治医科大学 皮膚科学講座 教授 大槻マミ太郎 先生

- 2月25日 レミケード乾癬効能追加記念学術講演会（パレスホテル大宮）

特別講演 I

『TNF 阻害療法による関節リウマチ治療』

埼玉医科大学病院 リウマチ膠原病科 教授 三村俊英 先生

特別講演 II

『乾癬治療の新たな展開』

NTT 東日本関東病院 皮膚科 部長 五十嵐敦之 先生

【平成22年度】

- 5月16日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成22年度定例総会について

定例総会

1. 平成21年度事業報告に関し議決を求める件
2. 平成21年度収支決算に関し議決を求める件
3. 役員改選について議決を求める件

4. 平成22年度事業計画（案）に関し議決を求める件
5. 平成22年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第44回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 特別講演
『ダーモスコピーのみかた』
埼玉医科大学 皮膚科 教授 土田哲也 先生

6月9日 埼玉県小児科医会・皮膚科医会合同講演会（ホテルブリランテ武蔵野） 特別講演

- 『小児の皮膚感染症—特に「とびひ」の診断と治療について』
NTT 東日本関東病院 皮膚科 部長 五十嵐敦之 先生

9月5日 第2回役員会（ラフレさいたま）

1. 各種委員会の事業内容について
2. 健保Q & Aについて
3. ホームページの作成について
4. 「皮膚の日」行事について
5. 会員親睦について
6. 学校相談医決定についての報告
7. 第74回東京支部総会・シンポジウムについて
8. 会員名簿作成についての報告

第38回集談会

1. 一般演題
 - (1) 『類粒球除去療法が著効した壊疽性膿皮症の2例』
成田多恵、中村美智子（さいたま赤十字病院皮膚科）
雨宮守正（同 腎臓内科）
崎村恭也（同 第二消化器内科）
 - (2) 『非結核性抗酸菌症の1例』
大月隆志、伊崎誠一（埼玉医大総合医療センター皮膚科）
中永和枝、星野仁彦、石井則久（国立感染症研究所ハンセン病センター）
長村洋三（長村皮膚科クリニック）
 - (3) 『Dyshidrosiform pemphigoid の1例』
片桐一元、宮崎怜子、大塚 勤（獨協医科大学越谷病院 皮膚科）
 - (4) 『外陰萎縮を伴った外陰部結合織母斑の1例』
飯田絵里、吉田龍一、中村考伸、山田朋子、出光俊郎
（自治医大付属さいたま医療センター皮膚科）
 - (5) 『IVIG 療法を施行した難治性落葉状天疱瘡の重複癌合併例』
中村考伸、中村美智子、飯田絵里、梅本尚可、山田朋子、出光俊郎
（自治医大付属さいたま医療センター皮膚科）
 - (6) 『ダーモスコピーにて polymorphous vessels を呈した基底細胞癌の1例』
宮野恭平、難波純英、中村晃一郎、倉持 朗、土田哲也
（埼玉医科大学皮膚科）
 - (7) 『Intravascular Large B-cell Lymphoma の1例』

高井彩也華、藤本栄大、藤本典宏、小林孝志、多島新吾
(防衛医科大学校 皮膚科学講座)

2. 特別講演

『乾癬治療のバイオ・ロジック：2010』

旭川医科大学 皮膚科学講座 教授 飯塚 一 先生

10月1日 第1回広報委員会 (大宮 東天紅)

1. ホームページ作成について
2. メーリングリスト作成について

10月23日 第1回「皮膚の日」委員会 (大宮 東天紅)

1. 講演者と寄付・協賛・労務提供の報告
2. サンプルング・展示と会計の報告
3. 皮膚のトラブル相談コーナーの報告
4. 今後の集客をどうするかについて
5. 当日の運営、流れ、役割分担について

11月7日 「皮膚の日」記念イベント

テーマ「しみ・しわと皮膚がん ～気軽に皮膚科へ行こう」

『子どもを紫外線から守るためには?』

埼玉医大総合医療センター 佐藤良博 先生

『皮膚がん』のお話

自治医大付属さいたま医療センター 教授 出光俊郎 先生

『しみ・しわとスキンケア』のお話

埼玉医大総合医療センター 准教授 寺木祐一 先生

・皮膚のトラブル相談コーナー

11月14日 第3回役員会 (ラフレさいたま)

1. 平成22年度第2回役員会議事録について
2. 今後の行事予定について
3. 「皮膚の日」について
4. 広報委員会の報告について
5. 会員親睦ゴルフコンペについて

「皮膚の日」学術講演会 (ラフレさいたま)

1. 第45回埼玉県一枚会
症例検討
2. 保険審査の留意事項 解説
田沼皮膚科医院 院長 田沼弘之 先生
3. 特別講演

「アトピー性皮膚炎の最近の知見」

埼玉医科大学 皮膚科 教授 中村晃一郎 先生

平成23年

- 1月22日 第1回健保委員会（大宮 東天紅）
1. 審査基準について
 2. 「健保Q & A」のミニコーナーについて
 3. 健保委員会のメーリングリスト作成について
- 2月18日 タリオン学術講演会 皮膚アレルギー update 2011（川越プリンスホテル）
基調講演
1. 『アトピー性皮膚炎に対するベポタスチンベシル酸塩（タリオン）の有効性の検討』
埼玉医大総合医療センター皮膚科 准教授 寺木祐一 先生
 2. 『埼玉医科大学病院における病診連携（症例検討会）』
埼玉医科大学皮膚科 教授 中村晃一郎 先生

特別講演

- 『日本で得られた抗ヒスタミン薬のエビデンス』
東京女子医科大学皮膚科 教授 川島 眞 先生

- 2月20日 第48回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）（10：45～11：03）
- 『麻疹様紅斑を伴った菊池病の一例』
国立病院機構埼玉病院 伊藤雄二 先生
- 『在宅診療における褥瘡治療』
おうえんポリクリニック 並里まさ子 先生
- 『陳旧性顔面神経麻痺による口角下垂に対する骨膜弁を用いた静的再建術』
自治医大付属さいたま医療センター 吉田龍一 先生

埼玉県皮膚科医学会学術講演会（ラフレさいたま）

特別講演

- 『乾癬治療における生物学的製剤の使い方－理論と実践－』
独立行政法人国立病院機構相模原病院皮膚科 朝比奈昭彦 先生

【平成23年度】

- 5月15日 第1回役員会（ラフレさいたま）
1. 平成23年度定例総会について

第1回健保委員会（ラフレさいたま）

1. 健保Q & Aの回答について

定例総会

1. 平成22年度事業報告に関し議決を求める件
2. 平成22年度収支決算に関し議決を求める件
3. 平成23年度事業計画（案）に関し議決を求める件
4. 平成23年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第46回埼玉県一枚会

1. 症例検討

2. 特別講演

『皮膚悪性腫瘍診療の現況』

埼玉医科大学国際医療センター

皮膚腫瘍科・皮膚科教授 山本明史 先生

6月16日 第1回「皮膚の日」委員会（大宮 東天紅）

1. 前回の反省点、改良点の検討
2. タイムスケジュール作成
3. 講演者とテーマ決定
4. 役割分担（寄付・協賛・労務提供など企業担当、会計担当、講師担当、相談医担当、広報担当、当日運営担当など）
5. 企業への寄付・協賛・労務提供の声かけ方法の検討
6. 集客方法の検討

9月4日 第2回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成23年第1回役員会議事録の確認について
2. 「皮膚の日」行事について
3. ホームページ公開と今後の運用について
4. 会員親睦について
5. 平成23年度「相談医事業」における相談医の推薦について

第2回健保委員会（ラフレさいたま）

1. 健保Q & Aの回答について

第39回集談会

1. 一般演題

(1) 『骨髄転移をきたした有棘細胞癌の1例』

藪田潤子、阿部浩之、青木 繁、藤本典宏、小林孝志、多島新吾
(防衛医科大学校皮膚科)、渡邊純一 (同 血液内科)

(2) 『冠動脈に高度の狭窄を認め経皮的冠動脈形成術を行った Pseudoxanthoma elasticum の1例』

中村考伸、塚原理恵子、吉田龍一、飯田絵里、正木真澄、加倉井真樹、
梅本尚可、山田朋子、出光俊郎
(自治医大附属さいたま医療センター皮膚科)

(3) 『蜂窩織炎と思われた糖尿病患者の中足骨骨折の1例』

宮崎怜子、近澤咲子、福田一絵、山崎小百合、片桐一元
(獨協医科大学越谷病院)

(4) 『ヒドロクロチアジド配合降圧剤による光線過敏症型薬疹の3例』

原嶋秀明、麻生悠子、寺木祐一、伊崎誠一
(埼玉医科大学総合医療センター皮膚科)

(5) 『最近経験した印象深い接触皮膚炎の症例』

飯田絵里、吉田龍一、中村考伸、加倉井真樹、山田朋子、出光俊郎
(自治医大附属さいたま医療センター皮膚科)
梅本尚可 (社会保険大宮総合病院皮膚科)
今井一郎 (今川皮膚科)
秋元幸子 (あきもと皮膚科クリニック)

内ヶ崎周子（いとう医院）

(6) 『植皮後 VAC 療法が奏効した壊死性筋膜炎の 1 例』

柳澤宏人、緒方 大、土田哲也（埼玉医科大学皮膚科）

2. 健保 Q & A

3. 特別講演

『基礎からわかる血管炎』

日本医科大学皮膚科教授 川名誠司 先生

9月19日 第2回ゴルフコンペ（埼玉デルマ会）

武蔵 OGM ゴルフカントリークラブ

10月13日 第2回「皮膚の日」委員会（大宮 東天紅）

1. 協賛・サンプリング・展示・労務提供の報告
2. 寄付と会計（寄付金・協賛金など）の報告
3. 講演者の報告
4. 皮膚のトラブル相談コーナーの報告
5. 広報の報告及び今後の集客について
6. 当日の運営、流れ、役割分担

10月20日 第1回広報委員会（大宮 東天紅）

1. ホームページの改良
2. ホームページの運用
3. メーリングリストの運用

11月6日 「皮膚の日」記念イベント

テーマ「ニキビと皮膚がん ～気軽に皮膚科へ行こう」

講演 I

『ニキビとスキンケア』

さいたま赤十字病院 皮膚科副部長 成田多恵 先生

講演 II

『知っておこう、正しい皮膚がんの知識』

埼玉医科大学国際医療センター

皮膚腫瘍科・皮膚科教授 山本明史 先生

・皮膚のトラブル相談コーナー

11月13日 第3回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成23年度第2回役員会議事録について
2. 第2回皮膚の日委員会
第2回皮膚の日イベントの報告
3. 広報委員会の報告
4. 会員親睦ゴルフコンペの報告
5. 学術委員会の報告

6. 今後の行事予定について

第3回健保委員会（ラフレさいたま）

1. 健保Q & Aの回答について

平成23年度「皮膚の日」学術講演会（ラフレさいたま）

1. 第47回埼玉県一枚会
症例検討
2. 健保Q & A
3. 特別講演
「腎機能に基づいた抗ヘルペス療法の実際」
聖隷三方原病院皮膚科部長 白濱茂穂 先生

12月15日 皮膚アレルギー Update 2011 in さいたま（ラフレさいたま）

特別講演

1. 『蕁麻疹診療ガイドラインの理解に役立つ肥満細胞の知識』
自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科 教授 出光俊郎 先生
2. 『蕁麻疹診療ガイドラインにおける抗ヒスタミン薬の位置づけとエビデンス』
広島大学皮膚科学 教授 秀 道広 先生

平成24年

1月22日 第49回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）（13：37～13：55）

『集学的治療及び陰圧閉鎖療法が奏効した胸部開放創の1例』
さいたま赤十字病院 石井義剛 先生、他

『ハンセン病の既往歴を有する人々の診療について』
おうえんポリクリニック 並里まさ子 先生、他

『脊髄損傷患者の遷延する褥瘡・瘻孔部位より生じた有棘細胞癌1例』
埼玉医科大学病院 宮野恭平 先生、他

3月4日 第4回健保委員会（ラフレさいたま）

1. 健保Q & Aの回答について

埼玉県皮膚科医会学術講演会（ラフレさいたま）

1. 健保Q & A
2. 特別講演
『掻痒性皮膚疾患の治療 ～痒みからの救出を目指して～』
獨協医科大学越谷病院皮膚科教授 片桐一元 先生

【平成24年度】

4月14日 第1回健保委員会（ラフレさいたま）

1. 審査基準の作成・HP掲載について
2. 「健保Q&A」のHP掲載について
3. 審査上の問題点について
4. 平成24年度診療報酬改定について

5月23日 埼玉県西部地区ザイザル1周年記念講演会
講演 I

『2025へ向けた社会保障と医療』

高崎健康福祉大学健康福祉学部 准教授 木村憲洋 先生

特別講演

『皮膚バリア傷害から考えるアトピー性疾患の病態と治療』

名古屋大学大学院医学系研究科皮膚病態学分野 教授 秋山真志 先生

6月10日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成23年度第3回役員会議事録の承認
2. 皮膚の日委員会からの報告
3. 広報委員会からの報告
4. 健保委員会からの報告
5. 会員親睦委員会からの報告
6. 平成24年度定例総会について
7. 会則改正について
8. 役員改選について
9. 学会援助について

定例総会

1. 平成23年度事業報告に関し議決を求める件
2. 平成23年度収支決算に関し議決を求める件
3. 役員改選について承認を求める件
4. 平成24年度事業計画（案）に関し議決を求める件
5. 平成24年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第48回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 健保 Q&A
3. 特別講演 I

『C型慢性肝炎の最新の治療』

埼玉医科大学消化器内科・肝臓内科准教授 中山伸朗 先生

特別講演 II

『テラプレビルによる皮膚症状とその対処法』

国家公務員共済組合連合会虎の門病院皮膚科医長 岸 晶子 先生

6月16日 第1回「皮膚の日」委員会（大宮 東天紅）

1. 前回の反省点、改良点の検討
2. タイムスケジュール作成
3. 講演者とテーマ決定
4. 役割分担（寄付・協賛・労務提供など企業担当、会計担当、講師担当、相談医担当、広報担当、当日運営担当など）
5. 企業への寄付・協賛・労務提供の声かけ方法の検討
6. 集客方法の検討

- 7月4日 皮膚アレルギー Update 2012 in さいたま (ラフレさいたま 5F)
- 特別講演 I
『掻痒性皮膚疾患に対する第2世代抗ヒスタミン薬の増量効果の検討
ー第1世代抗ヒスタミン薬との比較ー』
東京医科大学皮膚科学講座准教授 大久保ゆかり 先生
- 特別講演 II
『食物アレルギー診療ガイドライン2012
～日常診療で役立つガイドラインのポイントをお話します～』
藤田保健衛生大学皮膚科准教授 矢上晶子 先生
- 7月21日 第1回広報委員会 (大宮 東天紅)
1. 会誌発行
 2. ホームページの運用
 3. メールマガジンの運用
- 8月2日 皮膚疾患フォーラム (浦和ロイヤルパインズホテル 3F)
- 講演 I
『イミキモドクリームの使用経験』
自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科准教授 中村考伸 先生
- 講演 II
『イミキモドクリームの使用経験』
さいたま赤十字病院皮膚科副部長 成田多恵 先生
- 特別講演
『日光角化症の診断と治療ーフィールド治療の重要性ー』
信州大学名誉教授 斎田俊明 先生
- 9月2日 第2回役員会 (ラフレさいたま)
1. 平成24年第1回役員会議事録の確認について
 2. 「皮膚の日記念イベント」について
 3. 広報委員会からの報告
 4. 会員親睦ゴルフコンペ (埼玉デルマ会) について
 5. 埼玉県皮膚科医会50周年記念式典について
- 第2回健保委員会 (ラフレさいたま)
健保 Q & A の回答について
- 第40回集談会
1. 一般演題
 - ① 『低悪性度脂腺癌の2例』
塚原理恵子¹⁾、成田多恵²⁾、小山尚俊¹⁾、中村孝伸¹⁾、飯田絵理¹⁾、
正木真澄¹⁾、梅本尚可¹⁾、山田朋子¹⁾、出光俊郎¹⁾、安齋眞一³⁾
¹⁾ 自治医科大学附属さいたま医療センター 皮膚科
²⁾ さいたま赤十字病院 皮膚科

³⁾ 日本医科大学武蔵小杉病院 皮膚科

- ② 『爪床下に生じ、Superficial acral fibromyxoma と考えられた 1 例』
水口将志 (防衛医科大学校皮膚科)
- ③ 『爪甲の色素斑』
広藤亜樹子、緒方 大、新井康介、中村晃一郎、倉持 朗、土田哲也
(埼玉医科大学皮膚科)
- ④ 『遮光指導により薬剤継続し得たピルフェニドン (ピレスパ®) による薬剤性
光線過敏症の 1 例』
成田多恵 (さいたま赤十字病院 皮膚科)
- ⑤ 『広範囲に水疱を呈したレボフロキサシンによる多発型固定薬疹の 1 例』
河辺美咲、井上有美子、寺木祐一、伊崎誠一
(埼玉医科大学総合医療センター 皮膚科)
- ⑥ 『背部硬化性萎縮性苔癬に対し切除術を施行した 1 例』
木村真智子、塚原理恵子、中村孝伸、飯田絵理、梅本尚可、山田朋子、
出光俊郎 (自治医科大学附属さいたま医療センター 皮膚科)
- ⑦ 『コロジオンベビーの 1 例』
小山尚俊¹⁾、塚原理恵子²⁾、中村孝伸²⁾、飯田絵理²⁾、正木真澄²⁾、
成田多恵¹⁾、梅本尚可²⁾、山田朋子²⁾、出光俊郎²⁾
¹⁾ さいたま赤十字病院 皮膚科
²⁾ 自治医科大学附属さいたま医療センター 皮膚科
- ⑧ 『男児の右下腿後面に生じた腫大』
倉持 朗、難波純英、星野美奈子、中村晃一郎、土田哲也
(埼玉医科大学 皮膚科)
- ⑨ 『二分脊椎患者に生じたガス壊疽の 1 例』
近澤咲子、宮崎怜子、小林圭介、上野真紀子、山崎小百合、片桐一元
(獨協医科大学越谷病院 皮膚科)

2. 【健保 Q&A】 健保委員会

奥野哲朗 先生

3. 【特別講演】

『マラセチアと皮膚』

帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科教授 清 佳浩 先生

9月17日 第3回ゴルフコンペ (埼玉デルマ会)

武蔵 OGM ゴルフカントリークラブ

10月13日 第2回「皮膚の日」委員会 (大宮 東天紅)

- 1. 協賛・サンプリング・展示・労務提供の報告
- 2. 寄付と会計 (寄付金・協賛金など) の報告
- 3. 講演者の報告
- 4. 皮膚のトラブル相談コーナーの報告
- 5. 広報の報告及び今後の集客について
- 6. 当日の運営、流れ、役割分担

11月11日 「皮膚の日」記念イベント

テーマ「アトピー性皮膚炎とスキンケア」

講演 I

『アトピー性皮膚炎はここまでわかった』
埼玉医科大学皮膚科教授 中村晃一郎 先生

講演 II

『アトピー性皮膚炎の治療とスキンケアステロイド外用剤のウソ、ホント&
痒くない衣類の選び方』
獨協医科大学越谷病院皮膚科教授 片桐一元 先生

・皮膚のトラブル相談コーナー

11月18日 第3回役員会 (ラフレさいたま)

1. 平成24年度第2回役員会議事録について
2. 第2回皮膚の日委員会、第2回皮膚の日イベントの報告
3. 広報委員会の報告
4. 会員親睦ゴルフコンペの報告
5. 今後の行事予定について

第3回健保委員会 (ラフレさいたま)
健保 Q&A の回答について

平成24年度「皮膚の日」学術講演会 (ラフレさいたま)

1. 第49回埼玉県一枚会
症例検討
2. 健保 Q & A
3. 特別講演
『アトピー性皮膚炎診療が楽しくなる』
金沢大学医薬保健研究域医学系皮膚科学教授 竹原和彦 先生

12月8日 第2回広報委員会 (大宮 東天紅)

1. 会誌発行
2. ホームページの運用
3. メールマガジンの運用

平成25年

2月3日 埼玉県皮膚科医会学術講演会 (ラフレさいたま)
特別講演

『蕁麻疹・血管性浮腫を巡る新たな国際動向』
広島大学大学院医歯薬保健学研究院皮膚学教授 秀 道広 先生

2月23日 第3回広報委員会 (大宮 東天紅)

1. 会誌編集について
 - ①投稿原稿のチェック (問題点の解決)
 - ②未投稿原稿の件 (催促など)
 - ③掲載広告の現状と今後の対策
 - ④今後のスケジュール

2月24日 第50回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）

『皮膚科開業医による皮膚悪性腫瘍の外科的治療』

松本皮膚科形成外科医院 松本吉郎 先生

『大量ガンマグロブリン点滴治療（IVIg）を併用した天疱瘡の2例；好中球減少と血小板減少をきたした尋常性天疱瘡（PV）と、妊娠・出産を行い得た落葉状天疱瘡（PF）』

自治医科大学附属さいたま医療センター 皮膚科 中村哲史 先生、他

『薬剤性過敏症症候群（DIHS）と診断した3例』

自治医科大学附属さいたま医療センター 皮膚科 藤本由貴 先生、他

埼玉県皮膚科医会役員一覧

平成17年度

名誉会長	竹村司	三
会長	長村洋	一
副会長	伊崎誠	一
〃	仲	弥
〃	永井	寛
常任理事	大西善	博
〃	加藤卓	朗
〃	川久保	洋
〃	倉持	朗
〃	小松威	彦
〃	田沼弘	之
〃	田谷元	佑
〃	中原井	一
〃	石塚敦	子
理事	井上靖	郎
〃	今川善	政
〃	宇佐美	夫
〃	遠藤晶	子
〃	大奥野	哲
〃	久保和	夫
〃	神野くら	ら
〃	神鈴木	忠
〃	鈴高田	任
〃	高多島	新
〃	多土田	哲
〃	出光俊	郎
〃	松岡明	哲
〃	矢島	純
監事	関戸孝雄	和
〃	番場秀重	雄
顧問	池田橋明	滋
〃	石藤	久
〃	伊井上	啓
〃	井北村	次
〃	福代良	一

平成18年度～

名誉会長	竹村司	三
会長	長村洋	一
副会長	伊崎誠	一
〃	仲	弥
〃	永井	寛
常任理事	大塚勤	博
〃	大西善	朗
〃	加藤卓	朗
〃	倉持	朗
〃	黒田弘	啓
〃	田沼元	之
〃	田谷俊	佑
〃	田出光	郎
〃	寺中木	一
〃	石井塚	敦
理事	井上靖	郎
〃	今川善	政
〃	遠藤晶	夫
〃	大奥野	哲
〃	久保和	夫
〃	川神口	新
〃	神野くら	ら
〃	神鈴木	忠
〃	鈴高田	任
〃	高多島	新
〃	多土田	哲
〃	松岡明	哲
〃	矢島	純
監事	関戸孝雄	和
〃	番場秀重	雄
顧問	池田橋明	滋
〃	石藤	久
〃	伊井上	啓
〃	井北村	次
〃	福代良	一

平成20年度～

名誉会長	竹村司	三
会長	長村洋	一
副会長	伊崎誠	一
〃	仲	弥
〃	永井	寛
常任理事	大塚勤	博
〃	加藤卓	朗
〃	倉持	朗
〃	田沼弘	俊
〃	田出光	俊
〃	寺沼木	太
〃	中藤本	典
〃	藤今泉	俊
〃	石塚敦	敦
理事	井上靖	郎
〃	今川善	政
〃	大奥野	哲
〃	久保和	夫
〃	川神口	新
〃	神野くら	ら
〃	神鈴木	忠
〃	鈴高田	任
〃	高多島	新
〃	多土田	哲
〃	松岡明	哲
〃	矢島	純
〃	中山本	晃
〃	山本	明
〃	山本	史
監事	番田秀和	佑
〃	田谷元重	雄
顧問	池田橋明	滋
〃	石藤	久
〃	伊井上	啓
〃	井北村	次
〃	福代良	一

平成22年度～

名誉会長	長 村 洋 三
会 長	仲 崎 誠 弥
副 会 長	伊 崎 誠 一
”	永 井 俊 寛
常任理事	今 泉 塚 資
”	大 片 桐 一 卓 元
”	加 倉 持 林 孝 朗
”	小 田 沼 光 志 之
”	出 寺 中 矢 石 井 今 奥 久 川 齋 神 鈴 高 多 土 中 松 山
理 事	塚 敦 子 靖 郎 朗 夫 暉 京 彦 康 吾 也 晃 一 郎 哲 郎 史
”	井 上 川 野 保 口 藤 野 木 田 島 田 村 岡 本 本
”	奥 野 保 口 藤 野 木 田 島 田 村 岡 本 本
”	久 川 齋 神 鈴 高 多 土 中 松 山
”	齋 神 鈴 高 多 土 中 松 山
”	神 鈴 高 多 土 中 松 山
”	鈴 高 多 土 中 松 山
”	高 多 土 中 松 山
”	多 土 中 松 山
”	土 中 松 山
”	中 松 山
”	松 山
”	山
監 事	大 城 晶 子
”	田 谷 元 佑 雄
顧 問	池 石 伊 井 北 竹 福
”	石 伊 井 北 竹 福
”	伊 井 北 竹 福
”	井 北 竹 福
”	北 竹 福
”	竹 福
”	福

平成24年度～

名誉会長	長 村 洋 三
会 長	仲 崎 誠 弥
副 会 長	伊 崎 誠 一
”	永 矢 今 片 加 久 倉 田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
常任理事	今 泉 桐 藤 保 持 沼 光 木 本 本 塚 上 島 野 崎 藤 田 村 田 野 本 井
”	片 桐 藤 保 持 沼 光 木 本 本 塚 上 島 野 崎 藤 田 村 田 野 本 井
”	加 久 倉 田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	倉 田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	佐 土 中 成 町 山 横
”	土 中 成 町 山 横
”	中 成 町 山 横
”	成 町 山 横
”	町 山 横
”	山 横
理 事	石 井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	井 大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	大 奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	奥 神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	神 齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	齋 佐 土 中 成 町 山 横
”	佐 土 中 成 町 山 横
”	土 中 成 町 山 横
”	中 成 町 山 横
”	成 町 山 横
”	町 山 横
”	山 横
監 事	鈴 木 忠 彦
”	中 池 石 井 北 多 竹
顧 問	池 石 井 北 多 竹
”	石 井 北 多 竹
”	井 北 多 竹
”	北 多 竹
”	多 竹
”	竹
参 与	池 石 井 北 多 竹
”	石 井 北 多 竹
”	井 北 多 竹
”	北 多 竹
”	多 竹
”	竹

平成26年度～

名誉会長	長 村 洋 三
会 長	仲 崎 誠 弥
副 会 長	伊 崎 誠 一
”	矢 島 俊 資
常任理事	今 片 加 久 倉 田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	片 加 久 倉 田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	加 久 倉 田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	倉 田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	田 出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	出 寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	寺 藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	藤 松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	松 石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	土 坪 中 成 町 山 横
”	坪 中 成 町 山 横
”	中 成 町 山 横
”	成 町 山 横
”	町 山 横
”	山 横
理 事	石 井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	井 大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	大 奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	奥 神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	神 齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	齋 佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	佐 土 坪 中 成 町 山 横
”	土 坪 中 成 町 山 横
”	坪 中 成 町 山 横
”	中 成 町 山 横
”	成 町 山 横
”	町 山 横
”	山 横
監 事	永 井 太 寛
”	中 池 石 北 多 竹
顧 問	池 石 北 多 竹
”	石 北 多 竹
”	北 多 竹
”	多 竹
”	竹
参 与	池 石 北 多 竹
”	石 北 多 竹
”	北 多 竹
”	多 竹
”	竹



東京裁判史観ではなく、戦前の日本人の史観を教訓に明日の日本を考えよう

埼玉医科大学総合医療センター皮膚科

人見 勝博

2013年も戦前を扱った本を20冊¹⁻²⁰⁾ 読んだ。その選定は、amazon.co.jpにて「NF 文庫」や「よく見かける著者名」をキーワードとして検索された本のレビューを参考にしている。

年初にあたり私が衝撃を受けたのは「プリズンの満月²⁾」である。レビューによると、戦犯指名を受けた方々が絞首刑に処された地「巢鴨プリズン」は、なんと現在の「池袋サンシャインシティ」にあたるというのだ。早速読んでみた。当初こそ収容者を厳しく扱ったGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）だったが、昭和25年に朝鮮戦争が勃発するや戦犯への関心を失った。そして日本側に拘置所の管理が委譲され、収容者の一時帰郷が認められるようになった。最後には、家族への仕送りのために敷地外に出て仕事、夜のみ拘置所に戻る「宿泊所」に変質したという。このGHQの不徹底さが、「GHQは日本で何をしていたのか？」という疑問と興味を私に抱かせた。「GHQ」で検索すると、「真相箱」「焚書図書」のキーワードが現れた。

GHQは日本に多大な物資の援助をするかわら、昭和20年末から約3年間、米国の正義を宣伝するラジオ番組をNHKに流させた。その番組の一つが「真相箱^{5, 6)}」である。「侵略行為を続ける日本の悪しき指導者らを懲らしめるために、米国が止むを得ず立ち上がったのが太平洋戦争である」と。日本国民はその被害者に位置付けられ、米国の偉大さと寛容さを印象付けられた。しかし、その陰でGHQは恥ずべき行為を行っていた。「戦勝国と支那人、朝鮮人」に関する言論を封じる厳しい検閲を行いながら、「宣伝用刊行物の没収」という名目で7,769タイトルもの書籍を流通から抹消したのである¹⁰⁾。アメとムチを使い分けた巧みな日本人の洗脳工作が行われたわけで、戦後世代の多くは米国の明るい姿しか知らない。「それでは、戦前の日本人と、(GHQの手が加わった)戦後の日本人とは何が違うのだろうか」と私の興味に変質した。その答えが焚書図書に書いてあることを期待し読み進めた。検索で新たに見つけたキーワード「教育勅語」「修身教育」に関する本⁷⁾にも手を出した。

「GHQ 焚書図書開封」とは、焚書図書を掘り起こし、西尾幹二が分かり易く解説している現在も進行中のテレビ番組である。2013年までに本にまとめられ8巻¹⁰⁻¹⁷⁾までが刊行されている。本を買わずともYoutubeで「焚書図書開封」のキーワードで検索すれば動画を視聴できる。ラジオ代わりに聴いてみると良い。単なる事象の羅列ではなくて、その時代に生きた人たちの息遣いが聞こえてくるはずである。そこには、日本人が学んでおくべき事実と価値観があると私は確信している。①戦前の日本人がいかに世界をよく見ていたか。サイコパシ的に身勝手な性癖を持つ漢民族^{12, 14, 16)}、自己に都合の良いようにダブルスタンダードを使い分け、正義の名の下に悪行を重ねるアングロ・サクソン民族¹⁴⁻¹⁷⁾。②いかに欧米諸国や露西亜が世界中を侵略し、富を搾取していたのか¹⁰⁻¹¹⁾。アジアに残る独立国は日本とタイの2国のみで、その独立すらも危うかった。③日本の「国体」の中心は天照大神の直系の子孫たる天皇であること^{7, 13, 18)}。天皇の国民の幸福を願う思いから生まれた権威が、国民の心をつなげ、滅私奉公の精神によって祖国が守られ繁栄してきたこと^{7, 12-13, 18)}。④大東亜戦争の原因は日本ではなく、むしろ覇権思想に燃える米国にあったこと^{14-15, 17)}。米国は、誠実に対応しようとする日本から譲歩を引き出せるだけ引き出し、



写真1. ヘリー上陸記念碑（横須賀市久里浜）。支那の権益争奪戦に加わるための足がかりとして米国は日本を開国させた。



写真2. 戦艦三笠（横須賀市）。南下する露西亜に対抗して、アジア権益を維持したい大英帝国と、独立を守りたい日本とが協力してバルチック艦隊を撃滅した。



写真3. 永久平和を願って（絞首刑台跡地・池袋サンシャイン60ビル脇）。小さな公園の一角に石碑が立っている。花やお酒が供えられていた。



写真4. 靖国神社（東京都千代田区）。12月8日、産まれてこの方40年、その所在すら知らなかった私が、戦没者への敬意と感謝の気持ちをこめて初めて手を合わせてきたのである。

支那人に反日思想を吹き込み、さらに世界各国に日本に味方せぬよう圧力をかけて ABCD 包囲網を形成、自国の軍拡が成就したところで経済封鎖を断行したのである¹⁵⁻¹⁷。昭和16年秋、資源に乏しい日本は「戦って死ぬか」「飢えて死ぬか」のどちらかを選ばざるを得ない状況に追い詰められた。私は昨年の随筆に、日米戦争を回避できなかったのは日本の指導層の面子と無責任にあると考察したが、それは恐らく間違いであったと反省している。彼らは厳しい現実をよく理解した上で、戦いを選ばざるを得ない悲劇的状況に苦悩していたのではなかろうか。

12月8日に東京に出て西尾幹二の講演を聴講してきた。何故、米国は日本と戦争をしたかったのか？ 何故、米国は「反共」ではなくて「反日」を選んだのか？ 大東亜戦争が終結すると、米国は支那を共産党の手に明け渡してしまった。それらの理由として、a) 人種偏見、b) アジアにおける利権の確保、c) 「一神教であるキリスト教」と「万世一系の天皇崇拜」の相容れない関係、d) 米国の膨張主義などが挙げられるが本当のところはまだ分からないという。講演の中では特に「大東亜戦争は日本側には正当な理由があったことを理解し、その教訓を生かしてこれからどう生きていけば良いのかを考えることが大切なんだ。過去を懐かしがっているだけでは駄目なんだ。」という言葉が心に染みだ。次頁に2013年に読んだ本を並べた。いずれも現代でも役立つような教訓が書かれた良著であると思う。特に陸軍燃料廠³⁾はエネルギー問題、GHQ 焚書図書開封¹⁰⁻¹⁷⁾は戦前の日本人の史観、伊藤哲夫の著書^{7、18)}は開国を契機に国体の重要性に改めて気付いた明治期の日本人の姿を知るのに役立つと思う。新聞・テレビが流し続ける日本や皇室を

貶める偏向報道²⁰⁾や東京裁判史観を真に受けている間は、将来に向けた日本の正しい選択が出来るとはとても思えない。戦前の日本人が体験し書き残した歴史から己を見直し、相手を知って、はじめて現在の日本が抱える国防、歴史教科書、憲法改正、TPP、エネルギー問題に取り組む資格が得られるのだろうと考えた2013年であった。

■文献（読んだ順）

- 1) 陸軍参謀エリート教育の功罪 三根生久大 (1992)
- 2) プリズンの満月 吉村 昭 (1998)
- 3) 陸軍燃料廠 太平洋戦争を支えた石油技術者たちの戦い 石井正紀 (2013)
- 4) 陸奥爆沈 吉村 昭 (1979)
- 5) 真相箱に見るGHQの洗脳工作 日本解体 保坂正康 (2004)
- 6) 「真相箱」の呪縛を解く 櫻井よしこ (2002)
- 7) 教育勅語の真実 伊藤哲夫 (2011)
- 8) ミッドウェー戦記 亀井 宏 (1995)
- 9) 暁の珊瑚海 森 史朗 (2009)
- 10-17) GHQ 焚書図書開封1-8 西尾幹二 (2008-2013)
- 18) 明治憲法の真実 伊藤哲夫 (2013)
- 19) 同盟国アメリカに日本の戦争の意義を説く時がきた 西尾幹二 (2013)
- 20) 別冊正論 Extra.20 NHK よ、そんなに日本が憎いのか (2013)

豆知識

ニキビの語源

平安時代の「栄華物語」に出てくる「にきみ」という病気がニキビの語源で、漢字で書くと丹黍、丹は赤を意味し、丹黍は熟すと先が赤くなったキビの実を意味します。最初は丹黍を「にきみ」と読んでいたのをニキビと呼ぶ様になったのが由来です。

ヒルドイド軟膏と蛭の不思議な関係

ヒルドイド hirudoid は1949年ドイツで開発されたヘパリン類似物質が主成分の外用薬ですが、蛭の唾液から分泌される hirudin に由来します。ラテン語で蛭属を表す hirudia と日本語の蛭が同じヒルという読みになったのは不思議なことに偶然の一致です。hirudoid の母国ドイツでは保湿剤として使用されていないのも何か不思議です。同じ読み方といえば銀杏皮膚炎 ginkgo dermatitis の ginkgo、これは江戸時代に日本を訪れ、ヨーロッパに銀杏を紹介したケンペルが ginkjo と記載したものが誤植され ginkgo となったとの説がありますが、こちらは日本語由来です。



みちのく哀歌

埼玉医科大学総合医療センター皮膚科

伊崎 誠一

「ふるさとの訛なつかし
 停車場の人ごみの中に
 そを聴きに行く」

石川啄木の歌碑が上野駅にあります。明治43年、苦勞の末、三行詩の形式でようやく刊行した和歌集「一握の砂」の一句であり、ふるさとを離れて働く人から共感を得ています。啄木は旧制盛岡中学を明治36年に卒業した我が高校の先輩にあたる歌人です。この学校の伝統は現在の県立盛岡第一高等学校に受け継がれていますが、頑な時代錯誤的慣習と進取かつ自由な校風がモザイク状に受け継がれ、首相経験者などの政治家、軍人、実業家や医者に加え、小説家、詩人などの芸術家も多く生み出しています。

帰盛するとそこかしこに必ず目にするのは同じ歌集にある句で

「ふるさとの山に向ひて
 言ふことなし
 ふるさとの山はありがたきかな」

です。南部片富士とも呼ばれる秀嶺岩手山は夏も冬も美しい。

「石をもて追はるるごとく
 ふるさとを出でしかなしみ
 消ゆる時なし」

と合わせて、私選、啄木のふるさと三部作です。

啄木の1年上に銭形平次の作者野村胡堂、2年上に国語学者の金田一京助がいました。金田一京助は啄木の親友であり、また啄木の援助を惜しまず続けました。国文学者として名高く、われわれの多くは明解国語辞典でお世話になっています。胡堂は連載小説銭形平次捕物控 383 篇を書き、長谷川一夫主演の映画に加え、大川橋蔵が888回18年間、北大路欣也がその後88回8年間主演というギネス記録の連続テレビ時代劇になり、まさに国民的人気を博しました。しかし捕り物と言っても武器は投げ銭であり、残虐な描写は一切無く、江戸の人情の機微を中心に書かれたものです。胡堂は苦学のため東京帝国大学を中退したことがあり、銭形平次で成功してのち、苦学生にひそかに奨学金を出し、この事業は現在公益財団法人野村学芸財団に引き継がれています。

宮沢賢治は大正3年、盛岡中学を第28期、通算30回生として卒業し高等農林学校に進みました。賢治は農学、鉱物学などの自然科学に加え、音楽、文学にも秀でていました。盛岡のお土産屋にいくと、南部鉄の風鈴やのれんなどには、啄木の句とともに雨にも負けずはあらゆるところに使われていておどろきます。

「雨にも負けず
 風にも負けず
 雪にも夏の暑さにも負けぬ

丈夫なからだをもち
慾はなく
決して怒らず……」

で始まるこの句はあまりにストイックなためにかえって遠ざけられがちですが、賢治はユーモアにとんだ童話を多数発表し、その人柄の大きさが慕われています。

「東に病気の子供あれば
行って看病してやり
西に疲れた母あれば
行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば
行ってこわがらなくてもいいといい……」

と続き、医の原点をも教えてくれます。

時代は下って最近の我々の年代に属する作家として高橋克彦をあげないわけにはいきません。盛岡の岩手中学・岩手高校から早稲田に進み、その後江戸川乱歩賞をとるミステリー作家となり、さらにみちのくの勇者アテルイを描くみちのく歴史小説に挑みました。「炎たつ」では藤原三代の栄華と興亡を書き、NHKの日曜日の連続ドラマに取り上げられました。南部藩の医家の出身ということからも親近感を覚えます。みちのくの作家はいずれも内容の深い、哀しみを湛えながらも深く抑制した作品群を生み出しました。

みちのく哀歌を語る際に、2011年3月11日の東日本大震災、津波、その後の原発問題を避けて通ることはできません。しかし、記憶がまだ生々しく、文学作品の題材になるほど昇華されていないと思われます。今でも三陸海岸を訪れると、あるいは友人達の話を知ると、大変な中で必死に再建に努めているたくましい人間に感動します。いつの日か、多くの方々に、人生の教唆となる読み物となっていくことでしょう。それもさらなる「みちのく哀歌」ではあります。

豆知識

メンソレータムと建築家ヴォーリス

メンソレータムのリップクリームの口唇の接触皮膚炎をしばしば経験しますが、日本にメンソレータムを米国から輸入し普及させたのはヴォーリスです。むしろ建築家としてその名が知られ、関西を中心に活躍しましたが、東京でも明治学院礼拝堂、山の上ホテルなどを手がけました。メンソレータムは近江兄弟社で販売されましたが、近江という地名と「人類皆兄弟」というキリスト教精神に由来する社名で、宣教に熱心でありました。

Hutchinson がつく徴候は三つある

Hutchinson 3 徴候といえは晩期先天梅毒の 3 徴候ですが、これ以外に Hutchinson の名のつく徴候は二つあります。黒色腫の鑑別に重要な爪上皮の着色の Hutchinson 徴候、もう一つは帯状疱疹における Hutchinson 徴候で、鼻尖部や鼻背部に皮疹がみられれば眼病変の合併率が効率にみられるという徴候です。



ヒヤリ・ハット皆見賞

さいたま市大宮区・今川皮膚科
今川 一郎

2013年11月16日、慈恵医大皮膚科懇話会の席で石田 卓先生から皆見賞のエピソードでも書いてよ！と言われましたが、40年前のすでに時効になったできごとで申し訳ありません。

昭和43年頃、学生時代から厳しい先生として恐れられていた駿河台日大病院の三浦 修教授から眼瞼黄色腫はなぜ上眼瞼内側に発症するのか？解剖の教授をお願いしてあるから Leiche の組織片を貰って解明したまえ！との難題を仰せつかった。

諸先輩に相談すると今世紀中には解明できないだろうな……と言われた。その後、教授と会うたびに「どうかねえ？」と聞かれて何も手付かずの状態なので登院拒否寸前に追い詰められた。

この頃、板橋日大病院・森岡貞夫教授と東大の同級生で自衛隊中央病院・藤田恵一先生が皮膚科の手術指導にみえていたので、形成外科修行のため国内留学をお願いして、三浦先生から逃避することにした。

数年後、日大に戻り種々の色素性母斑に対して skin abrasion をもって治療していたところ、極めて急速に特異な再生色素斑を呈する症例に遭遇した。これら症例の臨床像は点状集簇性母斑であった(写真1)。

剥削術3～4週目に skin abrasion 部に一致して毛包一致性の黒色小点が出現し(写真2)、3～4ヶ月後には、何とコールタールのように真っ黒な再発色素斑を認めた(写真3)。当時、色素細胞母斑不完全除去に基づく悪性黒色腫の発生は一般的には否定されていた。病理組織学的にはこれら細胞に異型性は証し得なかったが、有棘層内にも樹枝状蛍光細胞が出現したなどの所見は悪性化への危惧の念を抱かせた。森嶋隆文助教授に法廷に立つようなことになったらどうする……と言われて観念した。

お家の一大事、眼瞼黄色腫は放棄し、被告人に

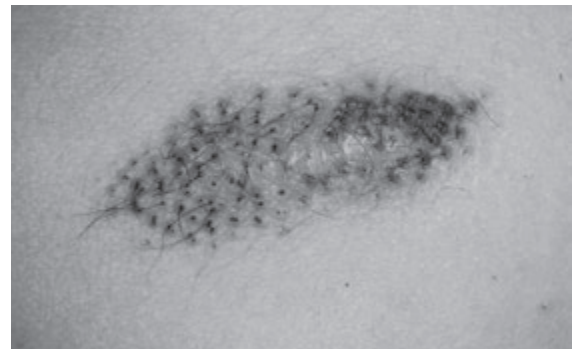


写真1 点状集簇性母斑

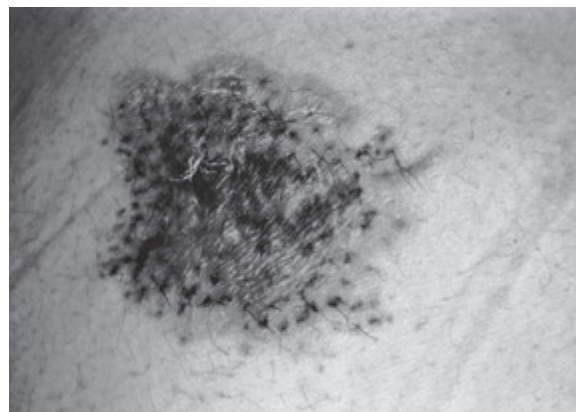


写真2 剥削術後3週目

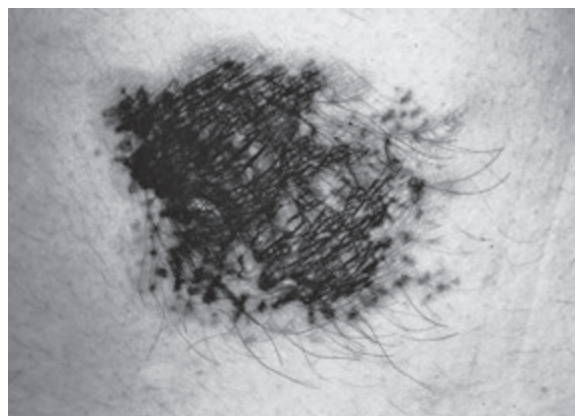


写真3 剥削術後3ヶ月目

なったときのために母斑再発機序の一端を解明し、これが将来、色素細胞母斑の治療上の指針の一助になりうることを願って本研究を行った。

色素細胞母斑治療後の再発機序に関する研究は内外で成され、病理組織学的にその再生色素斑は、境界母斑に始まる変化であることは知られていた。しかし境界母斑を形成する母斑細胞の由来はほとんど不明のままであった。

これは用いられた手技がH-E染色やDOPA反応などであって、メラニン産生細胞の動態を把握するのが困難であった。そこで今回は従来の方法に加えて森嶋先生が京都府立医大解剖学教室・佐野 豊教授、スウェーデンLund大学でマスターしたFalck & Hillarp 蛍光法を用いた。本法は蛍光物質をラベルするのではなく組織中に存在するモノアミン類を蛍光物質に変えて、蛍光顕微鏡下で観察する方法である。蛍光起因物質はDOPA, dopacontaining compounds, 5-S-CD, ノルアドレナリンといわれていた。

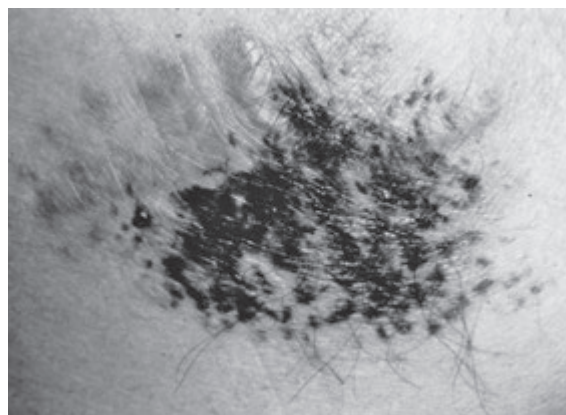


写真4 剥削術後12ヶ月目

さらに長期にわたり経過を観察すると眼を疑うような臨床像を呈した。12ヶ月後にはこれら瀰漫性黒色素斑は著名に退色し再び当初の点状の黒色素斑を再現した。(写真4)

以上、点状集簇性母斑の再発機序を考察すると、

- 1) 皮膚剥削術後3～4週目表皮形成完了と相前後して毛包一致性の黒色小点を認め(写真2)、毛包並びにエクリン汗管に由来する樹枝状メラニン産生細胞が再生表皮の基底層に出現。
- 2) 3～4ヶ月後には瀰漫性黒色素斑となり(写真3)、樹枝状メラニン産生細胞は樹枝状突起を失い表皮基底層及び毛包並びにエクリン汗管壁に集合して、境界部活性を形成し母斑細胞の性格を示してくる。
- 3) 術後12～15ヶ月目 瀰漫性黒色素斑は色素を失って点状色素斑となり(写真4)、表皮及び皮膚付属器における境界部活性の所見はなかった。癬痕下層に位置し、毛包やエクリン汗管に面する母斑細胞に限って特異蛍光が認められ、この母斑細胞は毛包並びにエクリン汗管に沿って skin abrasion による癬痕組織下層へと滴落するものと思われる。(図1・2)

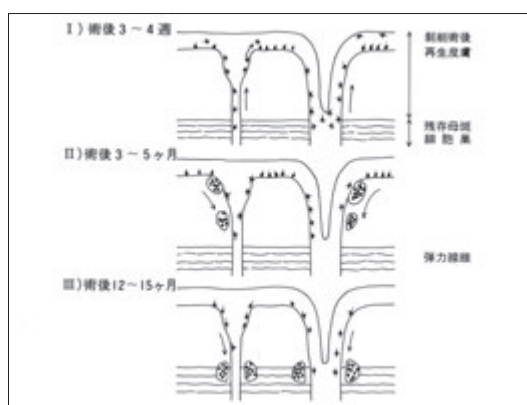


図1

今川一郎：色素細胞母斑皮膚剥削術後の再発機序について——点状集簇性母斑の再生色素斑に関する研究——、日皮会誌, 84: 273-287, 1974。

表皮形成完了と相前後して、毛包並びにエクリン汗管に由来する樹枝状メラニン産生細胞が再生表皮の基底層に出現する。次いでこれら細胞は表皮基底層及び皮膚付属器、殊にエクリン汗管壁に集合して境界部活性を形成し、終にはこの母斑細胞は毛包並びにエクリン汗管に沿って滴落する。

図2

点状集簇性母斑の再発機序

被告人への懸念は杞憂に終わったが、有罪判決に匹敵する令状が東北大学・清寺 真教授、京都大学・大藤重夫教授から届いた。(写真5・6)

当時は、皆見賞が何かを知らなかったのでも難迷惑だから辞退したい！ と言った独り言が地獄耳の三浦教授に聞こえ大目玉をくらった。

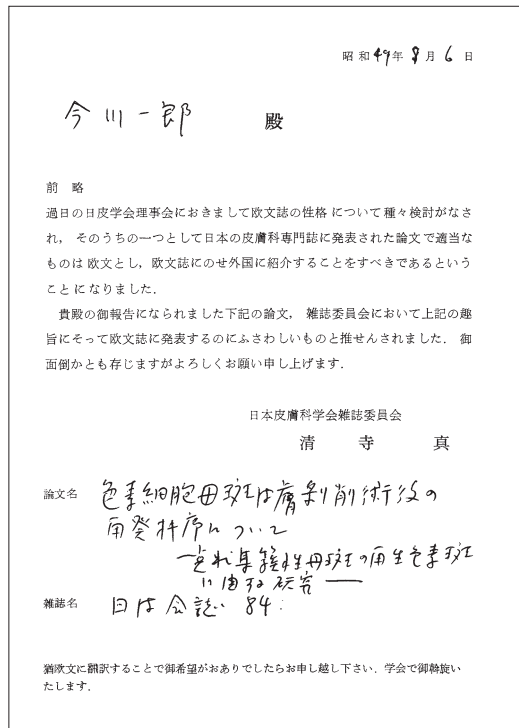


写真5 清寺 真先生からの手紙

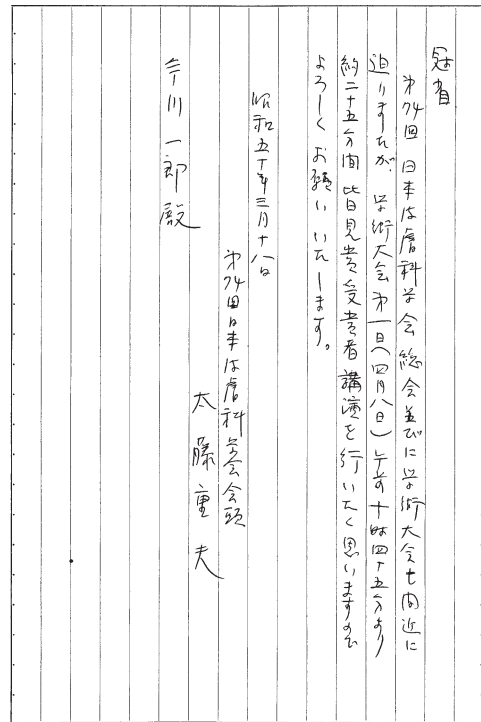


写真6 大藤重夫先生からの手紙



写真7 津田亮定作の一位一刀彫

吉田彦太郎先生には学会便りで、「診療現場で問題点を見出し目的に向かってユニークな蛍光法を活用したことは臨床家の研究態度として見事。」とお褒めをいただいたが、裁判という切羽詰まった状況に備えての研究であった。

賞金の15万円は、飛騨高山の津田彫刻所に一位一刀彫の般若を5面製作依頼して共同研究者と別った。現在一面30万円と聞いて時の経過に改めて驚いた。ベージュ色が現在チョコレート色に黒光りしている。(写真7)

約2年間、毎日曜日は弁当を持参し駿河台日大病院で時の過ぎるのも忘れ深夜まで過ごした。

暗がりでは蛍光顕微鏡の覗きすぎが禍いして信号の矢印の向きが判別できなくなり視力が1.2から0.7に低下、びらん性胃炎も発覚した。

ここで僕のハードディスクはメルトダウン。学問は健康を害すると悟り、大自然は豊かな心を育むといわれているので、縄文人のように山、川の恵みを戴いて英気を養っている。この経験が小野田寛郎氏のようにサバイバル事態に役立つような天変地異が起きないことを願っている。

もう一例、忘れられないヒヤリ・ハットは1993年発売されたヤマサ醤油が開発した帯状疱疹の特効薬ソリブジン (ユースビル)。

抗がん剤服用中の老人の帯状疱疹に投与した数日後、5-FU系抗がん剤との併用で重篤な副作用が発覚した新聞報道をみて間一髪大事に至る前に回収できた。正しく使えば少量で著効を呈した薬剤がメーカーの取り下げでこの世から消え去ったのは残念である。学生時代に薬理学教授が新薬は2年間、使用するなどと言われた言葉を思い出した。



抜かれた歯に思うこと

春日部ヒフ科医院

矢島 純

1か月前、歯の痛みで歯科受診したところ、左下6番臼歯の歯根破折があるといわれ2日前に抜歯した。隣の最奥歯7番大白歯は10年以上前に抜かれてしまっただけで、左下奥歯は全くの歯なし領域となり、左上奥健常臼歯2本に対する下の歯（2本欠損）の受け皿は無くなってしまった。数か月の化骨期間を待ってインプラントが予定されている。

抜かれるその歯に対して、60年近く付き合ってくれて有難うという気持ちが少し湧いた。歯科医は抜いた歯を見せてくれた。見慣れた臼歯の歯冠部分にしっかりと3本の歯根、これは初対面だが、それが連なり、うち1本が途中で破折していた。「その歯を持ち帰りますか？」突然、声が出た。よほど欲しそうに見えたのか？ でも、何か嬉しく、思わず首を縦にした。そのうち、歯の血糊を綺麗に洗い流し折れた歯を着けてキッチンと飾って置きたいという気持ちが生じた。

60年間踏ん張って支え続けてくれた自分の一部分に自分を投影している。前に抜かれた歯にこのような感情は伴わなかった。年を取るということが実感されてきたのかもしれない。

歯だけではない。20歳代にはフサフサでうるさいほどだった針金のようにせ毛の毛髪が、今はみごとに薄くなったし、張りのあった皮膚もシワが目立つようになった。視力低下、聴力低下、筋力低下、両親や同窓生などとの死別、住み慣れた環境の変化、といった、挙げれば切りのない程の対象喪失、最後には自分自身との別れということになります。それまでは、どんなにつらくとも事実を直視したいと思います。呆けてしまえば現実から離れられ楽かもしれませんが、許されるなら呆けコースは避けたいです。

今こうしている間にも“未来の位”が“現在の位”に瞬間瞬間、入って来ると同時に、喪失していく対象は“過去の位”に瞬時に消え去って行っています。“無限に存在している”と妄想している“未来”も、“今”の一点を離れてない、となると、今が大切！

抜かれた歯を見ながら、そんなことを思いました。



在職20年

川口市・済生会川口総合病院皮膚科
加藤 卓朗

東京医科歯科大学から済生会川口総合病院に移り、2013年7月で20年になりました。埼玉県皮膚科医会に入会して同じ年月が経ったことになります。

在職20年の感想を病院誌に書くように要請されました。考えた末、自分に関して、なくなったもの、増えたもの、変わらぬものをあげて、まとめました。いい機会？ですので、その原稿をそのまま掲載いたします。実は他のテーマを考えるのが面倒で、楽をしました。ご容赦ください。なお自宅は墨田区にあります。

病院誌原稿

20年間でなくなったもの・減ったもの

近所の相撲部屋／子どもと行く海水浴／テニス／競馬投票／ポケベル／ワープロ／スライド映写／創の消毒／イオントフォレーシス／2次会／髪の毛

加わったもの・増えたもの

部屋から見える東京スカイツリー／長男の嫁と3人の孫／ウォーキング／ライスボウル観戦／週刊文春の投稿川柳特選1句／携帯電話／J:COM／WOWOW／スカパー／パワーポイント／フットケア外来／光線療法／褥瘡対策委員会／ICD免許／所属学会と役職／研究を指導した7人の博士論文／診療中の拡大鏡／血圧降下剤

変わらぬもの

隅田川花火大会／夫婦仲？／ワイン／アナログの臨床カメラ／病理台帳／早寝早起き
そして、病院への愛着と感謝
20年間ありがとうございました

同じく、埼玉県皮膚科医会会員のみなさま、お世話になり、ありがとうございました。
今後ともよろしくお願い申し上げます。

ボストン留学の思い出

春日部市・ようこ皮膚科
桜井 楊子

私は2003年秋にハーバード医科大学皮膚科の外国人皮膚科医研修プログラム International Dermatology Training Program (IDTP) に参加するため、当時小学校5年生の息子と一緒に渡米し、ボストンに一年間滞在しました。あれから早10年も経ちましたが、ハーバード医科大学病院とその関連病院に通っていた忙しい日々、ボストンでの楽しい生活、自分にとっても息子にとっても貴重な経験でした。

IDTP は臨床見学を希望する外国人皮膚科医を対象とするものでした。半年と1年のコースに分かれ、月あたり約30万円位の参加費用が必要でしたが、参加者一人一人の希望に合わせて研修計画を立てるような柔軟なプログラムでした。

プログラムの責任教授は Massachusetts General Hospital 皮膚科の Ernesto Gonzalez 教授で、大変優しい先生でした。いつも私達がやりやすいようにいろいろな先生に話をかけ、気を配ってくれました。同期はアジア系皮膚科医4人で韓国のKさん、香港のTさんとタイのSさん、会ってすぐ仲良くなりました。自分の希望はまず皮膚科において、アメリカではどのような診療が行われているかを自らの目でみておきたいことと、レーザーの勉強をしたいという2点でした。各自にそれぞれのスケジュール表を週ごとに渡されました。前半は大体4人一緒に Massachusetts General Hospital を中心に Harvard Medical School の各大学病院を回ってカンファレンスや回診に参加し、教授や先生のお話を聞いたり、有名な先生の講演会も聞いたりしていました。後半はそれぞれのスケジュールで行動することが多かったです。電車とバスを使って、たまには研修医の車に乗せてもらい、市内にある大学の関連病院、市中病院、医局から出られた先生が開業された個人クリニックに行き、先生について診療現場を見学していました。

一番印象深かったのは医者が患者に対して、あくまでも fair で、friendly な態度で接するという姿勢でした。診察する際、大学病院では大体15分～25分はまず仕事、家族、日常的ないろいろなことについて雑談をし、最後の5分はやっと「診療」の本題に入って、最後に請求書の「診察時間30分」にチェックを入れて終了になります。「雑談」も診療のうちといったところでしょうか。関連病院や診療所の場合、日本の状況に似ていました。外来は3



左から3人目が Gonzalez 教授、左から2人目が私



皮膚科診療室

～4個の個室に分かれて、医者はドアにあるカルテボックスのカルテをチェックして、中で待っている患者を診るような具合で、半日で20～30人も見ていました。「雑談」もなくなっていました。レーザーについてはそれぞれの施設にいろいろな機種が置いてあり、レーザーを見たことのない自分には大変いい「見学」になりました。

病院の大小を問わず、その時の皮膚科医にはDERMASCOPY、スプレー式液体窒素治療器および壁掛け式電メス3点が「基本装備」のようでした。帰国前に電メス以外の2点を購入し日本へ持ち帰り、今も愛用しています。

小型で美しい都市ボストン。そこでの一年は自分にとって特別なバカンス、自分へのご褒美みたいなものでもありました。地下鉄NEWTOWN駅の近くに古いアパートを借りて、息子を近くの公立BOWEN小学校にかよわせました。息子は英語にもアメリカ的な生活にもすぐ馴染んで楽しんでいました。友人から譲ってもらった中古車が高速で止まってしまい、エンジンを替えるまで修理して又目の前で盗まれてしまって……多少大変なこともありましたが、今になって全部が「いい思い出」と思えます。



私たちが住んだボストンの古いアパート

豆知識

なぜ頭ジラミは毛髪に寄生し、毛ジラミは陰毛に寄生するのか

頭ジラミは毛髪に寄生し、毛ジラミは陰毛に寄生し、まつげにも寄生します。何故シラミの種類により寄生場所がちがうのかというと毛の太さと爪の大きさ関係によります。毛髪は他の部位の体毛より細く爪の小さな頭ジラミにはちょうど良い太さであるのに対し、爪の大きな毛ジラミにとっては毛髪より太い陰毛、まつげがちょうど良い太さであるからです。

ヘイリー・ヘイリー病、何故ヘイリー・ヘイリーなのか

Howarad Hailey と Hugh Hailey という兄弟によってこの病気が初めて報告されたことによります。

シスター・ジョセフの小結節、シスター（修道女）に続いてジョセフ（聖母マリアの夫）という何故男性名が入るのか

正確には Sisiter Mary Joseph nodule ですが、修道女の名でも男性の聖人の名を付けることができるからです。



ケヤキ並木の四季

さいたま市中央区・島田医院
坪井るみ子

国道463号線の浦和所沢バイパスと呼ばれる区間は、日本一のケヤキ並木といわれ、埼玉県けやきの県の木である欒けやきが2,417本植えられています（地図参照）。

秋：欒の葉が色づき、落ち葉が風に舞うころになると、はじめて防衛医科大学校皮膚科学教室の門を叩いた日を思い出します。昭和56年の秋から、私はさいたま市（旧与野市あるときは旧浦和市）の自宅から所沢にある防衛医科大学校病院に通いましたので、非常勤医師になってからも少なくとも週に1度は、およそ30年間、北浦和～航空公園間を往復したことになります。

ほとんどは自動車通勤でしたので、浦和所沢バイパスには多くの思い出があります。

冬：埼玉県には富士見市、ふじみ野市など、地名のとおり富士山がよくみえる場所がたくさんあります。埼京線や武蔵野線の列車内からもきれいにみえます。私が一番好きなのは、浦和所沢バイパスの羽根倉橋（荒川に架かる橋）の上からみる富士山です。冬の晴れた朝にみる富士の姿はとても美しく、厳しい寒さの中をがんばって出勤してきてよかったという気分になります。

春：寒さがゆるんでくると、冬の間沈黙を守っていた木々が、その存在をアピールし始めます。沿道に小さな梅林を見つけたり、雑木林の中に桜の木があるのを再発見したりします。民家の庭に、遠目でもはっきりわかるほど白い大きな花をつけたモクレンの大木を見ると、毎年のことながらうっとりします。4月下旬になると道路の中央分離帯に植えられたツツジが咲き始め、春はバイパスを通るのが楽しい季節です。



夏：我が家のふたりの娘が幼いころは現在よりも保育事情が悪く、認可保育園に入れなかったために、幼稚園に通わせました。私の出勤時刻は幼稚園が始まる時刻よりも早いので、やむなく朝は娘を自宅近くの認可外保育園に預け、9時過ぎに保母さんやその家族が娘たちを幼稚園に送り届け、退園時刻には私の姉たちが娘を迎えに行く、という二重ならぬ三重保育のお世話になっていました。

ある朝、クルマの窓を開けて初夏の空気を感じながらいい気分です。志木市宗岡を過ぎて富士見市に入ったころでしょうか、突然うしろから「ママ、どこへいくの？」と声がします。バックミラーにはふたつの小さな黒い頭がうつっています。愕然としました……江戸城内で、吉良上野介なかがみしよの指示どおりに自分は長袴ながかみしもを着けているのに、他の全員が烏帽子大紋姿えぼしだいもんであることに気付いた浅野内匠頭たくみのかみ（「忠臣蔵」です）は、こんな気持ちだったかと……うっかり者の私は娘たちを認可外保育園に預けるのを忘れ、クルマに乗せたまま所沢に向かっていたのです。気の利いた家臣もいず、携帯電話もない時代でしたから、私はほとんど半泣きでクルマをUターンさせ、道路脇の公衆電話をさがして、医局と保育園に連絡しました。その日は皮膚科外来で久木田教授の陪席を務める予定だったのですが、大幅に遅刻してしまいました。不思議に思うのは、普段ならクルマに乗っている間中しゃべったり歌ったり泣いたりしている子供たちが、あの朝に限って、私が子供を乗せていることを忘れるほど極端におとなしくしていたことです。車窓から観るめずらしい風景に心をうばわれていたのでしょうか。今でも時々思い出して、志木市に入ると意味もなくバックミラーを見てしまいます。

こうして四季を通じてさまざまな経験をしながら、30余年にわたって防衛医大に通いました。幸運なことに、初代教授の藤田恵一先生、久木田 淳先生、石橋 明先生、多島新吾先生、佐藤貴浩先生と、5人もの教授のもとで勉強させていただくことができました。藤田・久木田両先生は、残念ながら故人となられましたが、5人の教授をはじめ、防衛医大で出会い、お世話になったたくさんの方々に、心からの感謝をささげます。

豆知識

今では、報告されることのない *Microsporum ferrugium* という菌が、本邦での頭部白癬の原因の8～9割を占めていたという時代があった

頭部白癬の原因菌といえば今や *Trichophyton tonsurans*、次いで *Microsporum canis* ですが、遡ること1910～1920年代には *Microsporum ferrugium*（鉄錆様菌）という菌が、本邦での頭部白癬の原因8～9割を占めていたという歴史があります。1950年代を最後に *Microsporum ferrugium* による報告されなくなりましたが、その原因は大きな謎とされています。ちなみに *Microsporum ferrugium* の症例を世界で初めて報告したのは太田母斑の太田正雄であります。



皮膚科医の診察室で②

さいたま市見沼区・いしだ皮膚科
石田 卓

その1 「足の爪、真っ白になっちゃったんです。」

「爪の水虫ですね。」

「どうして、こんなに？」

「人間だって、古くなりゃカビが生えてくるんですよ。」

その2 「先生、水虫なのー、やんなっちゃう。」

「水虫なんてかわいいもんですよ、悪い虫がつくより、よっぽどタチがいいですよ。」

「こんなバアさんに悪い虫なんてつくわけないでしょ。ご機嫌とつてもダメ！」

その3 ヘボな治療でなかなか治らない足の水虫とイボの患者さんとの会話。

「先生どうしていつまで経っても治らないんでしょう？」の質問に窮して

「生き長らえて子孫を増やしたいと思うのは人間だけじゃなくて白癬菌だってウイルスだって同じなんです。みんな一生懸命必死で生きています。生物の一員として人間だけがいい思いをしようというのは、そう容易なことではありません。」とその場をしのぐ。

その4 イボの専門外来で。

「顔のウイルス性のイボ、みんな、治っているというのに、どうして、私だけ治らないんでしょう。先生のカリスマ性が足りないんじゃないかしら？」

「鰯の頭も信心からでしょ。患者も患者で疑心暗鬼だから、ますますNK活性が上がらないんだよなあ。」

その5 「先生、いつもの頭のクスリ下さい。」

「頭の中身、外見、どっちだっけ？」

「いつものフケのクスリ！ 中身はとうにあきらめてんの。もう！」

その6 「先生、背中、背中。」

「この引っ掻き傷みたいなのは、しいたけ皮膚炎じゃないかな？ 生しいたけ食べなかった？」

「先生、これは昨夜のカミサンの爪あと。俺が診てもらいたいのはこのシコリ。」

「あ！ 粉瘤ね。こりゃ失礼。」

その7 「この子の手、どうしてこんなに荒れちゃったんですか？」

「インフルエンザが流行っているからってキレイキレイの使い過ぎ。だからこんなキタナイキタナイになっちゃうの。」

その8 「先生、忙しくてストレスが貯まると、寝ている間に無意識で掻いて、いつのまにか全

身がガサガサになっちゃうんです。」

「アトピーの人は、皮膚だけでなく心も乾いていることが多いんだよね。だからスキンケアも心のケアも大切なんだ。」

その9 近所の主婦の会話

「あそこの先生がね『大丈夫』と言ってくれたから、もう大船に乗った気持ち。」

「本当に大丈夫？ あの先生。大船といたってタイタニック号よ。凶体でかくて、不器用そうだし……」

その10 「先生に、診療方針を変えてもらっても、処方を変えてもらってもいっこうに良くなるんですけど？」

「うーん、もう、変えるものといったら医者しかないなー。」

その11 「先生、足の裏のイボ、ちっとも治らなーい。もう痛くて痛くてハイヒールなんて履けない。」

「こんな所にイボがあったらそりゃ痛いよねー。でも、重い体重に踏まれて耐えているこのイボも気の毒だなあー。」

「先生、それちょっと笑えなーい。」

その12 「先生、いつもあそこの居酒屋でみかけるけど医者の不養生じゃない？」

「医者やってるから、まだこの程度で済んでんの。」

その13 ウオノメを削っていて

「あ、また削り過ぎちゃった。」

「こんな出血サービス、もういらない。」

その14 「先生、売薬を試しても、試しても、ちっとも治らず困り果ててきました。」

「下手な鉄砲が当たったら、今度はこっちが左前だよ。」

その15 「原因は体質でしょうか？」

「そうねー、体質が関係しない病気は一つもないからねー。」

その16 「先生、全然良くならない。もっと利く薬ないの？」

「この病気で、ヒトに使う薬はほとんど試したんだけどなあ？」

「それって動物病院行けてことですか？」

その17 ジベルバラ色秕糠疹の患者が来て

「どこの医者にかかっても治らないんです。」

「どこの医者にかかっても治らないけど、神様が一ヶ月位で治してくれる病気です。」

その18 「爪水虫の内服治療は、薬の費用もかかるし、毎月血液検査をしなければなりません。」

「先生、お金だけでなく血も取るというのはベニスの商人よりひどくありません？」

(埼玉県医師会誌 第750号より転載)



ゴルフと私とタイガー・ウッズ先生

指扇病院・皮膚科
若旅 功二

私がゴルフを始めたきっかけは当時研修医として勤務していた静岡県にある病院のゴルフコンペに強制参加させられたことでした。それまで全くと言ってよいほどゴルフクラブを握ったことのなかった私は、ラウンドするためには何を準備したらよいかさえわからず、とりあえず聞いたことのあるメーカー（ナイキ）で一式準備しました。勝手なイメージですが、当時の私はゴルフ＝タイガー・ウッズと思っていたのです。当時タイガーが使用していた「イグナイト」というクラブを購入し、赤いシャツと黒いズボンを身にまといタイガー・ウッズになったつもりでゴルフデビューしました。デビュー戦のスコアは……180。今でも忘れません。これが3日間のツアーであれば間違いなく優勝のスコアかもしれませんが、残念ながら1日で180です。正直、何がおもしろいのか全くわかりませんでした。

その後、研修医を終え、栃木県の病院に赴任したころからゴルフ熱に火が付きまして。まさにイグナイト（発火する）でした。栃木県には名門から河川敷まで多くのゴルフ場が存在し、プレー料金がリーズナブルなことでも有名で、初心者ゴルファーの私にとっては大変ありがたい環境でした。今では体力的にも家庭的にも難しいですが、当直明けや出勤前の早朝ラウンドに行くことも珍しくありませんでした。上達するためにゴルフ雑誌を買いあさり、タイガー・ウッズのDVDも購入し、週末になればテレビに嘯り付いてゴルフ中継を見ていました。「自分とタイガーはいったい何が違うのか？」と常に考えるほど熱中し、少なくとも独身時代は仕事とゴルフだけの生活だったように思います。

そんなゴルフ（タイガー・ウッズ）から学んだことがあります。ひとつは「忍耐力」です。ゴルフという競技は自分との戦いであると私は考えています。スコアはすべて自分の力量次第です。体調管理から始まり、コースの分析、如何に攻めるかというマネジメント、それを実行する技術と精神力、これらすべてがスコアに関わってきます。実際には思い通りになることの方が圧倒的に少ないので、OBにバンカーに池ポチャと常に忍耐のゴルフを強いられます。しかし、誰のせいでもありません、すべて自分の力量ですから……ただただ耐えるのです。タイガー・ウッズはドライバーの飛距離もアイアン・パターの技術もコースマネジメントも一流だと思いますが、彼のプレーを見ていて何より凄いと思うのはこの「忍耐力」なんです。ご存知の先生もいらっしゃるかと思いますが、2005年のマスターズで彼は最終日16番ホールでピンチを迎えますが、「伝説のチップイン・バーディー」を決め、その後、クリス・ディマルコとの壮絶なプレーオフを制して見事に優勝を果たしました。いかなる状況においても諦めないという彼の姿勢が結果につながった記憶に残る名勝負でした。

もうひとつは「無い実力は出ない（出せない）」ということです。毎回安定した打球を打つことの難しさはゴルフをされる方なら分かっていただけだと思います。狙った場所にイメージ通りの球筋でボールを運べた時の喜びは言葉にできません。たまたま良い打球が打てたというのももちろんうれしいですが、それではコンスタントに安定したスコアは出せません。日常診療で「診断はなんだかわからないけど、何となくステロイド塗ったら治っちゃった」というのと同じです。いざという状況で実力以上のものは出すことが出来ないわけですから、普段から安定した

打球を打てる実力をつけておくことが大切だと痛感しています。もちろん、まだまだその領域には遠く及びませんが……。

さて、ゴルフ好きがきっかけでこんな経験もできました。まだ記憶に新しい2013年の日本皮膚科学会東部支部学術大会では、かの有名な坂田塾の坂田信弘氏が特別講演をされておりました。坂田塾とは上田桃子や古閑美保などの女子プロゴルファーが在籍していたゴルフ塾です。また坂田氏は作家・漫画原作者としても知られており、代表作に「風の大地」というゴルフ漫画があります。私の愛読書です。そんな坂田氏と縁あって、講演前に控室でお話しさせていただく機会がありました。さすがに個人的なスイングチェックを受けることはできませんでしたが、世間話や女子プロゴルファーの裏話などで盛り上がり、最後は記念撮影までしていただき、楽しい時間を過ごすことができました。大会の会長であった自治医大の大槻先生が私のゴルフ好きをよくご存知でしたので、ご厚意により実現した貴重な経験でした。

最後に栃木県にあるお勧めのゴルフ場をご紹介します。ピートダイゴルフクラブ・ロイヤルコースというところですよ。栃木県日光市大沢町に位置し、東北自動車道の宇都宮ICからもアクセス良好なゴルフ場です。比較的トリッキーで戦略性に富んでおりますが、初心者から上級者まで幅広く楽しめるのではないかと思います。特にOUT 6番ホールは280ヤード・パー4の打ち下ろしは圧巻です。とんでもない高低差の打ち下ろしで、ワンオンも可能ですのでイーグルも狙える楽しいホールです。私はこのホールを目当てに何度も通っていたくらいです。少なくとも10回以上は挑戦しておりますが、イーグルは一度も無く、バーディーがたったの一回のみです。ご興味のある方は是非一度ラウンドしてみてください。

実は私、肘と肩の痛みのためここ1年ほどクラブを握っておりません。今は復帰を目指して体力づくりに取り組んでいるところです。私にとってゴルフは唯一といってよいほどの数少ない趣味のひとつですので、また必ずティーグラウンドに立ちたいと思っています。タイガー・ウッズも数々の故障やプライベートの問題を見事乗り越え、以前のように勝ち続けていますので、私もここで終わるわけにはいきません。これからもタイガー・ウッズをゴルフでは「先生」として、プライベートでは「反面教師」として追いかけて行きたいと思っています。タイガー・ウッズ先生、これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

豆知識

■ 黒色面疱 albinism の人には生じない訳

黒色面疱の色はメラニン色素によるものなので albinism の人には生じません。

■ 死ぬ前のことを何故、生前というのか？

生後、死後、出生前という言葉は理解できますが、死ぬ前のことを何故、死前といわず、生前というのか疑問が生じます。じつは生前という言葉が中国語由来の古い言葉で、生と前の間に返り点が入り、「前に生きていた時」という意味になるからです。



趣味はラーメンについて語ること

自治医科大学附属さいたま医療センター
教授 出光 俊郎

趣味の話の寄稿を依頼された。たいした趣味もないので、身近なラーメンの話を中心に思い出話を書いてみたい。まあ、最近、何につけても、話すことばかりで、実行をとまわらないのがイタイところである。

自分自身、小さい頃、「こなふきいも」といわれる乾燥肌、つまりアトピー性乾皮症だった。小学生時代には口の周りの LICK DERMATITIS に悩まされた。当時、仙台の中心部国分町界限には渡辺皮膚科という有名な皮膚科があり、その先生が自転車で通ったときに、母が「先生、うちの子の口の周りはなんでしょう？」と聞くと、渡辺先生は自転車に乗ったまま皮疹を視るなり、「うむ、これは中華（ラーメン）食ったらだめだ」とおっしゃった。今、思うとよくわからない説明だったが、しばらく、ラーメンは食べさせてもらえなかった。そんなこともあり、皮膚科医になるまで LICK DERMATITIS の原因はラーメンだと思っていた。当時ラーメンといえば、自宅近所の上海軒の塩味ラーメンが当たり前と思っていたが、ちょっと田舎にいくと醤油ラーメンだった事に違和感を感じていた。ラーメンが地方によって違うということを知るのはずっと後のことである。

昭和43年（中学時代）自分史の中で重大なことがあった。仙台に札幌ラーメンという今までは全く違うラーメンが来たのだ。同級生につれていってもらった「第一ススキノ」という店で塩バターラーメンを食べた。もやしがつっぷり入って一杯100円！これがうまかった、以後、約20年にわたり札幌ラーメンにはまった。ラーメンには醤油、塩、味噌の3種類があると仙台人もわかってきた時代に入った。

やがて、大学に入って自炊もするようになり、サッポロ一番味噌ラーメンの美味しさに出会った。これがまた感激だった。夜食にもやしや餃子をいれて食べた。いくら食べてももはや LICK DERMATITIS にはならなかった。在学中、ラーメン談義をした。「塩ラーメンを単品で頼む客が店主は緊張する」「汚い店がうまい」など真偽不明な話を信じた。しかし、汚い店でうまいかどうか、未だに疑問がある。自治医大の助手になったころ、S 厚生病院の隣の佐野ラーメン屋があった。失礼ながら汚い・テーブルは油でべとべと、置いてある漫画本、週刊誌は半年から1年前、この店はうまいに違いない雰囲気……だったが、おばあさんが一人できりもりしていた。味は好みではなかった（はっきり言ってマズイ！）。2度と来ることはないかと心に決めたが、忘れていた。数年後、またしても臨時のバイトのついでに引き込まれるようにしてまた入ってしまった。

あれは、昭和61年頃だっただろうか？ 東北大皮膚科ご一行さまに連れられて、皮膚科学会のついでに京都大学近くの「天下一品」本店にはるばる歩いて行った。この臭いラーメンに衝撃を受けた。「こ、これがうまいのか？」と一口食べて思った。これもラーメンなのかと奥の深さをかみしめた。当時の東北大には仙台から宇都宮の「天下一品」まで、高速道路を利用して、食べにくるクレージーな若手皮膚科医達もいた。

福岡で学会があったときのことである。自治医大皮膚科の矢尾板教授に誘われて、福岡の博物館で有名な邪馬台国の金印をみて、長浜ラーメンを食べた。そのあと、「若いんだから鮭くらい

入るだろう」、「いえ、もう、おなかいっぱいです」、と抵抗する私をタクシーで鮓を食べに連れて行ってくれようとしたが、その日は閉店で助かった。学生時代から7、8名の教授のご指導を賜っているが、教授とラーメンを2人で食べたのはこの長浜ラーメンのとき1回だけである。長浜ラーメンは硬さもチョイスがあり、粉落とし、針金、ばりかた、かため、ふつうとある。最近ではばりかた、かためを好んでいる。

秋田大学には1997年からごやっかいになったが、医学部の近くに牛骨ラーメンが開店した。さっそく行って見たが、すぐに狂牛病騒ぎがあり、案の定すぐに閉店の憂き目をみたようである。ここではニラ南蛮ラーメンにはまった。数年前白岡にできたというので行ってみたいと思っていたが、今年すでに閉店になっていた。

皮膚病は世相とともに新しい疾患も登場して複雑になるが、ラーメンも最近多彩である。さて、ご当地である。さいたま市はラーメンのレベルが高い！！長浜ラーメンなら博多の一風堂がある。さらに写楽、R&B、蒙古タンメン中本、ラーメン二郎、ジャンクガレッジ（これらは昔の感覚で言うラーメンなのかどうか未だに疑問であるが）、有名店が軒を連ねている感がある。たとえば大宮駅南銀座奥のラーメン二郎である。私の年齢で二郎について語れる人はさほど多くはないだろう。いわゆる「がつつり系ラーメン」であり、体に悪いのである。お酒を飲んだあとの締めを食べようとは絶対に思わないことである。それは朝に店の前を通ると失敗したもの達の痕跡が道路のところどころに現れている。これらががつつり系は独特の無料トッピングの注文方法があり、まるで呪文をきいているようである。

「野菜増し増し、にんにく、あぶら、からめ」（ラーメン二郎）、「まぜそば、全増し、エビマヨ抜きで……」（ジャンクガレッジ）なんとまぜそばにベビースターが入っている。無料野菜のトッピングはトリプルで野菜のみ1.5kg、増し増しで1kg（写真1）もあるのである（本当にそれだけあるかは怪しい、店員が素人をおどかして食べ残さないようにしている可能性もある）。

もし、外来に「抗ヒスタミン薬ましまし、外用薬ダブルで」とか「処方全マシでお願いします」という患者が来たらそれはラーメン二郎などにかよっているオタク（ジロリアンとよばれる）に違いないが、まだ、発見されていない。

昔はみそ、塩、醤油ぐらいの選択肢しかなかったが、つけ麺、まぜそば（油そば）、麺の太さ、硬さなど種類が沢山のチョイスがある。辛さでは、激辛と行きたいが、気が弱いのでまずは中辛を頼むとき、自分がつくづく小物だなあと思う。最近では東大宮駅前の写楽が美味しかった（写真2）。残念ながら、もはや列に長時間並ぶ根性・気力がなくなってしまった。語るだけである。人生で必要なことはラーメンから学んだ……とは思わないが、その時々でラーメンの楽しい思い出がある。



写真1 ジャンクガレッジのラーメン 野菜増し増し（左）と豚増し（右）



写真2 東大宮写楽にてラーメンを食す



チェロの魅力と私

埼玉医科大学 皮膚科 助教
緒方 大

チェロの音色を聞くと心が落ち着き、穏やかな気持ちになることができる。

それは俗に“人間の声の音域と同じ”と言われていてやや低めの音域をもっており、優しい音色で自然と心に染み込むような音を奏でるからだと思う。高音は旋律をきれいに奏で、低音はおなかに響くような安定した心地よい音が出る弦楽器である。

私は九州の片田舎で育ったが、そこには人口の少ない田舎でありながら、ジュニアオーケストラという小学生から高校生までの管弦楽合奏の団体があり、その演奏会を聴きに行ったことがチェロとの出会いであった。今振り返ると半ば親の誘導であったかもしれないが、「弾くならどの楽器がいい？」と聞かれ、一番前に座っている大きな楽器を指さしたことがチェロに触れるきっかけであった。

チェロは体の大きさに合わせてサイズが変わるため、始めた当初は1/4サイズであった楽器は、体の成長とともに1/2、3/4と大きくなり、中学生になる頃には大人と同じサイズの楽器を弾くことになった。

大学時代は演奏をすること、他の楽器の音を聴きながら演奏するアンサンブルの楽しさがわかるようになり、地元のアマチュア交響楽団や弦楽カルテット、様々な楽器との合奏と夢中になって演奏活動を行うことができた。医師として働き始めてからは、毎日楽器に触れる時間はとれなくなったものの、不定期に地元のオーケストラ演奏会に参加したり、職場での院内コンサートに参加し、細々ながらも楽器に触れる機会を作っている。現在の職場では学生管弦楽部のお手伝いもさせてもらっている。そんな中でも、ふとチェロの太くどっしりとした音を聴くと、心が落ち着くのである。

チェロは無伴奏チェロ組曲に代表されるように、旋律を奏でる単独の楽器として主役になることもできるし、低音楽器としてカルテットやオーケストラでは、曲全体を支え伴奏やリズムを受け持つ役割も担っている。私は医師として働き始めて10年目になるが、「医師」という職業も同じように主役になる場面もあれば、他の医療職と協力し合い（むしろ多くのことを教えてもらう場面も多いが）成り立つものだと常々感じている。

そんな魅力あふれるチェロとこれからも一生の友達として長く付き合っていきたいと思う。



医大内コンサート



チェロの魅力に取り憑かれ



私とゴルフ

坂戸市・阿部皮膚科
阿部 稔彦

私がゴルフを始めたのは、ほぼ30年前。

帝京大の皮膚科に入局してまもなくの事でした。

当時の医局長から「皮膚科に入局したらゴルフは必須！」と言われ、すぐに先輩にゴルフショップに連れていかれました。何せ初めての事なので、ドライバーとかスプーンとかアイアンが3番から9番まであるとか、何やら宇宙語のような言葉が飛び交う中一人、何が何だか訳のわからないまま、帰るときにはいつの間にかフルセットを購入し、バッグを担いで家に帰った記憶があります。

その後は入局して間もなくだったため、仕事や学会等の忙しい合間をぬっての練習場通いは結構大変なものとなりました。何故止まっているボールをうまく打てないのか……悪戦苦闘の日々でした。

特に私は中学から大学までバスケットボール一筋で、動いて走り回るというスポーツをしていたので、止まっているボールをうまく打てないという事はあり得ない事だと思っていました。なので、やればやるほどストレスの溜まるものでした。

その半年後にはコースデビューをしましたが、当時はゴルフブームのはしりでゴルフ場の予約が取れず、遠く静岡の三島まで行った記憶があります。朝4時起きでコースに行って散々な結果だったのはもちろんですが、一番記憶に残っているのはゴルフ場に風呂があり、プレー後に入浴して帰るという事を知らず、着替えを持っていかなかった事の方が、スコアのひどさよりも恥ずかしい思い出として残っています。

その後も月一回位のプレーを続けていましたが、都内にいる時は練習場の少なさと料金の高さで中々上達はできませんでした。しかし、昭和62年に小川赤十字病院に出向してからはゴルフ環境が大きく変わり、ゴルフ好きの仲間にも恵まれて少しずつ上達していきました。その後平成7年に坂戸市で開業し、数年後に近隣の鳩山カントリークラブに入会し、メンバーライフを満喫できるようになりました。

現在はゴルフの上達も年を追うごとに難しくなり、上達はあきらめてストレス発散の為ウォーキングに行く、という事に目標を変更し、楽しみと体調維持の為のゴルフライフを送っています。最後に約4年前から埼玉デルマ会のゴルフ幹事を仰せつかり、今までに四回のコンペを開催させていただきました。今後も毎年一回、10月の第一日曜日を埼玉デルマ会コンペの日として比企郡武蔵 OGM ゴルフクラブにおいて開催する予定です。自然の中日々のストレスを忘れて一緒にクラブを振ってみませんか？ 気兼ねなく気楽に。皆様のご参加を望んでおりますので宜しくお願い致します。



防衛医科大学校病院

皮膚科学講座
教授 佐藤 貴浩

防衛医科大学校病院の開院は昭和52年12月にさかのぼります。当時は12診療科200床の規模でした。現在は15診療科、15中央診療施設としての部並びに室と800の病床で運営されています。平成19年8月には災害拠点病院、平成20年8月には埼玉DMAT指定病院、平成24年4月にはがん診療指定病院となっています。平成22年には西病棟が新たにオープンし、さらに老朽化している東病棟、外来棟の改修工事が現在“ゆっくり”と進行中です。当院は所沢、狭山、入間市を中心とする埼玉西地区の基幹病院であり、周辺地域からの紹介患者が多くみられます。

皮膚科は、昭和52年に故藤田恵一先生が初代皮膚科学教授として赴任して以降、故久木田 淳先生、石橋 明先生、多島新吾先生へと引き継がれ、平成24年から私が第5代教授および診療部長として担当させていただいております。

当皮膚科の重要な使命として皮膚科診療能力を備えた医官を養成して自衛隊に供給することが挙げられ、この点が他大学医局と大きく異なります。また専門研修（いわゆる後期研修に相当）の期間は2年間（例外的に長くても3年間）と限られており、その後は自衛官として各地の医務室や地区病院などで本来の任務につくことになるため皮膚科にもどることはありません。したがって皮膚科教室員として当校に勤務し将来的に後身の指導にあたる立場になる機会も通常はないわけです。

当教室のもう一つの特異な点として関連病院が全くないことが挙げられます。それゆえ通常の医局で行われる医局員ローテートというものもありません。さらに防衛医大周辺には皮膚科の常勤医師が勤務している病院がほとんどないという状況にあります。関連病院がないことと相まって、医療連携は何かと不自由です。

さて、現在皮膚科一般外来診療は月曜日—金曜日の午前中に行われており（初診受付は10時半まで）、午後は腫瘍外来、乾癬外来、アレルギー外来、膠原病外来などとなっています。また多汗症や無汗症を対象とした発汗異常外来も開設しておりますので、患者さんをご紹介いただければと思います。病棟は改修工事の影響もあり、現在10床で運営しておりますが、慢性的にベッドが不足している状態です。そのため他大学病院等に受け入れをお願いせざるをえなくなることもしばしばです。また防衛医科大学校病院は“独特”な国家予算運営システム下であり、売上げが収益として病院に還元されません。結果として生物学的製剤など高額になる医療行為が充分に行えないといった問題も生じています。

このように、患者さんに満足いく対応がまだまだできていない現状があり、またご紹介下さる埼玉県皮膚科医会の各病院、クリニックの先生方には多大なご迷惑をおかけしている状況ですが、少しずつでも改善を試みて進めておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



自治医科大学附属 さいたま医療センター

皮膚科 臨床助教
中村 考伸

自治医科大学附属さいたま医療センターは、首都圏のターミナル駅である大宮駅より20分ほど歩いたのどかな場所に、地域医療への貢献と、へき地医療に従事する医師の育成および生涯教育等を目的として、平成元年12月に埼玉県大宮市（現・さいたま市）に開設されました。

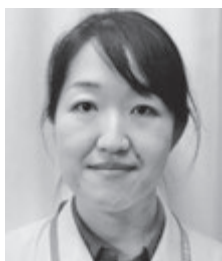
平成13年4月、皮膚科は出光俊郎教授のもと3人の医師でスタートいたしました。現在は6人の常勤医、3人の非常勤医（形成外科医1人を含む。）の体制で診療を行っております。

当科は病院の性格上、重症患者や手術患者が集まりますので、重症薬疹や壊死性筋膜炎、悪性腫瘍の治療や、皮膚病変を伴う他臓器疾患の診断を他科と協力して取り組む機会も多々あります。その一方で浅在性真菌症（水虫）、ざ瘡（にきび）などの日常的疾患の治療も行っており、診療する疾患は幅広く多岐にわたります。蕁麻疹、アトピー性皮膚炎の診療ではプリックテスト、パッチテストを行ない、原因や悪化因子の検索に重きをおくように努めております。自己免疫性水疱症の症例数も多く、他大学との連携により適確な診断を追求し、難治例に対しては血漿交換、大量免疫グロブリン静注療法を施行しています。

乾癬については、Narrow-band UVB 照射、さらに重症患者に対して生物学的製剤による治療も行っています。Narrow-band UVB による治療は、皮膚科開設当初より全身型照射装置を導入し、乾癬の他、難治性皮膚掻痒症、アトピー性皮膚炎、痒疹、尋常性白斑などの良性疾患、皮膚悪性リンパ腫（菌状息肉症）に対して良好な治療成績をあげています。

外来・入院での生検・手術件数は年間700例ほど経験しており、このうち高度な手術手技を必要とする症例は形成外科専門医による手術が行われています。さらに日々の診療に追われながらも大学病院としての一面も有しており、臨床カンファレンス、病理カンファレンス、手術カンファレンス、真菌カンファレンス、コールドケースカンファレンス、ジャーナルクラブを定期的に行い、各皮膚科関連学会への参加、発表にも力を注いでおります。

と真面目な話ばかりになってしまいました。当科の医師は経歴も様々で、はじめから皮膚科医を目指した医師の他、形成外科医、内科医、一般外科医の経歴を持つ医師が在籍し、忙しい中、チームワークよくお互い助けあいながら仕事をしております。さらに教授を筆頭として皆ユニークな一面を持っており、モノマネ上手、踊り上手（好きなだけ?）、カラオケ好き（アイドル、歌謡曲、演歌など）、釣り好き、お酒好きで飲むと楽しくなる面々です（これ以上話すことができないこともあります）。先日の出光教授還暦祝い会ではこれらの様々な個性が融合し、ナースも交えた十数人で合同のダンス余興（ちなみにAKBでした）に結実しました。今後も「明るく、仲良く、楽しく、仕事はしっかり」をモットーとしてまいりますので、埼玉県皮膚科医会の皆さま、今後ともどうぞよろしくお願い致します。



さいたま赤十字病院

皮膚科部長 成田 多恵

さいたま赤十字病院は昭和9年に日本赤十字社埼玉支部療院として77の病床を持つ病院として設立され、昭和22年には「大宮赤十字病院」に改称され以降病床数を増やし、平成15年には「さいたま赤十字病院」に改称しております。現在病床数は605床、県南地域における中核病院として、第3次救急医療を担う救命救急センターとしてICU・CCU等の施設を併設し高度診療機能を有するほか、災害拠点病院として地域に密着した医療を推進しております。今年度より口腔外科も加えて23の標榜診療科を有し、皮膚科は竹村 司（志木駅前皮膚科院長）先生をはじめとする錚々たるメンバーが名を連ねる伝統のある科ですが、竹村先生が皮膚科部長だった時代にはなかなか力も及ばず現在常勤医師2名で頑張っております。病床数は形成外科とあわせて3床となっておりますが、普段は病床数に関係なく力づくで5名～7名程度まで入院させております。

当院は、ターミナル駅である大宮駅から徒歩10分、国道17号に面し立地が良く、病床稼働率も常に高い状態を保っており経営状態は概ね良好であります。新病院建設の予算を準備するために更に健全な経営を常日頃から求められております。当院の建物はかなり老朽化しており、平成28年度にさいたま新都心西口付近に埼玉県立小児医療センターとの併設という形で同じ敷地内に新病院を建設予定です。第三次救急やがん診療など総合的な医療機関である当院と小児に専門的な高度医療を行う小児医療センターとを併設することにより、総合周産期母子医療センター機能など高度医療の充実が図られます。また、災害時には防災基地機能を持つ、さいたまスーパーアリーナが近接していることにより、防災拠点として迅速な救命救急活動が行われることが期待できます。

2008年に私が皮膚科副部長（部長代理）として赴任してから、長女、長男の出産に伴う休暇もあり常勤医としてフル稼働ではなかった期間もありますが、ようやく長男の育児休暇から復帰して約2年たちました。育児と仕事の両立にも少しは慣れてきたかなと思うところもありますので、主に女性医師の働きやすい効率的な外来・病棟運営から、失われた全身麻酔手術枠の復活に重点をおき頑張っております。学術的にも、以前の「ここに大宮日赤ありき」から「さいたま日赤ありき」を目指して、自主研究、日々学会発表、論文作成に励んでおります。

埼玉県皮膚科医会の皆様はよくご存じの通り、当院講堂は「皮膚の日」イベントでここ数年ご利用いただき、大変盛況にて終了しております。当院は約300人程度収容できる広い講堂を持ち、職員研修や災害時の対応に利用されております。しかし時には講堂で毎年行われる忘年会でハメを外しております。（写真）これからも、さいたま赤十字病院皮膚科をよろしくお願い致します。



毎年行われる忘年会で



川口工業総合病院

皮膚科部長
高河 慎介

当院は川口市内の鋳物工場や機械工場などの中小企業主が設立した健保組合の直営病院として昭和34年に8科32床で発足しました。「三丁目の夕日」や「キューポラのある街」の時代です。当時は現在の当院にあたる川口工業東部病院の他に川口工業病院という2つの病院がありましたが、昭和47年に統合して現在の川口工業総合病院となりました。設立当初は組合員のための病院でしたが、鋳物工場や機械工場の減少に伴い現在では一般の地域医療を担う病院として位置づけられています。その後病院の老朽化がすすみ幾度となく建て替えの話がありましたが、「時代の波」や「大人の事情」により翻弄され、紆余曲折をへて医療法人化の後に平成25年11月ようやく7階建ての新病院が完成しました。新病院は限られた敷地と日影規制のため手狭になりましたが、入院病室のベッド周囲面積は広くなり、快適な入院生活を送れるようになっていきます。現在は12科、常勤医師32人にて診療に当たっていますが、今後199床のうちハイケアユニット（8床）と地域包括ケア病棟（38床）をオープン予定です。



病院全景

皮膚科は東京医科歯科大学の関連病院として前任の古井良彦部長の後、平成24年10月より高河が引き継ぎ大学からの医員と2人体制で診療に当たっております。高齢化社会を反映して合併症を持つ患者さんも多くみられますが、小回りのきく病院規模であり、院内他科との連携もスムーズなのがいいところです。皮膚科病床は4階に2床あり、一般的な皮膚疾患を含め地域の皆さんの皮膚トラブルに対応しております。また院内の活動としては褥瘡回診がありますが、当院にはWOCナースがいないため、今後地域連携を含めたシステム作りが課題です。



開院祝いの花輪の前で

まだまだ新病院に移転したばかりで院内の整備、調整が必要な状況ではありますが、医師、看護師、コメディカルも含め心機一転、一丸となって地域医療に貢献する所存で頑張っておりますので、よろしくお願い申し上げます。



高齢者の皮膚科診療

所沢市・おうえんポリクリニック
並里まさ子

2005年6月に、所沢の郊外で開業しました。名称の由来を尋ねて下さる方には、「大きな円」と説明しています（仏教用語の大圓鏡智より）。また複数の診療科（内科、皮膚科、形成外科）を意味して、ポリクリニックと致しました。

近隣には農家が多く、高齢者の独居、老老介護も稀ではありません。往診依頼を受けますと、パートの先生に留守番をお願いして診療の合間に往診します。往診後の経過観察は、訪問看護との連携を密にして、メールで写真を送ってもらい、指示することも多いです。往診依頼理由の大半は褥瘡で、その他は急性・慢性の皮膚疾患ですが、疥癬、水疱症、陥入爪を含む指趾のトラブルなどが主なものです。

褥瘡の場合、初診時の所見は実に様々です。浅い潰瘍から、壊死組織をはがすと骨膜に達する組織欠損を認めるなど、長く気づかれなかった？と思われる例もあります。発症時の状況は、入院中が半分で、他の半分はデイサービスなどの職員や家族が発見しています。

初診時に除圧指導をしますが、これが最も大変です。ベッド上、座位の場合、それぞれの生活スタイルにあわせた除圧法を、家族や介護者と共に考えます。直ぐには理解が得られにくいので、往診のたびに除圧が守られているか確認します。またなるべく早期に、可能な限り壊死物質を除去しますが、出血が多くなりそうな場合は、一度だけクリニックに来ていただき手術室での処置となることもあります。湿潤環境を守る創傷処置は、既に広く認識されていると思いきや、包交時にカチカチに乾固した痂皮を認めることもあり、当初より創傷管理の指導を繰り返します。

除圧、創傷処置、排泄の管理、どれも大変なことですが、家族または介護者の中に誰か一人、「治そう」という熱意を持つ人がいるかないかで、予後が大きく変わるように思います。巷には介護関係の施設が溢れていますが、利用者一人一人への配慮には、かなりの温度差があるようです。

知覚・運動障害のある指趾に、二次的に発症する潰瘍も散見します。足・趾では、時に装具の調整が避けられません。簡単なものなら手持ちの免荷材料で工夫しますが、装具の部分的修正となると、装具士の方々との連携が十分行える例は少ないのが現状です。国内13カ所のハンセン病療養所には、義肢・装具室があり、重度の知覚障害と高度の変形を持つ四肢の装具に対応する技術の蓄積があります。この技術の恩恵を一般の地域医療でも受けられないものかと、夢のようなことを考えてしまいます。

一般に高齢者のフットケアは、不十分になりがちです。真菌感染の有無にかかわらず、漫然と抗真菌剤が続く例、肥厚・変形した爪・趾が皮膚に食い込んでいるもの、真菌感染で脆く崩れた爪甲、爪甲下の雑菌感染による炎症など多様です。月に1回でも外来受診が可能な場合は、足浴してフットケアを行います。施設入所者や在宅の場合は、担当看護師や介護の方々の活躍に期待したいです。地域医療の中で、高齢者のより良いケアができるよう、様々な医療資源・介護関連施設との更なる連携を願っています。



「ママのおへや」と「モモのお部屋」

飯能市・本町診療所
佐瀬くらら

それは、昭和60年頃からはじまりました。飯能に家を構え、子育てをしながら仕事を探していた管理栄養士の娘、高校生の頃からの知り合いだった歯科衛生士、それに入職してきたばかりの看護師。これだけのスタッフで何かやってみよう、と思ったのがきっかけでした。若いお母さんたちの「たまり場」を作ったのです。週1回、診療所の二階の一部屋で……。

スタッフはみんな、子育て現役バリバリの「ちょっと先輩お母さん」です。身体計測、歯磨き指導、離乳食相談、育児相談などもしながら楽しむ場所、今でいう「子育て支援センター」の先駆けでしたが、保健所、医師会、歯科医師会、助産婦会などから「よけいなことするな」みたいなクレームが寄せられたこともありました。



2012年クリスマス料理



2012年ハロウィン



アレルギー・アトピーの
食事と食べ方

それでも、固定メンバーは増えてきて、アトピー性皮膚炎の対応、特にその頃流行りだった「食物アレルギーに対する除去療法」に興味を持つ親子が集まってきたのです。それに応える形で、本を頼りの情報集め、料理教室、パン教室なども皆で楽しみながら続けました。メニューもたまってきて、平成5年には主婦の友社からのオファーに応じて「アレルギー・アトピーの食事と食べ方」という本まで作ってしまいました。小さい蓄積ってすごいと思い、本に載せるための料理作りを職員総出でやったり、取材のカメラマンに写真をステキに撮ってもらって大喜びしたり、楽しい思い出でした。初めの頃のメンバーは、もう大人になり、成人型アトピー性皮膚炎に移行した状態で通院してきている人もいます。

「心の問題」を抱えるメンバーのためには、二人の臨床心理士にお願いして、「モモ心理相談室」ができました。ネーミングは、ミヒヤエル・エンデの「モモ」から名付けたもの



クリスマス ライスケーキ



ママのおへやランチパーティ



ママのおへやご案内



ママのおへや手あそび

で、多くの人たちが相談に訪れ、私たちの心に残ったケースもいくつかありました。そうこうしているうち、最初にお願ひした先生のお一方は病を得て亡くなられ、お一方はある大学の教授になられ、臨床心理士になった孫が「モモのお部屋」と名を換えて、発達障害、不登校などの子どもたちの相談にのるようになりました。

時の移り変りに従って、若いお母さんたちの考え方にも変化がおこり、インターネットで、気に入った情報を集めることができるようになり、楽しむことを優先するようになって、また、行政主導の「子育て支援センター」があちこちに設立されるようになり、料理をすることから一緒に作業する集まりへの参加者が減ってしまいました。そこで方針変更です。除去食中心だった毎年の「アトピーっ子クリスマスパーティ」は、「保育士と手遊びなどして、ランチを楽しむパーティ」に形を変え、今年の会はとても盛況でした。

「できるところでできるだけ、一生懸命やろう」という私の気持ちは、頭の柔らかい、身体を使うことをいとわない、「ママがばーばにへんし〜ん！！」のスタッフに支えられ、益々発展中です。



外来手術を続けて26年

さいたま市見沼区・
松本皮膚科形成外科医院
松本 吉郎

大宮の地で、診療所を構えてから26年目になった。

特に取り柄がない自分であるが、開業当初から積極的に外来手術に取り組んできた。この15年位は年間700例余りの手術を毎年行っている。ほとんどが良性腫瘍と外傷で、約1%が悪性腫瘍である。ところが、患者さんの総数は増えていないのに、平成24年は850例、平成25年は1,000例を越えてしまった。理由はよく分からない。昼休みを利用して3～4例を行っているので、途中で外傷の患者さんがあつたりすると、体力的にはかなりきついついと感じられるようになったが、なんとか頑張っている。しかし、いろいろ大変な例もあり、自治医大さいたま医療センターの出光教授をはじめとする先生方には、特に助けていただいている。紙面を借りて感謝したい。

2月に順天堂大学の池田教授の依頼で「ラジオ NIKKEI」の収録があり、「脂肪腫」について、Q & A形式でお話しすることになった。自分になぜお声がかかったのか良く分からないが、今後は無いことと思ったので、お引き受けすることにした。一発収録で、うまくいったかどうか分からないし、間違いもあつたかもしれないが、「ケ・セラ・セラ」あとは知らない。

私のような者でも、このような経験ができたのも外来手術を続けていたからかもしれない。ただ手術を手がけて、卒後4～5年のころ、自分はどうも思っていた時もあったが、6～7年位になると、いかに自分が「ヘタ」かがわかってきた。今はというと、うまいとも思わないし、へたとも思わない。何が何だか良くわからない。結果に本当に満足することは少ない。医者となつてから、これまで少なくとも1万5千件以上は手術してきたのに、この程度であるが、自分のところでも手術を望む患者さんがおられる限りは続けていこうと思っている。

入会あいさつ



自治医科大学附属さいたま医療センター・皮膚科
永島 和貴

このたび埼玉県皮膚科医会に入会させていただきました永島和貴と申します。

このたびはご挨拶の機会を与えていただき、誠にありがとうございます。

私の経歴ですが平成15年に産業医科大学を卒業し、順天堂医院で外科系研修医として勤務し様々な外科系各科を研修したのちに北里大学形成美容外科に入局しました。形成外科医として臨床を行う中で皮膚という見た目にさらされる臓器を一から学びたいと思うようになり、縁あって新所沢で開業されている、おうえんポリクリニックの並里まさ子先生の診療を見学に行かせていただきました。一度は選んだ道ですので形成外科は専門医を取得するまで頑張りましたが、皮膚という臓器をより深く知りたいという思いから皮膚科医として働かせていただける場を求めました。自治医大さいたま医療センターの出光俊郎先生に拾っていただき、もうすぐ1年がたとうとしています。

皮膚科はとても面白く、忙しいですが充実した日々をおくっています。

日本皮膚科学会に入会するにあたっては会長の仲先生と埼玉医大総合医療センターの伊崎先生に推薦人になっていただきました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

埼玉県皮膚科医会のことは仲先生に教えていただき、入会させていただきました。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



川口工業総合病院
高河 慎介

この度、埼玉県皮膚科医会に入会させていただいた高河（たかがわ）と申します。

平成8年に東京医科歯科大学を卒業し、母校の皮膚科に入局しました。その後、大学院、東京都立墨東病院を経て平成24年10月より川口工業総合病院の皮膚科部長として赴任しました。川口市は東京のベッドタウンということもあり若年層の人口が増加する一方で、当科では60代以上の患者さんが半分以上を占めております。このため、合併症の多い高齢者の身体的特徴はもちろんのこと、社会的事情も考慮したケースバイケースの治療が求められ、高齢化社会の問題を痛感しております。昨年11月より新病院に移転しましたが、日常診療では「現場百回」を座右の銘とし「早い」「安い」「うまい」を目標に頑張っております。まだまだ地域のニーズにつきましては模索している最中ではありますが、今後とも一層の御指導と御鞭撻を賜われますよう、よろしくお願い申し上げます。

駿河屋

飯能市・本町診療所
佐瀬くらら

私が初めて訪れたのがいつだったか、忘れてしまいました。JR 東飯能駅から東にむかって細い道を5～6分。ブロンズのステキな看板が迎えてくれる、ちょっとおしゃれなフレンチのお店です。

オーナーシェフは、イケメンの木村憲司さん。いつも優しい顔で迎えてくれます。若いと思っていたら、今年は飯能市の「60歳の集い」に誘われているとか……これはキャリアの印ですね。銀行を辞めて脱サラ、お店を始められて……

飯能でお客様を迎えたいとき、スタッフの新年会または忘年会、そして家族で美味しいお料理を楽しみたいとき、しばしば足を運びます。

昨年、「埼玉県皮膚科医会誌」創刊号で「いいお店、好きな店」の紹介を見た時、是非ともご紹介したいと思ったものでした。

外勤で私の施設へいらっしゃる埼玉医大総合医療センターの伊崎先生も「お気に入り」のお店です。ご家族で訪れられたことがある、と伺いました。今年の本町診療所の新年会も、このお店で楽しみました。

コースはおしゃれな前菜が3皿。美味しいスープ、お魚料理とお肉、お腹いっぱいになります。出てくる美味しいデザートは「別腹」に納めました。お値段は……決してお安くはないのですが、「これだけ払って損した!!」とは、どなたも絶対にお思いません。その上、使われている食器がまた絶品。飯能焼のオリジナルです。器もお料理を引き立ててくれ、楽しみが益々、大きくなります。手頃なお値段の一品料理もあり、休業されたスイス仕込みの「チーズフォンデュ」がシェフのお勧め、とのこと。

駐車場はあまり広くありませんが、予約制になっているのでたいいてい利用できます。近くにある有料駐車場から歩くのも、東飯能から歩くのも、腹ごなし、もしくは健康のためのウォーキングに適切な距離です。まわりの植栽も嬉しいです。ハンカチの木、大きな松ぼっくりみたいな実のなる、クマシデ、その他。花や実の季節は、これもお楽しみの一つでしょう。

その上、私の勝手な「草木灯プロジェクト」も計画中。郷里の後輩、気鋭の彫刻家伊藤馨一さんをお願いして、飯能の美味しいお店のいくつかにおいて頂くことになっている素朴なモニュメントも近日中できるはず。とはいっても馨一さん、そこが芸術家。お願いしてから3年くらい経つのに、材料の石は、まだ伊藤さんのアトリエで制作待ち状態です。

更に、もう一ついいニュースです。「埼玉S級グルメ」に選ばれたとのことでした。



お店の正面から

皆さん、是非一度、お出かけください。

添付の写真は、伊崎先生と木村さんと、おまけの私のスリーショットです。

◆駿河屋
飯能市栄町19-14
電話 042-974-1000



「よい店、好きな店」

さいたま市見沼区・
松本皮膚科形成外科医院
松本 吉郎

大宮で開院してから26年になるので、知っている店は数多いが、一つの店に足繁く通う方ではないので、お店にとっては特に常連さんとは言えない店がほとんどかもしれない。

その中からまた行きたくなる店で、なるべくジャンルが偏らないように、何店か好きな店を御紹介する。

①料亭 大宮 一の家

明治18年創業、大宮氷川神社の参道脇にある掛茶屋として始まり、明治37年に割烹旅館となった。森 鷗外の「青年」にも登場する。窓から氷川の社が眺められる。庭の雰囲気も気に入っている。40名位までの会食ができる現在では数少ない料亭である。料理は伝統的で特に目新しさはないが、質が安定している。

◆さいたま市大宮区高鼻町2-276

TEL 048-644-0165

②フランス料理 アルピーノ (アルピーノ村)

素材を大切にし、軽やかで美しいフレンチに仕上がっている。コースのみ。いつ行っても美味しい。少人数をお招きするのに適している。

◆さいたま市大宮区北袋町1-130 アルピーノ村

TEL 048-641-9489

③すし屋の信太

埼玉には珍しい寿司屋。メニューがほとんど無いに等しい。美味しい寿司が食べたい時に行く店。「うに」「あなご」「こはだ」どれも美味しい。つまみも美味しいが、寿司が食べられなくなるので、ほどほどにしている。大将のトークには客の好き嫌いがはっきりしているが、慣れると毒舌(?)もサービスのうちと思えてくる。

◆さいたま市見沼区東大宮3-2-65

TEL 048-651-2531

④ワイン美食屋 とらぬ狸

ワイン好きにはたまらない店。私は時々しか行かないが、誰か知り合いの医師を必ず見かける。素材にこだわり、フレンチも和もいずれも美味しい。店主の小口さんにワインの好みと予算を言った方が良い。

◆さいたま市大宮区仲町1-1 ムサシビル2F

TEL 048-649-6388

⑤お好み焼き屋 人形町

普通のお好み焼きとはかなり違う。つまみが美味しいし、お好み焼きの粉が少ない。すべて主人か店員が焼いてくれる。いつもお客で満員。私は「よし町焼（青やぎの貝柱と三つ葉の入った小さなオムレツ）」で生ビールをまず一杯。「かき焼」や「しいたけの肉詰め」「ネギ豚焼」と続き、最後にお好み焼きの「アスパラベーコンチーズ」（グリーンタバスコで食べるのが私は好き）か「いか豚焼」（マヨネーズとケチャップとソースで見た目もきれい）を食べればお腹は一杯。漬物も美味しいし、その他餅を入れたり、ポン酢や七味で食べたり、味付けもバラエティー。ちなみにおたふくソースで食べる「大阪」や「広島」とはまた別の美味しさ。テレビで見かける女優さんとも出会えるかも。

◆さいたま市大宮区仲町3-16

TEL 048-641-7460

⑥洋食屋 紅亭

昭和33年創業の老舗の洋食屋。「ドレス・ド・オムライス」が有名だが、「ロース香味焼」「ハンバーグ」「カツレツ」とどれも丁寧な仕事で安くて美味しい。行列のできる人気店。

◆さいたま市大宮区桜木町1-3-3

TEL 048-641-6244

⑦手打蕎麦 棕庵

比較的新しい店だが、私の医院に近いのでよく県内の先生に尋ねられる。開店してすぐ行かないと、売り切れ御免となってしまう。細打ちで、清らかな香りがする蕎麦。

◆さいたま市見沼区大和田町1-221-4

TEL 048-687-0596

⑧珈琲館 大宮西店

チェーン店だがコーヒーとサンドイッチが気に入っている。週に1～2回は寄る。一番気に入っているのは、午後11時まで開店していて、1～2時間仕事（原稿書き等）していても若い店員さん達がやさしいこと。

◆さいたま市北区櫛引2-200-1

TEL 048-652-9041

埼玉県皮膚科医会 平成25年度 事業報告

平成25年

4月20日 第1回皮膚の日委員会（大宮 東天紅）

1. 前回の反省点、改良点の検討
2. タイムスケジュール作成
3. 講演者とテーマ決定
4. 役割分担
5. 企業への寄付・協賛・労務提供の声かけ方法の検討
6. 集客方法の検討

5月12日 第1回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成24年度第3回役員会議事録の承認
2. 学術委員会からの報告
3. 皮膚の日委員会の報告
4. 広報委員会の報告
5. 会員親睦委員会の報告
6. 第50回埼玉県医学会総会記念式典の報告
7. 平成24年度定例総会について
8. 埼玉県皮膚科医会50周年記念式典について
9. 学会援助について
10. 治療学会との合同特別講演

定例総会

1. 平成24年度事業報告について承認を求める件
2. 平成24年度収支決算書に関し議決を求める件
3. 平成25年度事業計画（案）に関し議決を求める件
4. 平成25年度収支予算（案）に関し議決を求める件

第50回埼玉県一枚会

1. 症例検討
2. 健保Q&A
3. 特別講演
『糖尿病性皮膚潰瘍の診断と治療 -ガイドラインに沿った考え方-』
関西医科大学皮膚科学講座准教授 爲政大幾 先生

6月29日 第1回50周年記念式典実行委員会（大宮 東天紅）

9月8日 第2回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成25年第1回役員会議事録について
2. 皮膚の日行事について
3. 学術委員会からの報告
4. 広報委員会からの報告
5. 会員親睦ゴルフコンペについて

6. 埼玉県皮膚科医会50周年記念式典について
7. 医学会総会の演題募集について
8. 集談会の当番校について
9. 第40回皮膚かたち研究学会について

第41回集談会

1. 一般演題

- ① 『グルコン酸カルシウム局注が著効した手指の化学熱症の1例』
塚原理恵子、成田多恵（さいたま赤十字病院 皮膚科）
- ② 『妊娠を契機に再燃した膿疱性乾癬』
牧 伸樹（自治医科大学付属さいたま医療センター 皮膚科）
- ③ 『IgG、IgA抗体がともにDsg1とDsg3を認識したIgG/IgA天疱瘡』
平井亜衣子、高橋英至、佐藤貴浩（防衛医科大学校 皮膚科）
- ④ 『皮膚筋炎に合併した陰茎癌の1例』
宮野恭平（埼玉医科大学 皮膚科）
- ⑤ 『足底粉瘤に対するくり抜き療法の経験』
出光俊郎、中村孝伸、飯田絵理、塚原理恵子、中村哲史
山田朋子、梅本尚可、加倉井真樹
（自治医科大学付属さいたま医療センター 皮膚科）
（埼玉医科大学総合医療センター 皮膚科）
- ⑥ 『Bazex 症候群の1例』
小林圭介、片桐一元（獨協医科大学越谷病院 皮膚科）
- ⑦ 『鼻部に皮疹が多発した皮膚リンパ球腫／リンパ腫の2例』
人見勝博（埼玉医科大学総合医療センター 皮膚科）

2. 健保Q&A

3. 特別講演

『皮膚真菌症の診断と抗真菌外用薬の使い方』

帝京大学医学部附属病院皮膚科主任教授 渡辺晋一 先生

10月5日 第2回「皮膚の日」委員会（大宮 東天紅）

1. 協賛・サンプリング・展示・労務提供の報告
2. 寄付と会計（寄付金・協賛金など）の報告
3. 講演者の報告
4. 皮膚のトラブル相談コーナーの報告
5. 広報の報告及び今後の集客について
6. 当日の運営、流れ、役割分担

10月6日 第4回ゴルフコンペ（埼玉デルマ会）
（武蔵 OGM ゴルフカントリークラブ）

10月26日 第1回広報委員会（大宮 東天紅）

1. 会誌発行について
2. ホームページの運用
3. メールマガジンの運用

11月10日 皮膚の日市民公開講座

テーマ「アトピー性皮膚炎と食物アレルギー ～違いを知って、スキンケア～」

講演Ⅰ

『アトピー性皮膚炎 -皮膚からはじまるアレルギーと痒みの不思議』
防衛医科大学校皮膚科教授 佐藤貴浩 先生

講演Ⅱ

『食物アレルギー -スキンケアでアレルギーを予防しよう-』
社会保険大宮総合病院皮膚科部長 梅本尚可 先生

・お肌のトラブル相談

11月17日 第3回役員会（ラフレさいたま）

1. 平成25年度第2回役員会議事録について
2. 皮膚の日委員会の報告
3. 学術委員会からの報告
4. 広報委員会の報告
5. 会員親睦ゴルフコンペについて
6. 埼玉県皮膚科医会50周年記念式典について
7. 今後の行事予定について
8. 健保委員会の報告

平成25年度「皮膚の日」学術講演会（ラフレさいたま）

1. 第51回埼玉県一枚会
症例検討
2. 健保 Q&A
3. 特別講演
『ライソゾーム病の臨床像と治療
-ムコ多糖症とファブリー病の皮膚病変を中心に-』
埼玉県立小児医療センター代謝内分泌科科長兼部長 望月 弘 先生

12月7日 第2回50周年記念式典実行委員会（大宮 東天紅）

平成26年

2月2日 埼玉県皮膚科医会学術講演会（ラフレさいたま）
特別講演

『皮膚アレルギーの最近の話題』
島根大学医学部皮膚科教授 森田栄伸 先生

2月20日 埼玉県皮膚科医会 AK フォーラム（ラ・ボア・ラクテ 2F）
一般講演

『日光角化症治療の実際』
深谷赤十字病院皮膚科部長 田口理史 先生

特別講演

『当院におけるベセルナクリームによる日光角化症の治療経験』
埼玉医科大学総合医療センター皮膚科准教授 寺木祐一 先生

2月22日 第2回広報委員会（大宮 東天紅）

1. 会誌編集について

- ①投稿原稿のチェック（問題点の解決）
- ②未投稿原稿の件（催促など）
- ③掲載広告の現状と今後の対策
- ④今後のスケジュール

2. その他

2月23日 第51回埼玉県医学会総会（埼玉県県民健康センター）

『軟部組織感染後皮膚欠損に対する局所陰圧閉鎖療法の使用経験』
埼玉医科大学 皮膚科 堀田奈緒美 先生、他



平成25年9月18日・講演の渡辺晋一先生（帝京大学医学部付属病院皮膚科主任教授）（前列左から3人目）



平成26年2月2日・講演の森田栄伸先生（島根大学医学部皮膚科教授）（前列左から2人目）



平成25年5月12日・講演の爲政大幾先生（関西医科大学皮膚科学講座准教授）



平成25年11月17日・講演の望月 弘先生（埼玉県立小児医療センター代謝内分泌科科長兼部長）

皮膚の日委員会報告

委員長 久保 和夫

皮膚の日のイベントも第4回を数えることとなりました。下記に示すように皮膚の日委員会を2回開き、一般市民の方に皮膚科診療の啓蒙になるように話し合いました。

第1回目は、前回の収支が報告され反省点、改良点に付き話し合いました。また公開講座のテーマを「アトピー性皮膚炎と食物アレルギー」とし講師を選定する方針が決まりました。会場は昨年同様さいたま赤十字病院講堂で、多くの来場者を目指し広報するなど活発な意見がありました。

第2回目では、協賛メーカーの状況、講師に佐藤貴浩先生（防衛医大）と梅本尚可先生（社保大宮）のお二人にご了解いただいた件の報告があり、相談医として出動していただいた先生方に多少なりともお役に立てるよう、お名前、住所、医院名の名札を作るなどの提案も出しました。

平成25年11月10日（日）当日は雨が心配されましたが、曇りのち晴れでした。ちなみに過去3回のイベントの日の天候は冷たい雨でした。150名を超える来場者があり、講演会でも多くの質疑応答がありました。休憩時間には、メーカーの展示ブースには黒山の人だかりでした。用意したサンプルのお土産も大変喜ばれました。

会場は現状復帰をしなければいけないとのことで矢島先生が各部屋の写真を取ってくださり助かりました。

懇親会は今年から会場の広い大宮東天紅に改め、町野先生のお陰で迎えのバスまで来てもらいました。人数の計算を間違え今泉先生はじめ多くの先生にご迷惑をおかけしました。医師と参加メーカーの皆さんが大変盛り上がった会となり、26年も11月9日（日）にさいたま赤十字病院での再会を誓い解散となりました。

平成25年度に以下の委員会を開催しました。

第1回皮膚の日委員会 平成25年4月20日

第2回皮膚の日委員会 平成25年10月5日



広報委員会報告

委員長 寺木 祐一

広報委員会では、埼玉県皮膚科医会会員および一般市民に対して、埼玉県皮膚科医会の活動を広く発信し、理解してもらうこと、ならびに会員どうしの交流を深めることを目的として、活動を行っております。

広報活動の基本柱は、埼玉県皮膚科医会ホームページ、メールマガジン、そして会報です。昨年度は埼玉県皮膚科医会として、これらの立ち上げ、および作成に着手し、皆様のおかげで、なんとか無事軌道に乗せることが出来ました。本年度は、ホームページ、メールマガジン、会報のさらなる充実を図ることを目指して、努力しております。

まず、ホームページに関してですが、アクセス数が急上昇していることもあり、病気の解説の欄の疾患数をさらに増やし、またタイムリーな話題も適宜取り入れることにしました。また、会員がホームページから投稿する際の利便性も改善しました。会員および一般市民の両方にとって、より充実し、より使いやすいホームページになるものと思われれます。

メールマガジンに関しては、町野先生のご尽力により、毎回、大変好評を博しております。今後も現在のペースで配信することに致しました。

埼玉県皮膚科医会の会報に関しては、さらに会員が楽しめる紙面になるよう、いくつかの改善を図りました。フォトサロンを広く文芸サロンとし、写真だけではなく、書、俳句などその範囲を広げました。また、去年は主にベテランの先生を中心に原稿を依頼しましたが、今年はなるべく若い先生にも依頼するように配慮しました。さらに、本年度は埼玉県皮膚科医会50周年の記念すべき年であり、紙面にも50周年記念特別企画をふんだんに盛り込みました。現在、会報の作成は順調に進んでいるところであり、楽しみにして下さい。

広報委員会では、今後もこれらの媒体を通して、埼玉皮膚科医会にとってより良い広報活動を行っていきたいと考えておりますので、どうぞ皆様のご意見を宜しくお願いいたします。

平成25年度に以下の委員会を開催しました。

第1回広報委員会 平成25年10月26日

第2回広報委員会 平成26年2月22日



健保委員会報告

委員長 田沼 弘之

健保委員会の活動内容・決定事項、健保Q&Aなどについて報告させていただきます。

1. 健保委員会の活動内容・決定事項について：

平成26年4月12日に全審査委員が一同に集まり、下記の事項につき、審査委員間にて協議がなされました。保険請求上不適切な傷病名（湿疹、皮膚腫瘍、膠原病など）、初診料及び各種管理料（皮膚科特定疾患指導管理料・特定薬剤治療管理料・救急医療管理加算）の算定基準、内服薬（抗真菌薬、抗アレルギー薬、抗菌薬、抗ウイルス薬、免疫抑制薬、ステロイド薬、ストロメクトール、ピチオンなど）及び外用薬（1回処方量、保湿剤、ユベラ、ザーネ、混合剤）、処置（皮膚科軟膏処置、創傷処置、いぼ冷凍凝固法）及び皮膚科光線療法の適応及び皮膚腫瘍におけるエコー・CT・MRI算定基準など。

最近、特に外用薬の1回処方量を大幅にオーバーされる医療機関が目立ちますのでご留意して下さい。成人のステロイド薬、抗菌薬、保湿薬はそれぞれ、100g、50g、200gまでです。また、経口抗菌薬は原則14日までで、ご瘡に対する長期投与は常用量の半量（ミノマイシン：50mg/日、ルリッド150mg/日など）しか、保険請求上は認められていませんので注意して下さい。

2. 「健保Q&A」のミニコーナーについて：

年4回、埼玉県皮膚科医会開催時に実施していますので、必ず出席の上、各自疑問点については是非、ご質問してください。可能な限り、ご納得頂けるよう御回答したいと思います。また、各関係所轄の許可が得られた事項については書面にて御回答する予定ですので、奮ってご参加ください。会員からの質問に対しては随時、口頭で回答致しますが、後日、書面や電話などでは回答することは許可が得られていませんのでご了承ください。

3. 平成26年度診療報酬改定について：

消費税の増税に伴い初診料・再診料・外来診療料などが引き上げられましたが、500床以上の病院を中心に紹介率・逆紹介率・妥結率などが強化されましたので病院については事務方と密に連絡を取って速やかに対処するようにして下さい。

皮膚科関連として主な改定点は、血液採取（静脈）、苛性カリ直接鏡検、創傷処置5・熱傷処置5（乳幼児加算）、デブリードマン3、遊離皮弁術などが増点が挙げられます。詳細につきましては日本臨床皮膚科医会が作成した『平成26年度診療報酬改定の概要』を是非参照して下さい。この小冊子につきましては皮膚科医会開催時に配付する予定です。

4. 審査基準の作成・HP掲載について：

審査基準については可能な限り、「健保Q&A」のミニコーナーで順次、口答にて説明し、さらに文書にて公開できるように健保委員会内に小委員会（委員長：永井 寛先生）を設置し、準備を進めています。今後は順次、ホームページ上に公開し、最終的には審査基準に関する小冊子を発行する予定です。



埼玉県皮膚科医会50周年記念講演会及び式典の報告

50周年記念式典実行委員会委員長 松本 吉郎

平成26年5月11日（日）午後4時から、ラフレさいたまにて埼玉県皮膚科医会50周年記念講演会及び式典を開催したので報告する。

ご出席は会員が71名、その他御来賓の先生及び会員外の先生等47名を加えて、計118名であった。

50周年記念品の図書カード（図1）は、4月に会員全員に送付した。



図1 記念図書カード

1. 50周年記念式典実行委員会

表1の委員の先生方により、計3回（平成25年6月29日、同25年12月7日、同26年4月5日）実行委員会を開催し、1年前より準備を行った。

表1 50周年式典実行委員会委員

		氏 名	医 療 機 関 名
1	会 長	仲 弥	仲皮フ科クリニック
2	委員長	松 本 吉 郎	松本皮膚科形成外科医院
3	委 員	伊 崎 誠 一	埼玉医科大学総合医療センター
4	委 員	永 井 寛	永井皮膚科
5	委 員	矢 島 純	春日部ヒフ科医院
6	委 員	今 泉 俊 資	今泉皮ふ科医院
7	委 員	寺 木 祐 一	埼玉医科大学総合医療センター
8	委 員	石 塚 敦 子	石塚外科医院
9	委 員	横 井 清	さくら皮フ科
10	委 員	竹 村 司	志木駅前皮膚科
11	委 員	坪 井 るみ子	島田医院
12	委 員	長 村 洋 三	長村皮膚科クリニック

2. 記念講演会

信州大学名誉教授 斎田俊明先生に「メラノーマの診断と鑑別～色素性皮膚病変に対するダーモスコピーの有用性～」と題し、御講演をいただいた。座長は本会副会長の伊崎誠一先生がつとめられた。

素晴らしい御講演内容に対し、フロアから活発な御質問があり、内容の濃い討論が行われた。会員にとって、明日からの診療に役立つ実践的な御講演であった。



50周年記念式典実行委員の皆様

表2 式典式次第

	司会	埼玉県皮膚科医会	常任理事	松本吉郎
開会の辞		埼玉県皮膚科医会	副会長	伊崎誠一
会長挨拶		埼玉県皮膚科医会	会長	仲 弥
来賓挨拶		埼玉県医師会	会長	金井忠男先生
		日本臨床皮膚科医会	会長	若林正治先生
		千葉県皮膚科医会	会長	千見寺ひろみ先生
		神奈川県皮膚科医会	会長	鎌田英明先生
		東京都皮膚科医会	会長	大路昌孝先生
		静岡県皮膚科医会	会長	宇野明彦先生
功労者表彰				
乾杯		埼玉県皮膚科医会	参与	竹村 司先生
アトラクション		1) チェロ演奏	演者：緒方 大	ピアノ伴奏：小笠原貞宗
		2) 歌唱	歌手：川口早苗	ピアノ伴奏：小笠原貞宗
		3) バイオリン演奏	バイオリン：矢島 彩	ピアノ伴奏：河野紘子
		4) 弦楽四重奏	『カルテット・アフロディーテ』	
閉会の辞		埼玉県皮膚科医会	名誉会長	長村洋三

3. 記念式典（表2）

伊崎誠一副会長の開会の辞に続き、主催者を代表して仲 弥会長が御挨拶を行った。

続いて、埼玉県医師会会長 金井忠男先生、日本臨床皮膚科医会会長 若林正治先生、千葉県皮膚科医会会長 千見寺ひろみ先生、神奈川県皮膚科医会会長 鎌田英明先生、東京都皮膚科医会会長 大路昌孝先生、静岡県皮膚科医会会長 宇野明彦先生の6名の御来賓の先生方より御挨拶をいただいた。

さらに、当医会功労者13名（表3、御出席は8名）に対し、仲 弥会長より感謝状と記念品の贈呈を行った。

続いて、本会参与竹村 司先生の御発声により高らかに乾杯があり、懇談・親睦が行われた。

アトラクションは、最初に本会会員の緒方 大先生によるチェロの演奏があり、続いて同じく会員の川口早苗先生による日本の歌があり、最後に矢島 彩様（本会副会長矢島 純先生の御息女）によるバイオリンの独奏に続き、カルテット・アフロディーテによる弦楽四重奏が行われた。

いずれも素晴らしい内容で会員一同楽しませてもらった。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、名誉会長長村洋三先生に御挨拶をいただき、盛会のうちに午後8時に閉会となった。

御出席いただいた御来賓の方々、御講演いただいた斎田俊明先生、アトラクション御出演の方々、また、準備と当日担当していただいた委員の先生方、協賛、御寄附をいただいた各社及び献身的に援助していただいた医会事務局の方々に深く感謝する。

（文責：松本吉郎）

表3 功労者

松岡明哲先生
神野クララ先生
竹村 司先生
田谷元佑先生
石橋 明先生
番場 秀和先生
北村 啓次郎先生
大城 晶子先生
今川 一郎先生
宇佐美 善政先生
遠藤 幹夫先生
長村 洋三先生
鈴木 忠彦先生

◆ 2013年「ひふの日」市民公開講座

アトピー性皮膚炎と食物アレルギー ～違いを知ってスキンケア～

石塚 敦子

仲会長のもと、2010年から始めた埼玉県皮膚科医会主催の皮膚の日記念イベントも今年で4回目を迎えました。「しみ、しわと皮膚がん」～気軽に皮膚科へ行こう～というテーマで行った初年度は、来場者も100名程でしたが、年々回を重ねる毎に来場者が増えてきました。今年は「皮膚の日－市民公開講座」と名称も改め、11月10日（日）午後1時よりさいたま赤十字病院講堂で「アトピー性皮膚炎と食物アレルギー」～違いを知ってスキンケア～というテーマで開催されました。



会場のさいたま赤十字病院



受付の様様



イベント会場では……

皮膚のトラブル相談コーナー

講演に先がけて、恒例の皮膚のトラブル相談が開かれました。12時過ぎ早々に受付される方もおられ、相談開始を15分繰り上げるなど昨年同様大変盛況で、相談者は58名でした。10代から70代までの方々がさいたま市を中心に県内各所から参加され、相談はアトピー性皮膚炎を中心に爪、毛髪、シミ、



薬剤など多岐にわたる内容でした。浦和地区をはじめ、春日部、与野の13名の先生方がボランティアで相談医をして下さり、丁寧かつ迅速に対応しておられました。

講演

その後、防衛医科大学校皮膚科教授、佐藤貴浩先生による「アトピー性皮膚炎～皮膚からはじまるアレルギーと痒みの不思議」と社会保険大宮総合病院皮膚科部長、梅本尚可先生による「食物アレルギー～スキンケアでアレルギーを予防しよう」の2講演がありました。

佐藤先生からは、アトピー性皮膚炎の皮膚は過敏で痒みの原因が多種多様であり、痛み刺激さえ痒みとして感じ、搔くことをやめるのは難しいと説明がありました。梅本先生は食べる物を皮膚に塗る危険性—例えばピーナッツオイルを皮膚に塗るなどを充分認識するようにと話されました。両講演ともに大きくなずく来場者がたくさんいらっしゃいました。



「アトピー性皮膚炎～皮膚からはじまるアレルギーと痒みの不思議」



講演をする佐藤貴浩先生

防衛医科大学校 皮膚科教授 佐藤貴浩 先生

アトピー性皮膚炎のはじまりはアレルギーではない！？

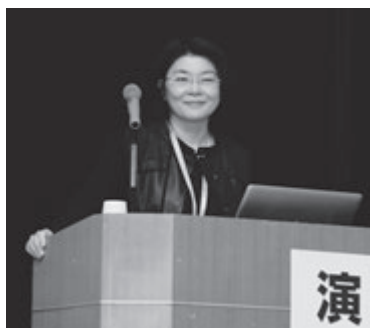
アトピー性皮膚炎といえば、アレルギー体質がもとで卵や牛乳アレルギーになり、それらを食べることが湿疹の原因になると思っている方が多いかもしれません。実はアトピー性皮膚炎にはアレルギー的な面だけでなく非アレルギー的な面もあり、近年の研究で後者がとても重要であることが明らかになってきました。非アレルギー的な面とはすなわち、肌が乾燥しやすいこと（ドライスキン）、そしてバリア機能が弱いことです。バリア機能が壊れると、ちょっとした刺激でも皮膚が反応して炎症をおこしてしまいます。またこのような皮膚からアレルゲンが侵入すると、皮膚炎だけでなくやがて食物アレルギーやアレルギー性鼻炎などになる危険性が高まるのが最近わかってきました。つまり、食物アレルギーがアトピー性皮膚炎の原因なのではなく、皮膚の乾燥とバリア機能低下が原因で食物アレルギーなどになっている可能性があるのです。

アトピー性皮膚炎の痒みはとても複雑

アトピー性皮膚炎では耐え難い痒みがつきものです。患者さんが搔きつづける様子は見ている方としてもつらいものです。痒みをおこす主な成分はヒスタミンです。そのため痒み止めとして抗ヒスタミン薬が処方されます。ところが飲んでも痒みがピタッと止まることはあまりありません。実はヒスタミン以外にも痒みを起こす物質がたくさんあることが知られています。またアトピー性皮膚炎の患者さんは痒みにとても敏感で、ちょっとした痛み程度の刺激なら“痒い”と感じてしまうことなどもわかってきています。さらに精神的なストレスがかかると、緊張・不安・イライラ解消のために無意識に搔いてしまうという人も見られます。周りでみているとつい“湿疹が悪くなるから搔いてはダメ！”とつい言ってしまうがちですが、搔き続けずにはいられない深いワケがあったのです。とはいっても搔けば皮膚のバリアは壊れます。湿疹の炎症を塗り薬で早めに鎮静化させること、そして日常的にスキンケアをしっかり行うことは、今後のアレルギーの予防や痒み対策としてとても大切なのです。

「食物アレルギー～スキンケアでアレルギーを予防しよう」

社会保険大宮総合病院 皮膚科部長 梅本尚可 先生



講演をする梅本尚可先生

1. アレルギーのはじまり

人は生まれてすぐは何もアレルギーを持っていません。ある物質に繰り返し曝露されているうちに、その物質を抗原（またはアレルゲン）と認識し、それ以後その抗原に対してアレルギー症状が出現するようになります。ある物質を抗原と認識することを感作とよび、食べて感作が成立すると経口感作、皮膚に接触して感作されると経皮感作といいます。

2. 皮膚からはじまる食物アレルギー

食物アレルギーのはじまりは経口感作と考えられていたため、食事を制限して感作成立を防ぐ試みが長い間行われましたが、厳格な食事制限でも予防はできませんでした。2000年代になり食物アレルギー発症における経皮感作の関与が指摘されました。日本では加水分解コムギを含んだ茶のしずく石鹸で顔を洗っているうちに小麦に感作され、大勢の人が小麦アレルギーになるという事件がありました。さらに遺伝的な乾燥肌で皮膚のバリアが弱い人はアレルギー性鼻炎、喘息などを合併しやすいことも証明され、経皮感作が皮膚とは関係なさそうなアレルギー疾患にも関わっていることがわかってきました。

3. 皮膚のバリア機能

皮膚には外界から病原体、抗原などの侵入を防ぎ、体内からの水の喪失を防ぐバリア機能が備わっています。経皮感作を予防するにはこのバリア機能が重要です。体表最外層の角層がバリアとして大きな役割を担っており、角層が乾燥してガサガサ剥がれたりヒビ割れるとその機能は低下します。角層は十分に水分を含み柔軟性、伸展性を保たなければなりません。

4. スキンケアで経皮感作を予防しよう

角質に水分を保持するにはどうすればいいでしょう？ まず湿疹を治して下さい。ごく軽い湿疹からも水分はどんどん失われます。湿疹を治さずに保湿剤を塗っても潤いは戻りません。湿疹を治したら、次は保湿剤の外用です。保湿剤の効果的な使用法はこれからの検討課題ですが、入浴後保湿剤を塗ると角層の水分量は上昇します。また洗浄の仕方も大切で、ゴシゴシ強く擦ったり、石鹸を使いすぎたり、石鹸のすすぎ残しがあると角層を痛めます。

最後に、湿疹や乾燥でバリア機能の低下した皮膚に食物が接触する危険性を知って下さい。食物そのものだけでなく食物性オイルなど食物成分を含有した石鹸や保湿剤、化粧品が多数流通しています。食物成分のすべてが危険ではないでしょうが、現時点ではどういうものが危険なのかわかりません。自然の物、植物性の物、食べる物はすべて安全だという思い込みは間違いです。

スキンケア製品の展示と説明

会場の一角では、今年もメーカー10社より製品展示、紹介があり講演の合間に大勢の来場者が立ち寄り、メーカーの方々も汗だくで懸命にPRされていました。メーカーの人から「一般の方々の生の声をこんなに聞くことができてすごくよかった」との声もありました。メーカー9社が提供して下さったサンプルのお土産も相変わらず大好評でした。

最終来場者数は230名でした。リピーターの方々、昨年参加した友人に誘われて参加されたという方もいらっしゃって、私たち皮膚の日委員にとっても、皮膚の日イベントとして広く認識されてきたという手応えを感じる一日でした。次回の皮膚の日市民公開講座は、平成26年11月9日（日）に予定しています。皆様のためになるよう、参加して良かったと思っただけのように開催したいと思います。



来場者の皆さんで賑わう「スキンケア製品の展示と説明」会場



平成25年11月10日 「お肌のトラブル相談」

相談者人数 58名 (2012年64名、11年53名、10年16名)

性別 男11名 女47名

年齢分布 (不明4)

20歳以下	2
21～30歳	2
31～40歳	8
41～50歳	6
51～60歳	10
61～70歳	10
71歳以上	16

相談者の住所

さいたま市 35 (北7、大宮6、見沼6、浦和4、南4、中央3、岩槻2、桜1、西1、緑1)
上尾5、春日部3、川口3、越谷2、各1名 (川越、白岡、吉川、伊奈、桶川、朝霞、東京)
不明 3名

相談対象者人数 64名

性別 男24名 女38名 (不明2)

年齢分布 (不明1)

20歳以下	15
21～30歳	5
31～40歳	8
41～50歳	6
51～60歳	5
61～70歳	10
71歳以上	14

但し、相談に来た本人の性・年齢か、相談の対象としている親族などの性・年齢か判別不能例あり

相談内容 (重複あり)

アトピー性皮膚炎18、湿疹12、食物アレルギー4、妊娠と皮膚炎3、爪の変形3、
接触性皮膚炎2、ステロイド2、皮脂欠乏症2、全身の痒み2、掌蹠膿疱症2、ほくろ2

その他1件ずつ

湿疹と輸血の関係、じんま疹、酒さ、顔面の赤み、ニキビ、足白癬、カポジ水痘様発疹症、PHN、下腿の色素斑、膝の黒ずみ、目の周りのクマ、脂漏性角化症、老人性血管腫、スキントッグ、ケロイド、脱毛、腋臭、手の腫張、関節の腫れ、紫外線、化粧品、食事、痩せ

皮膚の日のイベントの一つとしてお肌のトラブルの無料相談を実施。相談医として皮膚科医学会の先生方13名と労務提供のMRさん3名

< 会員親睦委員会 >

第4回埼玉デルマ会ゴルフコンペに優勝して

春日部市・さくら皮膚科

横井 清

第4回埼玉デルマ会ゴルフコンペが2013年10月6日（日）武蔵OMGゴルフクラブにおいて、埼玉県皮膚科医会の先生方15名の参加にて開催されました。

朝、春日部を出るときの天候は小雨でしたが、インターチェンジへ行く道を間違えている間に曇りとなり、コンペ開始時には無風のゴルフ日和となりました。

初参加で緊張しておりましたが、同伴者（仲 弥会長、町野 哲先生、マルホ株式会社の大屋さん）に恵まれ、和気あいあいとかつりラックスしてスタートを切ることができました。町野先生はこのゴルフコースのすぐ近くにお住まいで、ゴルフをする環境としては抜群と思われましたが、診療と子育てにお忙しく、スコアがまいちでした。大屋さんは体育会に所属していただけあって、素晴らしく豪快なティーショットを連発していました。そして仲先生は基本に忠実でかつステディなゴルフでした（これはゴルフに限らずすべてのことに対してみたいですね）。

私かというと、数か月前に行われた春日部医師会のコンペではブービーでした。でも、ブービーの賞品が結構よくて、今回も狙えるのはブービーしかないと思っておりました。仲先生のように基本に忠実でかつステディなゴルフをと心がけながらプレーした結果は out 40 と最近出したことがないようなスコアとなりました。しかし、昼食後「よし後半も」と気合を入れた10番ホールは11と大叩き。かなりがっかりして、「このホールは隠しホールだから優勝に近づきました」と嘯いていましたら本当になってしまいました。ちなみにMRさんも入れたスコア集計（23名）では、2位はグロス70（なんと2アンダー！）の方でしたが、その方のハンディは0で私のハンディは20.4で優勝することができました。豪華な優勝賞品をもらって帰る途中で、「こんなにいつべんにツキを使っていいのかな」と不安になってしまいました。



第4回ゴルフコンペ 武蔵OMGゴルフクラブにて

“武蔵国の丘陵地にのびやかに展開する18ホールズは、「すべての人に楽しんでいただけるゴルフコース」を基本理念に、美しいコースの景観を楽しみながら、ゆとりあるひとときをお過ごしいただけるよう考えられています。”とホームページに書かれてあるように、武蔵OMGゴルフクラブではゆったりとストレスなくラウンドすることができました。このようは素晴らしいゴルフ場で準備万端にコンペを企画して頂いた幹事の阿部稔彦先生に深謝いたします。

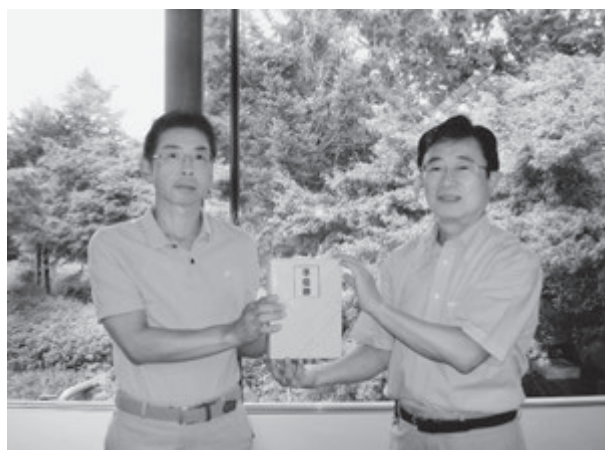
今年のコンペは2014年10月5日（日）に予定されています。皆様もぜひご参加いただき、一緒にゴルフを楽しみましょう！

第4回【埼玉デルマ会】成績表

順位	氏名	OUT	IN	グロス	HDCP	ネット
優勝	横井 清	40	48	88	20.4	67.6
準優勝	久保 和夫	47	47	94	21.6	72.4
3位	阿部 稔彦	44	45	89	15.6	73.4
3位	長村 洋三	43	46	89	15.6	73.4
5位	渡邊 泰弘	41	39	80	6.0	74.0
6位	渡部 利枝子	42	44	86	12.0	74.0
7位	大西 善博	45	45	90	15.6	74.4
8位	池村 郁男	46	47	93	18.0	75.0
9位	佐山 重敏	49	51	100	24.0	76.0
10位	山本 明史	50	55	105	27.6	77.4
11位	仲 弥	45	47	92	14.4	77.6
12位	佐藤 良博	50	48	98	18.0	80.0
13位	中村 晃一郎	54	52	106	25.2	80.8
14位	寺木 祐一	53	49	102	20.4	81.6
15位	町野 哲	50	60	110	22.8	87.2



優勝の横井先生（左）



準優勝の久保先生（左）

埼玉県皮膚科治療学会

埼玉県皮膚科治療学会の記録 1995～2014年

埼玉医科大学総合医療センター皮膚科
埼玉県皮膚科治療学会 会長 伊崎 誠一

埼玉県皮膚科治療学会は平成7年（1995年）1月28日（土）午後4：00から浦和東武ホテルで開催された第一回の会合から始まる。講演会に先立ち、本学会設立総会を行い、竹村 司初代会長が選出され、私も柳川 茂埼玉県立がんセンター皮膚科部長（当時）とともに副会長としてお手伝いすることになった。本学会の目的は、新しい治療法ならびに治療薬について会員にその実践的知識を広め、同時に薬物副作用についての情報を集約し、会員に注意を喚起することを二本柱とするものであった。また医師主導型の治験（自主研究）を行い、学会発表に対する研究費補助を行う事も重要な活動目的とした。医師主導型の治験は、治験のあり方に関する先駆的なものであったと言わざるを得ない。第一回の本学会では早速話題の薬剤の効果として、3剤の治療成績について講演があった後、作家 野坂昭如氏による特別講演「患者として」と題する講演を聞いた。以来おおむね年2回の学会を開催し、これまで20年間、39回の学会を重ねてきた。

平成7年（1995年）7月2日（日）には第二回の埼玉県皮膚科治療学会をパレスホテル大宮4階のローズルームで開催し、薬の副作用の集計に関するアンケート調査を開始、私が担当することになった。またこの時は5剤の薬剤と副作用の講演の後、政治評論家 三宅久之氏による「日本の未来と野次馬政治学」というテーマの特別講演を聞いた。

平成9年の第六回以後は埼玉県皮膚科医会と表裏一体の開催となり、同日同会場すなわち大宮駅ビルのホワイトルームでの開催が続いた。会の後、同じフロアの中華料理店で今後の会の方針などを話し合うのが楽しみであった。例外として平成10年（1998年）2月15日（日）は瘡に関する総合的な討論会をシンポジウム形式で、浦和市の埼玉県民健康センター大ホールにて行った。その後の埼玉県の皮膚科医による皮膚の日の活動などにつながる最初の試みであったかもしれない。またこの会場では平成12年（2000年）6月11日（日）にも第12回の本学会を行った。平成13年（2001年）の秋からは会場を主としてラフレさいたまに移して開催されるようになり、今日に至っている。

埼玉県皮膚科治療学会が行った医師主導型治験（自主研究）で取り上げた薬剤は、イトリゾール、アイピーディー（臨床医薬17（1）：77-86、2001）、アレグラ、ダレン、オキサロール軟膏、タリオン（新薬と臨牀60（2）：306-313、2011）など多岐にわたり、その成績を論文として発表し得たものもあり、なかなかの成果と思われる。

副作用アンケート調査については、会員数約200名のうち半数程度の方々の協力を得て、第一回の集計結果を平成9年（1997年）11月9日に開催された第7回埼玉県皮膚科治療学会にて発表し、さらに皮膚病診療1998；20（9）：816-821に論文として発表した。その後さらに日本臨床皮膚科医学会雑誌2002；73：185-190ならびに日本皮膚アレルギー学会雑誌2004；12（2）：45-51にも続編を発表し、全国に埼玉県の副作用調査を発信した。しかしこのようなアンケート調査については、その調査方法に限界があり、現在中断、変わって平成21年度から加藤卓朗副会長のもと、皮膚疾患の治療に関する実態アンケートに引き継いだ。

平成21年（2009年）からは竹村会長から私が引き継いで会の運営を担当することになった。副会長として永井 寛先生、加藤卓朗先生に御願いすることになった。前会長の方針を引き継ぎ、同時に新しい時代に適応するべく、奮闘が続いている。製薬会社が合併あるいは経営方針が変化し、また社会から種々の公的団体に対する観察・批判の眼が厳しくなり、情報公開や透明性の確保に努めなければならない。高齢化社会、超高齢化社会への適応も勿論重要である。また埼玉県皮膚科医会、日本臨床皮膚科医会との関係も模索中である。そのような中、平成23年（2011年）3月11日にはあの東日本大震災があり、東北地方の被災地域、被災者の方々との長期にわたる連携を続けることが重要となった。

この頃、乾癬の新たな治療法の開発を受けて、平成22年（2010年）11月14日（日）に開催された第33回埼玉県皮膚科治療学会において、サブミーティングとしての第一回生物学的製剤治療研究会を開催した。抗TNF α 製剤の重症乾癬に対する効果はこれまでの治療効果と比較にならないものであったが、種々の予測される副作用の問題と使用できる施設の制限があるため、この治療法の正確な位置づけを行う必要があったためである。現在まで6回の会議を経て、病診連携の新しい方法を確立していく段階となっている。これも埼玉県皮膚科治療学会が活動する分野として意義深いものとなろう。

埼玉県皮膚科治療学会は現在年2回、2月および11月に、埼玉県皮膚科医会と同日に、内容の重複が起きないように工夫しながら皮膚科医にとって実践的に役立つ勉強の場を提供している。今後時代の変化とともに要求される内容も変わらざるを得ないが、皮膚科医にとって新しい治療と副作用についての二本柱を中心としながら実際に役立つ情報提供の場として発展させていきたい。

平成25年度 埼玉県皮膚科治療学会事業報告

1. 総会ならびに学術大会

平成25年2月3日（日）、於 ラフレさいたま
役員会
平成25年度総会

平成25年11月17日（日）、於 ラフレさいたま
第6回生物学的製剤治療研究会

- 1) 「数種の生物学的製剤を使用した Non-responder の1例」
さいたま赤十字病院皮膚科 塚原理恵子
- 2) 「インフリマキシマブ投与検討中の1歳男児膿疱性乾癬の1例」
自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科 山田朋子
- 3) 「当院の乾癬患者におけるウステキヌマブの有効率と長期成績」
埼玉医科大学総合医療センター皮膚科 寺木祐一

埼玉県地域連携パスの紹介

埼玉医科大学総合医療センター皮膚科 伊崎誠一

役員会

第38回埼玉県皮膚科治療学会

- 1) 「ペンレステープの使用経験」
社会保険大宮総合病院皮膚科 梅本尚可
 - 2) 「帯状疱疹後神経痛に対するトラムセット（トラマドール塩酸塩／アセトアミノフェン配合錠）の有用性および安全性の検討」
さいたま赤十字病院皮膚科 成田多恵
 - 3) 「帯状疱疹後関連痛に対するノイロトピンの効果」
済生会川口総合病院皮膚科部長 加藤卓朗
- 特別講演（埼玉県皮膚科医会特別講演と共同企画）
「ライソゾーム病の臨床像と治療 ―ムコ多糖症とファブリ病の皮膚病変を中心に―」
埼玉県立小児医療センター代謝内分泌科科長兼部長 望月 弘

平成26年1月11日（土）

常任理事会

2. アンケート調査

皮膚科治療の実態を調査し、集積、解析、報告

テーマ：「抗アレルギー薬」

埼玉県皮膚科治療学会会員アンケート2013結果報告

埼玉県皮膚科治療学会 会長 伊崎 誠一

副会長 加藤 卓朗 (担当/文責)

テーマ：抗アレルギー薬

2013年7月実施 送付数：180 回答数：94 回答率：52.2%

注意・確認事項

1. 薬理効果が異なるインターール、IPD、リザベンは含まない。
2. ゼスラン／ニポラジンは抗ヒスタミン薬とする。
3. 後発品を使用している場合も先発品を回答する。

1. 抗アレルギー薬と抗ヒスタミン薬の選択

	抗アレルギー薬が多い	ほぼ同じ	抗ヒスタミン薬が多い	無回答
蕁麻疹	85	6	3	0
アトピー性皮膚炎	87	5	2	0
尋常性乾癬	83	6	4	1

2. 抗アレルギー薬の選択で重視する項目

	3項目選択	最重視
効果	91	70
副作用	76	14
用法	55	1
併用禁忌薬／注意薬の有無	20	3
保険適応	10	1
会社やMRの姿勢	8	0
併用する抗ヒスタミン薬との相性	6	0
後発品	6	0
剤形	5	0
薬価や利益	3	0
漢方薬との併用(分散可能か)	1	0
無回答	1	5

3. 用法(1日1回と2回)に基づく選択

1日1回が多い	ほぼ同じ	1日2回が多い
17	37	40

4. 最長処方期間

2週	2
3週	0
4週～1か月	32
6週	5
8週～2か月	40
12週～3か月	15
それ以上	0

5. 小児用製剤の剤形(シロップ／顆粒と錠剤)の選択

	シロップ／顆粒が多い	ほぼ同じ	錠剤が多い	無回答
医師の選択	63	16	13	2
患者／家族の希望	55	21	14	4

6. 実際に処方した抗アレルギー薬（成人用）

	処方薬すべて	最多
アゼブチン	21	0
アレグラ	86	27
アレジオン	77	11
アレロック	88	21
エバステル	52	1
クラリチン	71	4
ザイザル	81	8
ザジテン	41	1
ジルテック	59	3
セルテクト	36	0
タリオン	74	16
レミカット／ダレン	21	0
無回答	1	2

あいうえお順（以下同じ）

7. 最も効果が高い薬、最も副作用が少ない薬

	効果が高い	副作用が少ない
アゼブチン	0	0
アレグラ	5	59
アレジオン	7	8
アレロック	54	0
エバステル	3	1
クラリチン	0	17
ザイザル	10	4
ザジテン	0	1
ジルテック	3	0
セルテクト	1	0
タリオン	6	2
レミカット／ダレン	3	0
無回答	2	2

8. 理想的な効果が高く、眠気が少ない薬の有無、ある場合はその薬名（複数回答可）

ある	ない	無回答
39	53	2

コメント; 増量すれば／増量が必要

アゼブチン	0
アレグラ	24
アレジオン	8
アレロック	3
エバステル	1
クラリチン	8
ザイザル	10
ザジテン	0
ジルテック	0
セルテクト	1
タリオン	12
レミカット／ダレン	0
無回答	3

大宮皮膚科医会

大宮皮膚科医会 会長 坂本 哲也
大宮皮膚科医会 前会長 松本 吉郎

平成25年5月に、カネボウ化粧品のロドデノール配合の美白化粧品による白斑の被害が明るみに出たことで、大宮皮膚科医会としても何らかの対策が必要となるのか心配を致しましたが、混乱を招くには至らずに収束に向かったことで、安堵した次第です。

平成25年度も坂本哲也会長の下で例年同様の活動を通じて、医会の結束を更に高めると共に、弱小医会（会員数15名）の存在感を示すことが出来たと思っております。

平成25年度の活動については、学術講演会を中心とした活動と併せて、医師会活動等においても、昨年同様に行って参りました。また、診療面においては、医会会員の多くは、開業医として地域医療の一翼を担っているものの、多様化する皮膚科疾患に対応するためには、高度医療を有する基幹病院との連携を必要とするとは言うまでもありません。幸い、当会には、自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科教授の出光俊郎先生が居られることから、出光俊郎先生のご指導の下で同医療センターをはじめとして、基幹病院等の皮膚科との間で連携を強化しております。

□学術講演会

1. 大宮皮膚科医会学術講演会

日時 平成25年6月21日（金）午後7時30分～
会場 ラフレさいたま
演題 皮膚疾患に対する抗ヒスタミン薬治療 up-to date
～アトピー性皮膚炎、蕁麻疹を中心に～
講師 自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科
教授 出光俊郎 先生
座長 坂本皮膚科 院長 坂本哲也



出光俊郎 先生

2. 第3回さいたま市4医師会合同皮膚科学術講演会

日時 平成25年10月7日（月）午後7時45分～
会場 浦和ロイヤルパインズホテル
演題 アトピー性皮膚炎治療の現況と今後の可能性
講師 NTT 東日本関東病院 皮膚科部長 五十嵐敦之 先生
座長 今泉皮膚科医院 院長 今泉俊資 先生



五十嵐敦之 先生

3. 第13回医学講座（大宮医師会との共催）

日時 平成25年11月8日（金）午後7時30分～
会場 パレスホテル大宮
演題 レーザー治療でどこまで治せるのか？
講師 帝京大学医学部皮膚科主任教授
医真菌研究センター教授 渡辺晋一 先生
座長 松本皮膚科形成外科医院 院長 松本吉郎



渡辺晋一 先生

□情報交換会

1. 大宮皮膚科医会忘年会

日 時 平成25年12月19日（木）午後7時30分～

会 場 ちろり

□大宮医師会・行政・地域医療等の活動

1. 医師会役員・委員等

松本 吉郎：医師会会長、人事評価委員長 等

石田 卓：広報担当理事、情報・調査委員長 等

大田 桂一：前立腺がん検診委員長、学術委員 等

小野まり子：保険委員

本家 貴子：介護認定審査会委員

古谷 信隆：前立腺がん検診委員

2. 学校医（一般医として委嘱されている）

福井 康雄：桜木小学校、坂本 哲也：指扇中学校

大田 桂一：宮前中学校、松本 吉郎：春野小学校

3. 看護学校講師

福井 康雄：大宮医師会看護専門学校

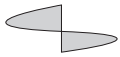
松本 吉郎：大宮医師会立大宮准看護学校

（敬称略）

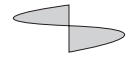
4. 会員動向

大宮医師会 会員種別	氏 名	医 療 機 関 名
正 会 員	石 田 卓	いしだ皮フ科
正 会 員	大 田 桂 一	大田医院
正 会 員	児 島 壯 一	宮原皮膚科
正 会 員	坂 本 哲 也	坂本皮フ科
正 会 員	高 橋 生 世	あづま皮膚科
正 会 員	福 井 康 雄	桜木皮膚科
正 会 員	古 谷 信 雄	古谷医院
正 会 員	松 本 吉 郎	松本皮膚科形成外科医院
正 会 員	本 家 貴 子	みやざき皮膚科
準 会 員	梅 本 尚 可	大宮総合病院
準 会 員	小 川 史 洋	東大宮総合病院
準 会 員	小 野 まり子	小野整形外科皮膚科
準 会 員	出 光 俊 郎	自治医大さいたま医療センター
準 会 員	古 谷 信 隆	古谷医院
準 会 員	山 村 美 和	七里外科

50音順敬称略



春日部皮膚科勉強会



春日部ヒフ科 矢島 純

春日部での皮膚科勉強会は、春日部市立病院皮膚科部長であった外島清臣先生のご提案で、昭和57年頃から始まったと伺っています。同部長職を継がれた岡本竹春先生により、さらに盛んになったよう（私は平成に入ってから参加で、詳細不明）ですが、岡本先生が亡くなられて自然消滅したこと、その後何となく始まった春日部皮膚科勉強会のことは、前号のとおりです。

初代の外島先生も2代目の岡本先生もお亡くなりになっている現在、春日部皮膚科勉強会の存続理由、目指すところは何かといえば、地元皮膚科医同士の親睦や情報の共有化を図りながら、お互いに皮膚科の研鑽を積み、その結果が患者に有利に還元されることかと考えます。この辺は会員同士で漸次明確化していく必要があるかと思えます。

以前は、日本大学皮膚科の同窓生が中心メンバーとなり、酒肴の席で一枚のスライドをめぐって、病名など、喧々諤々と唾を飛ばすことができた、大らかな時代でした。一枚の画像を見ながら、上下の関係を越えてホロ酔い気分好きなことを論じあえるというのは、目だけが異常発達した我々にとっては、皮膚科医冥利に尽きると考えられます。

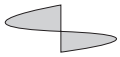
今は、勉強会と懇親の場は厳密に切り離さなければならないという時代ですが……。

その後は、前号にある横井先生の記録の通りです。

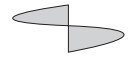
極めて少人数の集まりではありますが、そのおかげで地域の皮膚科医同士の交流が円滑にできることや講師の先生との距離感も近くなり、普段の講演会ではなかなか聞くことができないような実践的な話も直接的に聞くことができ、また、翌日からの実地臨床に活力をもらうことができ、嬉しいです。

平成25年度は、以下の2回開催されています。

- 6月8日（土）片桐一元先生（獨協医科大学越谷病院皮膚科教授）「内臓悪性腫瘍を検索すべき皮膚疾患」
- 11月16日（土）田中 勝先生 「足底色素細胞母斑の診かた」



本庄児玉皮膚科勉強会



恵南クリニック 佐々木 亮

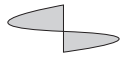
本庄児玉皮膚科勉強会は、本庄市児玉郡医師会の皮膚科医の親睦と日常診療の情報交換の場として、皮膚科を専門とする医師4名で集いました。翌年、他の診療科で皮膚科を標榜している先生方にも裾野を広げて、皮膚科診療のスキルアップを目指した勉強会にしようとして平成15年に発足しました。

当初は、症例発表、検討会方式で行ったり、他科の先生方の要望で、疥癬、しみ、ほくろの診断、治療の話をしたりしておりました。その後、日頃から病診連携で大変お世話になっている深谷赤十字病院と利根川を挟んだ群馬県の伊勢崎市民病院の先生方と、お互いの顔が見える関係を築こうということで声を掛け、参加して頂けるようになりました。そこで、病院の先生方にも得意な分野の演題を発表して頂くことで、参加している先生方にもそれぞれの病院の先生の専門性が分かるようになり、今までよりもより良い病診連携ができるようになったと思います。

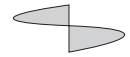
毎回、参加人数はおおむね10名から15名程度です。春と秋に行っている勉強会のうち1回はエキスパートの先生にお願いをして、他科の先生方にも興味を持てる内容の講演をいただいております。現在までに19回の勉強会を開催してきましたが、他科の先生方にも大変好評を頂いております。

以下に、主なものを記載しました。

- | | |
|----------------------------------|---------------------|
| 第4回、H.16.11. メラノーマの診断～ほくろとの鑑別 | 鈴木 正先生 (諏訪皮膚科) |
| 第5回、H.17.5. 薬剤過敏症症候群 (DIHS) について | 難波純英先生 (深谷日赤) |
| 第6回、H.17.11. Qスイッチルビーレーザーに関して | 澁谷修一郎先生 (帝京大学 (医)) |
| 第7回、H.18.5. 蛇咬傷について | 加藤正幸先生 (深谷日赤) |
| まむしに咬まれた症例 | 高橋脩也先生 (高橋外科整形外科) |
| しみに対するトレチノイン療法 | 佐々木恵美子先生 (恵南クリニック) |
| 第8回、H.18.12 尋常性乾癬の治療 | 長谷川道子先生 (伊勢崎市民病院) |
| 第9回、H.19.6 糖尿病足病変と鑑別疾患 | 滝口光次郎先生 (深谷日赤) |
| 第10回、H.19.12 診療所で日頃見るこんなものが危ない | 清原祥夫先生 (静岡がんセンター) |
| 第11回、H.20.6 膠原病を見分けるには | 田村政昭先生 (伊勢崎市民病院) |
| 第12回、H.20.12 EBM に基いたニキビ治療 | 渡辺晋一先生 (帝京大学 (医)) |
| 第13回、H.21.6 ダーモスコピーの有効利用 | 田口理史先生 (深谷日赤) |
| 第14回、H.21.12 ステロイド外用剤の使い方 | 澁谷修一郎先生 (本庄皮膚科形成外科) |
| 第15回、H.22.6 薬疹について | 安井宏仁先生 (深谷日赤) |
| 第16回、H.22.12 QOL をめざした皮膚科治療 | 田口理史先生 (深谷日赤) |
| 第17回、H.23.6. 皮膚癌 (基底細胞癌) について | 宮野恭平先生 (深谷日赤) |
| 梅毒について | 澁谷修一郎先生 (本庄皮膚科形成外科) |
| 第18回、H.24.1 膠原病を見逃さないように | 土田哲也先生 (埼玉医大) |
| 第19回、H.25.2 日常的な皮膚外科手術のコツと注意点 | 田村敦志先生 (伊勢崎市民病院) |



“川越 Dermatology Club” 開催記録



埼玉医大総合医療センター皮膚科
伊崎 誠一

昨年号に“川越 Dermatology Club”の記録（第1回から第43回まで）を掲載した。本号では重複を避けてその後の開催記録のみ掲載する。

本会の趣旨、意義については前号を参照して頂きたい。

<川越 Dermatology Club 2013-2014 記録>

回	年/月/日 (曜日)	会 場	講 師	テ ー マ
44	2013/6/20 (木)	氷川会館	矢澤 康男	軟部肉腫（第一回埼玉医大軟部腫瘍合同カンファレンスとの合同開催）
45	2013/9/19 (木)	川越プリンスホテル	山本 俊幸	関節症乾癬と膿疱性乾癬
46	2013/11/23 (土)	川越プリンスホテル	寺木 祐一	最近の薬疹の話題
47	2014/2/13 (木)	氷川会館	人見 勝博	成人型 IgA 血管炎（川越皮膚科医会との合同開催）

埼玉県皮膚科医会役員名簿

任期：平成26年4月1日～平成28年3月31日

役職名	氏 名	所 属
名誉会長	長 村 洋 三	長村皮膚科クリニック
会 長	仲 弥	仲皮フ科クリニック
副 会 長	伊 崎 誠 一	埼玉医科大学総合医療センター
〃	矢 島 純	春日部ヒフ科医院
常任理事	今 泉 俊 資	今泉皮ふ科医院
〃	片 桐 一 元	獨協医科大学越谷病院
〃	加 藤 卓 朗	済生会川口総合病院
〃	久 保 和 夫	久保皮膚科医院
〃	倉 持 朗	埼玉医科大学病院
〃	田 沼 弘 之	田沼皮膚科医院
〃	出 光 俊 郎	自治医科大学附属さいたま医療センター
〃	寺 木 祐 一	埼玉医科大学総合医療センター
〃	藤 本 典 弘	防衛医科大学校病院
〃	松 本 吉 郎	松本皮膚科形成外科医院
理 事	石 塚 敦 子	石塚外科医院 皮膚科
〃	井 上 靖	井上皮膚科医院
〃	大 島 康 成	大島皮ふ科・形成外科
〃	奥 野 哲 朗	奥野皮膚科
〃	神 崎 俊 一	神崎皮フ科クリニック
〃	齋 藤 京	さいたま市立病院
〃	佐 藤 貴 浩	防衛医科大学校病院
〃	土 田 哲 也	埼玉医科大学病院
〃	坪 井 るみ子	島田医院
〃	中 村 晃一郎	埼玉医科大学病院
〃	成 田 多 恵	さいたま赤十字病院
〃	町 野 哲	町野皮ふ科
〃	山 本 明 史	埼玉医科大学国際医療センター
〃	横 井 清	さくら皮フ科
監 事	永 井 寛	永井皮膚科
〃	中 井 太 一	中井皮膚科医院
顧 問	池 田 重 雄	埼玉医科大学病院
〃	石 橋 明	石山記念病院
〃	北 村 啓次郎	埼玉医科大学総合医療センター
〃	多 島 新 吾	並木病院
参 与	竹 村 司	志木駅前皮膚科

埼玉県皮膚科医会各種委員会名簿

任期：平成26年4月1日～平成28年3月31日

学術委員会

委員長 伊崎誠一
 委員 今泉俊資 片桐一元 倉持朗 佐藤貴浩
 土田哲也 出光俊郎 寺木祐一 中村晃一郎
 藤本典宏 山本明史

会則検討委員会

委員長 永井寛
 委員 伊崎誠一 中井太一

健保委員会

委員長 田沼弘之
 委員 井上靖 伊崎誠一 今泉俊資 奥野哲朗
 小宅慎一 加藤卓朗 鈴木忠彦 出光俊郎
 永井寛 町野哲

地域医療委員会

委員長 加藤卓朗
 委員 奥野哲朗 佐瀬くらら 高河慎介 田沼弘之
 矢島純

日臨皮委員会

委員長 伊崎誠一
 委員 石塚敦子 今泉俊資 加藤卓朗 田沼弘之
 永井寛 成田多恵

広報委員会

委員長 寺木祐一
 委員 秋元幸子 石田卓 齋藤京 人見勝博
 町野哲 松本吉郎 横井清

皮膚の日委員会

委員長 久保和夫
 委員 石塚敦子 今泉俊資 内ヶ崎周子 倉片長門
 坪井るみ子 成田多恵 矢島純 横井清

会員親睦委員会

委員長 寺木祐一
 委員 阿部稔彦 入江広弥 大島康成 佐藤良博
 佐山重敏 林原義明 松本吉郎 渡部利枝子

埼玉県皮膚科医会賛助会員 (34社)

	会 員 名	郵便番号	住 所	電話番号
ア	株式会社アイ・ティー・オー	180-0006	東京都武蔵野市中町1-6-7 3F	0422-60-3434
	アクセーナ株式会社	531-0072	大阪府大阪市北区豊崎3-19-3 ピアスタワー	06-6376-5576
	株式会社アブソルート	231-0013	神奈川県横浜市中区住吉町6-69 馬車道STビル4F	045-228-8885
	エーザイ株式会社	350-1123	川越市脇田本町15-10 三井生命川越駅前ビル8F	049-245-6321
	MSD株式会社	330-6012	さいたま市中央区新都心11-2 LAタワー12F	0120-860-744
	大塚製薬株式会社	362-0022	上尾市瓦葺929-1	048-722-8514
カ	科研製薬株式会社 さいたま営業所	331-0812	さいたま市北区宮原町2-18-15 リラ第1ビル4F	048-647-4671
	ガルデルマ株式会社	100-6174	東京都新宿区西新宿8-17-1 新宿グランドタワー34F	03-5937-3815
	協和発酵キリン株式会社	350-1122	川越市脇田町18-6 川越小川ビル1F	049-226-8400
	グラクソ・スミスクライン株式会社	330-0802	さいたま市大宮区宮町4-122 大宮第一生命小峯ビルディング7F	0120-561-007
	クラシエ薬品株式会社	330-0844	さいたま市大宮区下町1-45 松亀センタービル3F	048-645-5011
	株式会社ケイセイ	141-0022	東京都品川区東五反田5-27-5	03-5421-3787
	興和創薬株式会社	338-0001	さいたま市中央区上落合8-10-24	048-851-5154
サ	佐藤製薬株式会社	107-0051	東京都港区元赤坂1-5-27	03-5412-7818
	サノフィ株式会社	330-8669	さいたま市大宮区桜木町1-7-5 ソニックシティビル28F	0120-852-297
	塩野義製薬株式会社	331-0811	さいたま市北区吉野町2-234-1	048-662-4861
タ	第一三共株式会社 東京第二支店	330-6033	さいたま市中央区新都心11-2 LAタワー33F	048-600-2660
	大正富山医薬品株式会社	170-8635	東京都豊島区高田3-25-1	03-3958-1133
	大日本住友製薬株式会社	330-0802	さいたま市大宮区宮町2-35 大宮MTビル6F	048-649-7011
	大鵬薬品工業株式会社	362-0022	上尾市瓦葺929-1	048-721-4527
	田辺三菱製薬株式会社	330-0854	さいたま市大宮区桜木町1-10-17 シーノ大宮サウスウイング15F	048-745-2911
	株式会社ツムラ	330-0854	さいたま市大宮区桜木町1-9-6 大宮センタービル4F	048-647-5233
	帝人ファーマ	338-0001	さいたま市中央区上落合2-11-27 アーバン・V北与野ビル3F	048-858-6881
	常盤薬品工業株式会社 ノブ事業部	330-0802	さいたま市大宮区宮町3-1 明治安田生命大宮ビル5F	048-648-3001
	鳥居薬品株式会社 南関東支店	336-0027	さいたま市南区沼影1-10-1 ラムザタワー3F 8号	048-844-2511
ナ	日本臓器製薬株式会社 さいたま営業所	330-0835	さいたま市大宮区北袋町1-82 産晃ビル	048-640-6441
	日本ベーリンガーインゲルハイム	330-0854	さいたま市大宮区桜木町1-11-3 八十二大宮ビル7F	048-658-0250
	ノバルティス ファーマ	330-0846	さいたま市大宮区大門町3-42-5 太陽生命大宮ビル10F	048-644-6421

ハ	バイエル薬品株式会社	530-0001	大阪府大阪市北区梅田2-4-9	06-6133-6200
	株式会社ポーラファルマ	359-1152	所沢市北野1-2-5	04-2948-4041
マ	マルホ株式会社 関東支店	330-0802	さいたま市大宮区宮町2-35 大宮MTビル4F	048-642-1954
	武蔵野調剤薬局グループ	338-0001	さいたま市中央区上落合8-3-27	048-854-3605
	持田製薬株式会社	335-0004	蕨市中央1-26-1 T-1ビル3F	048-444-9911
ヤ	ヤンセンファーマ株式会社	330-0063	さいたま市浦和区高砂2-2-3 埼玉浦和ビルディング8F	03-5793-7488

埼玉県皮膚科医会 会則

第1条 本会は、埼玉県皮膚科医会と称し、埼玉県医学会に所属する。

第2条 本会事務所は、埼玉県医師会内に置く。

第3条 本会は、次の目的のために必要な事業を行う。

- (1) 臨床皮膚科学の発展普及と社会福祉の増進
- (2) 社会保険診療の調査研究
- (3) 学術講演会の開催
- (4) 会員相互の親睦融和
- (5) その他必要な事項

第4条 本会の会員は、正会員と賛助会員とする。

1. 正会員は、原則として埼玉県において皮膚科診療に従事する医師。
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同する正会員以外の個人、団体で本会の主催する事業に参加を希望する者。

第5条 本会に入会しようとする者は、住所氏名を記入し、会費を添えて会長に提出するものとする。

第6条 本会に次の役員を置く。

会 長 1 人
副 会 長 3 人以内
理 事 若 干 名
常任理事 10名以内
監 事 2 人

2. 会長は、総会において施行細則に基づき正会員より選出する。副会長、理事、常任理事、監事は会長が正会員の中から指名し、総会で承認を得る。
3. 会長が必要と認めたときは、埼玉県医師会会長の推薦する者を理事に委嘱することができる。

第7条 会長は、本会を代表し、会務を総理する。

副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

理事は会務を分担して処理する。

常任理事は理事の中から選出し、会務分担、業務執行を円滑にする。

監事は、会務及び財産状況を監査する。

第8条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

第9条 本会に学術、保険等各種委員会をおくことができる。その設置並びに委員については、役員会において決定するものとする。

第10条 本会に名誉会長、顧問、参与を置き、会長がこれを推薦することができる。

第11条 集会は、定例総会及び学術集会として年1回会長が招集する。ただし必要により臨時に招集することができる。

2. 総会の議長は、出席した正会員の中より選任する。
3. 総会の議決は、出席した正会員の過半数の同意をもってし可否同数のときは議長が決する。
4. 次に掲げる事項は、総会において議決又は承認を得なければならない。
 - (1) 事業計画及び収支予算に関する事項
 - (2) 収支決算に関する事項
 - (3) 会則の変更に関する事項

5. 会長は、次の事項を総会に報告するものとする。

- (1) 役員会における議事事項
- (2) 庶務及び会計報告
- (3) 事業報告

第12条 臨時総会は、役員会の議決又は正会員4分の1以上の要求がありたる場合に会長が招集する。

第13条 役員会は、会長が招集する。

次の事項は、役員会の議決を得なければならない。

- (1) 総会に提出すべき事項
- (2) 会務執行に関する事項
- (3) 会長が必要と認める事項

第14条 議決は、総て正会員出席者の過半数をもってしなければならない。可否同数のときは議長が決する。

第15条 本会の経費は会費及び寄付金、その他の収入をもってあてる。

第16条 本会の会費は、次のとおりとし、毎年4月に納入する。

- (1) 正会員 3,000円
- (2) 賛助会員 30,000円

ただし名誉会長、顧問、77歳を越えた正会員の会費は免除する。

第17条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第18条 総会及び役員会において議決した事項は、埼玉県医師会長に報告するものとする。

附 則	1. 昭和39年11月27日	施 行
	2. 昭和55年10月19日	一部改正
	3. 昭和59年5月27日	一部改正
	4. 昭和59年10月17日	一部改正
	5. 昭和61年10月26日	一部改正
	6. 平成3年5月12日	一部改正
	7. 平成4年7月5日	一部改正
	8. 平成6年5月29日	一部改正
	9. 平成8年5月26日	一部改正
	10. 平成9年11月9日	一部改正
	11. 平成10年9月27日	一部改正
	12. 平成15年5月11日	一部改正
	13. 平成24年6月10日	一部改正

埼玉県皮膚科医会施行細則

第1条 会長は、会長候補者推薦委員会が次期会長候補者名簿を総会に提出して選出する。

2. 会長候補者推薦委員会は、会長を除く役員会の議決により選出された正会員5名で構成する。

3. 会長候補者推薦委員長は、会長候補者推薦委員の互選による。

《埼玉県皮膚科医会会報投稿規定》

2013年11月改訂

会員の皆様がより充実した皮膚科医生活を送れるよう、また会員同士の親睦を深められるよう、内容のある、そして読んで楽しめる会誌を作成したいと思っております。そこで、委員会や例会の報告に加え、広く会員の皆様からのご投稿をお願いし、紙面の充実を図りたいと思います。

原稿はできるだけワープロ・パソコンで作成し、データをメールまたはCD-Rで送っていただければ幸いです。もちろん手書きの原稿も大歓迎です。

ただし、内容により、編集委員会が本誌に相応しくないと判断した場合には掲載をお断りすることもあります。

【文芸サロン】

写真、絵画、書、詩歌などご投稿ください。写真はカラー、モノクロとも一人2枚まで。題と簡単な説明文、また可能な限り撮影条件も記してください。なお、表紙写真（「埼玉の風物」がテーマ）はご投稿いただいた作品の中から編集委員会が選ばせて頂きます。

【随筆】

日常生活・診療の場や学会・旅行などで見聞・体験したこと、実践していること、心に浮かんだことなどを、気ままに自由な形式でお書きください。著者の顔写真のほか、スナップ写真、絵などを含め、2,500字以内でご執筆ください。

【マイホビー、いい店・好きな店】

趣味やごひいきのお店（飲食店に限らず、雑貨、文具など楽しいお店やお気に入りのお店、ただし県内に限ります）をご紹介ください。1,200字以内でご執筆いただき、写真、地図、電話番号などを添えてください。

【近況報告（クリニック・病院）】

クリニックや病院における最近の診療状況や取り巻く環境の変化など、近況をご報告ください。1,200字程度でご執筆いただき、写真を添えてください。

【入会挨拶】

卒業年、出身校、開業地、医療機関名は必ず記載してください。また顔写真のほか、入会のいきさつ、現在の状況、心境など自由に400字以内でご執筆ください。

<原稿送付先>

埼玉県皮膚科医会ホームページ (<http://saitamahifuka.org/>)、「会員ページ」内の会報投稿メールより、または下記編集委員会へご送付ください。

埼玉県皮膚科医会 会報編集委員会 宛

〒330-0062 さいたま市浦和区仲町3-5-1

埼玉県医師会内

TEL 048-824-2611

FAX 048-822-8515

編集後記

お陰様で昨年の創刊号に続き、今年も第2号を発刊することができました。継続することの難しさ、大切さを身に染みて感じる今日この頃です。本号は50周年記念号としましたが、節目、節目で過去を振り返り、将来を見通してみることが、非常に大切なことだと思います。その意味では本号を会員の皆様にお届けすることにより多少なりともその役目を果たせるかなと期待しております。お忙しい中祝辞を寄せていただいた諸先生、また随筆や活動報告をご執筆頂きました先生方、加えて真摯に編集に携わっていただいた委員の皆様、瑞穂印刷の菅野氏に感謝します。

(会長：仲 弥)

少しでも面白い雑誌にしようという思いで、皮膚科に関する雑学を豆知識の欄に色々書かせて頂きました。皮膚科のトリビアといえば浅井俊弥先生ですが、先生の蘊蓄にはとても及びませんが、役に立たない瑣末な知識、本来の意味でのトリビアという点に関しては負けてないと思っております。面白いと思ったネタを色々集めました。創刊号そして今回の2号とネタは尽きてきて、3号はどうしようかと思っております。会員の皆様、皮膚科に関する面白い雑学、豆知識がありましたら是非ご寄稿、ご連絡下さい。

(編集委員長：石田 卓)

仲 弥会長の巻頭言の「継続は力なり」を読んで思いました。イチローが記録を更新する際、「千里の道も一歩から」と小事の積み重ねの重要性が語られます。ただ、理解者である父（チチロー）が「万里の道も一歩から。同じ一歩でも千里とは覚悟が違う」とも。事を成す人は、覚悟して始め、工夫して継続するようです。

医会50周年における行事は充実し、今回の会報もよいものになりました。そこには、なにか工夫を施そうと思案する仲会長の穏やかな熱意を感じます。2010年の会長就任の際は、さぞ「万里の道の第一歩」の境地だったのでは？

私はというと第一歩を踏み出すのが苦手で、継続はおろか事が始まらない凡人です。勝手に感服するこの頃です。

(編集委員：齋藤 京)

昨年は、初めての会報作成だったので、試行錯誤しながらの編集だったように思われる。それに比べると、今回は2回目であり、編集のノウハウもある程度わかり、よりスムーズに編集することが出来たように思われる。今年は埼玉皮膚科医会50周年記念の年であり、それを大いに盛り込んだ内容となっており、昨年と違った意味で読み応えがある。この冊子が届く頃には、また、そろそろ来年号の編集の準備に取りかからなければならないが、永く愛読してもらうためには、常に内容の進歩が必要である。埼玉皮膚科医会50周年の区切りもつき、来年号はまた新たな気持ちで取り組みたい。

(編集委員：寺木祐一)

私の随筆に書いた日本人・欧米人・支那人の思想は各民族の傾向であって、日本人の中で見ても生まれ育ちが違えば育つ思想も違ってくるのは当然のことと思います。各個人にそれら三つの中から一つずつ当てはめて人間関係を見直すと実にしっくりくることを感じています。思想が違

うとうまくいかないのですね。将来、グローバル化という名を借りた米国の価値観の押し付け、移民の受け入れが進むと、人間関係の不和が必ず問題になってくると思います。埼玉県皮膚科医学会も無関係ではられないはずで、これから一体どうなるのだろうか、そんなことを考えながら生きております。我が埼玉医科大学総合医療センター皮膚科は、来年に30周年を迎えます。

(編集委員：人見勝博)

先日、小学生の息子が『古墳めぐり』に行ってきました。地元の歴史民俗資料館が主催したイベントです。マイクロバスで行ったと思っていましたが、歩いて見てきたそうです。持って帰ってきた地図には、すぐ近くにたくさんの古墳がありました。調べてみると近隣だけでも100基近く、埼玉県内には4,500基を超える古墳があります。そういえば、数年前に隣町で東日本最大級の窯跡群が見つかったニュースもありました。高句麗から移住してきた人たちの窯かもしれないそうです。当たり前ですが、埼玉にも途切れることなく続いてきた歴史があったことを意識しました。そして、50年後、100年後にこの会誌を読む人のことを考えました。

(編集委員：町野 哲)

多くの先生方から玉稿を賜り感謝しております。

5月11日ラフレさいたまにて、埼玉県皮膚科医学会50周年記念式典を開催しましたところ、多くの会員の先生方にご参加いただきありがとうございました。実行委員長を仰せつかってから1年間、多くの方々に助けていただきました。至らぬ点多々あったかと思いますが、御容赦頂ければ幸いです。

また次の第3号の発刊に向けて協力します。個人としても、新たな仕事に着手することになりました。新たな気持ちで頑張ろうと思います。

(編集委員：松本吉郎)

通し原稿の表紙とそれに続く格調高く鮮やかな写真を目にして、記憶から消えかかっていた50周年記念式典の様子が思い出されました。裏方としてバタバタと動き回っているときには考える余裕もありませんでしたが、こんなに立派な式典だったのかと改めて気付かされました。巻頭言から「30周年記念に寄せられた埼玉県皮膚科医学会のあゆみ」と「50周年に寄せて」を拝読すると、諸先輩方の歩んできた皮膚科医学会の変遷が手に取るように理解でき、後世に残すべき“お宝”ができたように感じます。そしてまた創刊号同様、個性あふれる随筆やマイホビーは大変楽しく読ませていただきました。

(編集委員：横井 清)

豆 知 識

『ニキビの語源』『ヒルドイド軟膏と蛭の不思議な関係』『メンソレータムと建築家ヴォーリス』『Hutchinsonがつく徴候は三つある』『なぜ頭ジラミは毛髪に寄生し、毛ジラミは陰毛に寄生するのか』『ヘイリー・ヘイリー病、何故ヘイリー・ヘイリーなのか』『シスター・ジョセフの小結節、シスター（修道女）に続いてジョセフ（聖母マリアの夫）という何故男性名が入るのか』『今では、報告されることのない*Microsporum ferrugium* という菌が、本邦での頭部白癬の原因の8～9割を占めていたという時代があった』『黒色面疱 albinismの人には生じない訳』『死ぬ前のことを何故、生前というのか？』

豆知識は石田 卓先生より資料をいただきました。

埼玉県皮膚科医会会報 第2号

(創立50周年記念)

印 刷 2014年7月10日

発 行 2014年7月18日

発行所 埼玉県皮膚科医会

〒330-0062 さいたま市浦和区仲町3-5-1

埼玉県医師会内

TEL. 048 (824) 2611

発行責任者 会長 仲 弥

編集委員長 石田 卓

編 集 委 員 齋藤 京、寺木祐一、人見勝博
町野 哲、松本吉郎、横井 清

印刷所 瑞穂印刷株式会社

〒164-0014 東京都中野区南台2-16-2

TEL 03 (5385) 2711 (代表)

(無断転載を禁ずる)

ISBN 978-4-89609-013-0 C3047